

弱楚者莫如梁。楚雖有富  
大之名。而實空虛。其卒雖多。然而輕走易北。不能堅戰。悉梁之兵。南面而伐楚。勝之必  
割楚而益梁。虧楚而適秦。嫁禍安國。此善事也。大王不聽臣。秦下甲士而東伐。雖欲事秦  
不可得矣。且夫從人多奮辭。而少可信。說一諸侯而成二封侯。是故天下之游談士。莫不日  
夜搯腕。瞋目切齒。以言從之便。以說中人主。賢其辭。而幸其說。豈得無眩哉。臣聞之。積  
羽沈舟。羣輕折軸。衆口鑠金。積毀銷骨。故願大王審定計議。且賜骸骨。辟魏。哀王於是乃  
倍從約。而因儀請成於秦。

りも積れば其の人の骨までも銷滅す ② 仕官を止め置く ③ 平和。和説

張儀歸。復相  
秦。三歲。而魏  
復背秦。爲從。  
秦攻魏。取曲  
沃。明年。魏復  
事秦。秦欲伐  
齊。齊楚從親。  
於是張儀往  
相楚。楚懷王  
閉張儀來。虛  
上舍。而自館

張儀歸りて復た秦に相たり。三歳にして魏復た秦に背きて從を爲す。秦魏を  
攻めて曲沃を取る。明年魏復た秦に事ふ。秦齊を伐たんと欲す。齊楚從親す。  
是に於て張儀往きて、楚に相たり。楚の懷王張儀來ると聞き、上舍を虚しくし  
て自ら之に館せしめて曰く、此れ僻陋の國。子何を以てか之に教ふると。儀楚  
王に説いて曰く、大王誠に能く臣に聽き、關を閉ぢ、約を齊に絶たば、臣請ふ  
商於の地六百里を獻じ、秦の女をして大王の箕帚の妾と爲るを得しめん。秦楚

之。曰。此僻陋  
之國。子何以  
教之。儀說楚  
王曰。大王誠  
能聽臣。閉關  
絶約於齊。里  
請獻商於之  
地六百里。使  
秦女得爲大  
王箕帚之妾。  
秦楚娶歸嫁  
女。長爲兄弟  
之國。此北弱  
齊而西益秦  
也。計無便此  
者。楚王大説  
而許之。羣臣  
皆賀。陳軫獨  
弔之。楚王怒  
曰。寡人不興

婦を娶り、女を嫁し、長く兄弟の國と爲らん。此れ北齊を弱めて西秦に益するなり。  
計 此れより便なる者無しと。楚王大に説いて之を許す。羣臣皆賀す。陳軫獨  
り之を弔す。楚王怒りて曰く、寡人師を興し兵を發せずして六百里の地を得。羣  
臣皆賀す。子獨り弔するは何ぞやと。陳軫對へて曰く、然らず、臣を以て之を  
觀るに、商於の地得べからずして、齊秦合せん。齊秦合せば則ち患必ず至ら  
んと。楚王曰く、説ありやと。陳軫對へて曰く、夫れ秦の楚を重かる所以の者は  
其の齊有るを以てなり。今關を閉ぢて約を齊に絶たば、則ち楚孤ならん。秦奚ぞ  
夫の孤國を貪らしめて之に商於の地六百里を與へん。張儀秦に至らば必ず王に  
負かん。是れ北齊の交りを絶ち、西患を秦に生ずるなり。而して兩國の兵必  
ず俱に至らん。善く王の爲めに計れば、陰かに合して、陽に齊に絶ち、人をして張  
儀に隨はしむるに若かず。苟くも吾に地を與へて、齊に絶つも未だ晚からず。  
吾に地を與へずんば、陰かに合するは、謀計なりと。楚王曰く、願はくは陳子口を

師發兵。得六百里地。羣臣皆賀。子獨弔。何也。陳軫對曰。不然。以臣觀之。商於之地不可得。而齊秦合。則患必至矣。楚王曰。有說乎。陳軫對曰。夫秦之所以重楚者。以有齊也。今閉關絕約於齊。則楚孤。秦奚食之。夫孤國而與之商於之地六百里。張儀至。秦必負王。是北絕齊交。西生患於秦也。而兩國之兵必俱至。善爲王計者。不若閉關而陽絕。於齊使人隨張儀。苟與吾地。絕齊未晚也。不與吾地。陰合謀計也。楚王曰。願陳子閉口毋復言。以待寡人得地。乃以相印授張儀。厚賂之。於是遂閉關。絕約於齊。使一將軍隨張儀。張儀至。秦詳失。綏墮車。不朝三月。楚王聞之。曰。儀以寡人絕齊。未甚耶。乃使勇士至宋。借宋之符。北罵齊王。齊王大怒。折節而下秦。秦齊之交合。

張儀乃朝。謂楚使者曰。臣有奉邑六里。願以獻大王。左右楚使者曰。臣受令於王。以商於之地六百里。不聞六里。還報楚王。楚王大怒。發兵而攻秦。陳軫曰。軫可發口言乎。攻之不如此割地。反以賂秦。與之并兵而攻齊。是我出地於秦。取償於齊也。王國尙可存。楚王

- 上等の旅宿
- 商も於も地名
- 人の妻にするを誘還していふ
- 擇る
- 若し秦が吾に地を與へざらんか、陰に齊と通じ置く事、誠に良計なり
- 車に乗る時に載る嗣
- 宋の地の門閭の旅券

張儀乃朝し、楚の使者に謂ひて曰く、臣奉邑六里有り。願はくは以て大王の左右に獻せんと。楚の使者曰く、臣令を王より受くるに、商於の地六百里を以てす。六里と聞かずと。還りて楚王に報ず。楚王大に怒り、兵を發して秦を攻む。陳軫曰く、軫口を發きて言ふべきか。之を攻めんよりは地を割くに如かず。反つて以て秦に賂ひ、之と兵を并せて齊を攻めば、是れ我地を秦に出して償を齊より取るなり。王の國尙ほ存すべしと。楚王聽かず。卒に兵を發して將軍屈匄をして秦を撃たしむ。秦齊共に楚を攻め、首を斬ること八萬。屈匄を殺し、遂に丹陽漢中の地を取る。楚又復た益々兵を發して秦を襲ひ、藍田に至り大に戰ふ。楚大に敗る。是に於て楚兩城を割きて以て秦に與へて平ぐ。秦楚に要して黔中の地を得んと欲し、武關の外を以て之に易へんと欲す。楚王曰く、地を易ふるを願はず、願はくは張儀を得て黔中の地を獻せんと。秦王之を遣らんと欲すれども、口言ふに忍びず。張儀乃ち行かんと請ふ。惠王曰く、彼の楚王、子の負くに商

不聽。卒發兵而使將軍屈匄擊秦。秦齊共攻楚。斬首八萬。殺虜八。遂取丹陽。漢中之地。楚又復益發兵而襲秦。至藍田大戰。楚大敗。於是楚割兩城以與秦。平。秦要楚欲得黔中地。欲以武關外易之。楚王曰。不願易地。願得張儀而獻黔中地。秦王欲遣之。口弗忍言。

於の地を以てするを怒る。是れ且に子に甘心せんとするなりと。張儀曰く、秦彊く、楚弱し。臣斬尙と善し。尙は楚の夫人鄭袖に事ふることを得。袖が言ふ所皆従ふ。且つ臣王の節を奉じて楚に使す。楚何ぞ敢て誅を加へん。假令臣を誅すとも、秦の爲めに黔中の地を得ば、臣の上願なりと。遂に楚に使す。楚の懷王、至れば則ち張儀を囚へ、將に之を殺さんとす。斬尙鄭袖に謂ひて曰く、子も亦子の王に賤まるゝを知るかと。鄭袖曰く、何ぞやと。斬尙曰く、秦王甚だ張儀を愛し必ず之を出さんと欲す。今將に上庸の地六縣を以て楚に賂ひ、美人を以て楚に聘し、宮中の善く歌謳する者を以て媵となさんとす。楚王地を重んじて秦を尊まば、秦の女は必ず貴まれて、夫人は斥けられん。爲に言ひて之を出すに若かずと。是に於て鄭袖日夜懷王に言ひて曰く、人臣各々其の主の爲めに用ひらる。今地未だ秦に入らず。秦張儀をして來らしむるは王を至重するなり。王未だ禮するあらずして張儀を殺さば、秦必ず大に怒りて楚を攻めん。

張儀乃請行。惠王曰。彼楚王怒子之負。是以商於之地。是且甘心於子。張儀曰。秦

妾請ふ、子母俱に江南に遷り、秦の爲に魚肉にせらるゝなからんと。懷王後悔して、張儀を赦し、厚く之を禮すること故の如し。

● 強ひて求むるなり ● 快心、思ふ存分にす ● 鄭袖のいふ所は楚王悉くこれを聽く ● 原文「不」は「必」の誤といふ説に従ふ ● 隨る ● 侍女 ● 魚肉の如くに切りさいをまればるやうにせん

彊楚弱。臣善新尙。尙得事楚夫人鄭袖。袖所言皆從。且臣奉王之節使楚。楚何敢加誅。假令誅臣。而爲秦得黔中之地。臣之上願。遂使楚。楚懷王至。則囚張儀。將殺之。斬尙謂鄭袖曰。子亦知子之賤於王乎。鄭袖曰。何也。斬尙曰。秦王甚愛張儀。而不欲出之。今將以三上庸之地六縣賂楚。以美人聘楚。以宮中善歌謳者爲媵。楚王重地尊秦。秦女必貴。而夫人斥矣。不若爲言而出之。於是鄭袖日夜言懷王曰。人臣各爲其主用。今地未入秦。秦使張儀來。至重王。王未有禮而殺張儀。秦必大怒攻楚。妾請子母俱遷江南。毋爲秦所魚肉也。懷王後悔。赦張儀。厚禮之。如故。

張儀既出未去。聞蘇秦死。乃說楚王曰。秦地半天下。兵敵四國。被

張儀既に出でて未だ去らず、蘇秦死すと聞き、乃ち楚王に説きて曰く、秦の地天下に半し、兵四國に敵す。險を被り、河を帯び、四塞以て固を爲す。虎賁の士百餘萬、車千乘、騎萬匹、粟を積むこと丘山の如し。法令既に明かに、士卒

險帶河。四塞以爲固。虎賁之士百餘萬。車千乘。騎萬匹。積粟如丘山。法令既明。士卒安難樂死。主明以嚴。將智以武。雖無出甲。席卷常山之險。必折天下之脊。天下有後服者。先亡。且夫爲從者。無不以異於羣羊。而攻之。猛虎也。與羊不格。明矣。今王不與猛虎而與

難に安んじて死を樂しむ。主は明にして以て嚴に、將は智にして以て武なり。甲を出す無しと雖も、常山の險を席卷し、必ず天下の脊を折かん。天下後れて服する者あらば先亡びん。且つ天れ從を爲す者は以て羣羊を驅つて猛虎を攻むるに異なる無し。虎の羊と格せざることを明かなり。今王猛虎に與せずして羣羊に與す。臣竊かに以爲らく、大王の計過てりと。凡そ天下の疆國は秦に非ずんば楚なり。楚に非ずんば秦なり。兩國交々争ふ。其の勢兩立せず。大王秦に與せずんば、秦甲を下して宜陽に據らん。韓の土地は通ぜず。河東より下つて成臯を取らば、韓必ず入りて臣たらん。梁則ち風に從ひて動かん。秦、楚の西を攻め、韓梁其の北を攻めば、社稷安んぞ危きこと毋きを得んや。且つ夫れ從者は、羣弱を聚めて至疆を攻め、敵を料らずして、輕しく戰ひ、國貧しうして數々兵を擧ぐ、危亡の術なり。臣之を聞く、兵如かざる者は與に戰を挑むこと勿れ、粟如かざる者は、與に久しきを持する勿れと。夫れ從人は辯を飾

羣羊。臣竊以爲大王之計過也。凡天下疆國。非秦而楚。非楚而秦。兩國交争。其勢不兩立。大王不與秦。秦下甲據宜陽。韓之上地不通。下河東。取成臯。韓必入臣。梁則從風而動。秦攻楚之西。韓梁攻其北。社稷安得毋危。且夫從者。聚羣弱而攻至疆。不料敵而輕戰。國貧而數擧兵。危亡之術也。臣聞之。兵不如者。勿與挑戰。粟不如者。勿與持。久。夫從人飾辯。虛辭。高主之節。言其利。不言其害。卒有秦禍。無及爲已。是故願三大王之孰計之。

り辭を虚くし、主の節を高しとし、其の利を言ひて其の害を言はず。卒に秦の禍あるも爲すに及ぶ無きのみ。是の故に大王の之を孰計せんことを願ふ。

● 勇敢の士。貫は奔なり、猛虎の奔るが如きに喻へ言ふ ● 勝(むしろ)を巻くが如くかたはしより攻め取る ● 脊骨の如く中央高く兩旁低き土地、常山をいふ ● 敵せざる

秦西に巴蜀あり。大船に粟を積み、汶山より起りて、江に浮びて以て下る。楚に至る三千餘里。船を舫べ、卒を載す。一舫に五十人と三月の食とを載せ、水に下つて浮ぶ。一日に行くこと、三百餘里、里數多しと雖も、然れども牛馬の力を費さず。十日に至らずして扞關に拒らん。扞關驚かば、則ち境より以東盡く城守せん。黔中巫郡は王の有にあらざらん。秦、甲を擧げて武關に出で南面して

而浮。一日行三百餘里。里數雖多。然而不費牛馬之力。不至十日。而拒并關。并關驚。則從境以東盡城守矣。黔中巫郡非王之有。秦舉甲出武關。南面而伐。則北地絕。秦兵之攻楚也。危難在三月之內。而楚待諸侯之救。在牛歲之外。此其勢不相及也。夫特弱國之

伐たば、則ち北地は絶えん。秦兵の楚を攻むるや、危難三月の内にあり。而して楚の諸侯の救を待つや半歳の外にあり。此れ其の勢相及ばざるなり。夫れ弱國の救を待ちて、彊秦の禍を忘る。此れ臣の大王の爲めに患ふる所以なり。大王嘗て吳人と戦ふ。五たび戦ひて、三たび勝ち、陣卒盡きたり。新城を偏守して民の苦を存せり。臣聞く、功大なる者は危み易く、民敵る者は上を怨むと。夫れ危み易きの功を守つて彊秦の心に逆ふ。臣竊かに大王の爲めに之を危む。且つ夫れ秦の、兵を函谷に出し、十五年以て齊趙を攻めざる所以のものは、陰かに謀つて、天下を合するの心あるなり。楚嘗て秦と難を構へ、漢中に戦ふ。楚人勝たず。列侯執珪の死する者七十餘人。遂に漢中を亡ふ。楚王大に怒り、兵を興して秦を襲ひ、藍田に戦ふ。此れ謂はゆる兩虎相搏つ者なり。夫れ秦楚相敵れて、而して韓魏全きを以て其の後を制す。計此より危き者無し。願はくは、大王之を孰計せよ。秦、甲を下して衛陽晉を攻めば、必ず大に天下の匈

救。忘彊秦之禍。此臣所下以爲大王患上也。

大王嘗與吳人一戰。五戰而三勝。陣卒盡

矣。偏守新城。存民苦矣。臣聞功大者易危。而民敵者怨上。夫守易危之功。而逆彊秦之心。臣竊爲大王危之。且夫秦之所下以不出兵函谷十五年。以攻齊趙者。陰謀有合天下之心。楚嘗與秦構難。戰於漢中。楚人不勝。列侯執珪死者七十餘人。遂亡漢中。楚王大怒。興兵襲秦。戰於藍田。此所謂兩虎相搏者也。夫秦楚相敵。而韓魏以全制其後。計無危於此者上矣。願大王孰計之。秦下甲攻衛陽晉。必大關天下之匈。大王悉起兵以攻宋。不至數月而宋可舉。舉宋而東指。則泗上十二諸侯。盡王之有也。

凡天下而以信約從親。相堅者。蘇秦封武安君。相燕。即陰與燕王。謀伐破齊而

凡そ天下にして信約從親を以て相堅するものは蘇秦なり。武安君に封ぜられ、て燕に相たり。即ち陰に燕王と、伐ちて齊を破りて其の地を分たんことを謀り、乃ち罪ありと詳りて、出でて走りて齊に入る。齊王因つて受けて之を相とす。居ること二年にして覺る。齊王大に怒り、蘇秦を市に車裂す。夫れ一詐僞の蘇

を關ちん。大王悉く兵を起し、以て宋を攻めば、數月に至らずして宋舉ぐべし。宋を舉げて東に指さば、則ち泗上の十二諸侯、盡く王の有たらん。

● 兩船を並ぶるをいふ ● 珪を執りて朝する者、爵の名 ● 匈は背也、崑山を以て天下の背とすれば、漸及び陽晉は天下の背に當る。天下の背を關れば他を以て動くを得ず

分其地。乃詳有罪。出走入齊。齊王因受而相之。居二年而覺。齊王大怒。車裂蘇秦於市。夫以一詐僞之蘇秦。而欲下經營天下。一混甲一諸侯。其不可成亦明矣。今秦與楚接境。壤界固形親之國也。大王誠能聽臣。臣請使秦太子入質於楚。楚太子入質於秦。為二請以秦女為二

秦を以て、天下を経営し、諸侯を混一せんと欲す。其の成るべからざる亦明かなり。今秦楚と境壤界を接す。固に形親の國なり。大王誠に能く臣に聽け。臣請ふ、秦の太子をして入りて楚に質たらしめん。楚の太子入りて秦に質たれば、請ふ秦の女を以て、大王の箕箒の妾となし、萬室の都を效し、以て湯沐の邑となし、長く昆弟の國となり、終身相攻伐すること無からん。臣以爲らく、計此より便なる者無からんと。是に於て楚王已に張儀を得て、黔中の地を出して秦に與ふるを重り、之を許さんと欲す。屈原曰く、前に大王張儀に欺かる。張儀至らば、臣以爲らく、大王之を烹んと。今縱ひ之を殺すに忍びざるも、又其の邪説を聽くは不可なりと。懷王曰く、儀を許して黔中を得るは美利なり。後にして之に倍くは不可なりと。故に卒に張儀を許して秦と親しむ。

- 罪人の身體を二つの牛車に縛し、左右に引きさく刑罰
- 形勢の上より親睦すべき國
- 戸數一萬ある都
- 其の邑より收むる租税を以て沐浴の費に充つるの義より天子諸侯の料地をいふ

大王箕箒之妾。效萬室之郡。以爲湯沐之邑。長爲昆弟之國。終身無相攻伐。臣以爲計無便於此者。於是楚王已得張儀而重出黔中。地與秦欲許之。屈原曰。前大王見欺於張儀。張儀至。臣以爲大王烹之。今縱弗忍殺之。又聽其邪説。不可。懷王曰。許儀而得黔中。美利也。後而倍之。不可。故卒許張儀與秦親。

張儀去楚。因途之韓。說韓王曰。韓地險惡。山居。五穀所生。非菽而麥。民之食。大抵飯菽藿羹。一歲不收。民不墾。糟糠地。不過九百里。無二歲之食。料大王之卒。悉之不過三。十萬。而所徒負。養在其中。

張儀楚を去る。因つて遂に韓に之き、韓王に説きて曰く、韓の地は險惡、山居す。五穀生する所は、菽にあらざれば麥。民の食、大抵菽藿の羹を飯す。一歲不收ならば、民糟糠にも暨かず。地九百里に過ぎず。二歳の食無し。大王の卒を料るに、之を悉すとも三十萬に過ぎず。而して所徒負養其の中に在り。微亭鄣塞を守るものを除きては、見卒二十萬に過ぎざるのみ。秦の帶甲百餘萬、車千乘、騎萬匹、虎賁の士、跽鞠科頭、貫額奮戟する者、計ふるに勝ふ可からざるに至る。秦馬の良、戎兵の衆、前を探り、後を踏み、蹄間三尋、騰る者數ふるに勝ふべからず。山東の士は、甲を被り、冑を蒙り、以て會戰す。秦人は甲を捐てて徒褐し、以て敵に趨く。左に人頭を挈け、右に生虜を挾む。夫れ秦の卒と

矣。除守二微亭  
 郭塞。見卒不  
 過二十萬。而  
 已矣。秦帶甲  
 百餘萬。車千  
 乘。騎萬匹。虎  
 賁之士。跽跼  
 科頭。貫頤奮  
 戟者。至不可  
 勝計。秦馬之  
 良。戎兵之衆。  
 探前跌後。隨  
 間三尋。騰者  
 不可勝數。山  
 東之士。被甲  
 蒙冑以會戰。  
 秦人捐甲徒  
 楊。以趨敵。左  
 超。人頭。右挾。  
 生虜。夫秦卒

山東の卒とは、猶ほ孟賁と怯夫のごとし。重力を以て相壓するは、猶ほ烏獲と  
 嬰兒のごとし。夫れ孟賁烏獲の士を戦はしめ、以て服せざるの弱國を攻む、千  
 鈞の重きを鳥卵の上に垂るゝに異なる無し。必ず幸無からん。夫れ羣臣諸侯地  
 の寡きを料らずして從人の甘言好辭を聽き、比周して以て相飾るなり。皆奮ひ  
 て曰く、吾が計を聽かば以て強くし天下に覇たるべしと。夫れ社稷の長利  
 を顧みずして須臾の説を聽く。人主を誑誤すること、此に過ぐる者無からん。  
 大王秦に事へずんば、秦甲を下して、宜陽に據り、韓の上地を斷たん。東成  
 牟陽を取らば、則ち鴻臺の宮、桑林の苑、王の右にあらざるなり。夫れ成牟を  
 塞ぎ、上地を絶たば、則ち王の國分れん。先づ秦に事ふれば則ち安く、秦に事へ  
 ざれば、則ち危し。夫れ禍を造して其の福報を求むるは、計淺くして、怨深  
 し。秦に逆ひて楚に順ふ、亡ぶる母からんと欲すと雖も、得可からざるなり。  
 故に大王の爲めに計るに、秦の爲めにするに如くは莫し。秦の欲する所楚を弱く

與山東之卒。  
 猶孟賁之與  
 怯夫。以重力  
 相壓。猶烏獲  
 之與嬰兒。夫  
 戰孟賁烏獲  
 之士。以攻不  
 服之弱國。無  
 異垂千鈞之  
 重。於鳥卵之  
 上。必無幸矣。  
 夫羣臣諸侯。  
 不料地之寡。  
 而聽從人之  
 甘言好辭。比  
 周以相飾也。皆奮曰。聽吾計。可以彊霸天下。夫不顧社稷之長利。而聽須臾之說。誑誤人  
 主。無過此者。大王不事秦。秦下甲據宜陽。斷韓之上地。東成牟陽。則鴻臺之宮。桑林  
 之苑。非王之有也。夫塞成牟。絕上地。則王之國分矣。先事秦則安。不事秦則危。夫造禍而  
 求其福報。計淺而怨深。逆秦而順楚。雖欲毋亡。不可得也。故爲大王計。莫如爲秦。秦之所  
 欲。莫如弱楚。而能弱楚者。莫如韓。能以韓能戰於楚也。其地勢然也。今王西面而事秦。以

するに如くは莫し。而して能く楚を弱くする者は韓に如くは莫し。韓の能く楚よ  
 り強きを以てにあらざるなり。其の地勢然るなり。今王西面して秦に事へ、以て  
 楚を攻めば、秦王必ず喜ばん。夫れ楚を攻め、以て其の地を利し、禍を轉じて秦  
 を説ばず、計此より便なるもの無しと。韓王儀が計を聽く。張儀歸り報す。

- 人民山地に住居す
- 強役の人夫
- 物を擔ひ賣ひて供給する賤賈
- 邊境地方の驛亭、敵を防ぐ要地
- 現在の兵卒
- 勇士、勇猛なる川隊
- 貴は斧に通ず、虎の如く奔るの義、もとは周代の官名
- 蹂躪、キド
- 軋を響かして敵陣に衝入る
- 語を射貫かれても聞せずして戦ふ勇猛なるさま
- 一説には兩手に一圓を擲げて直ちに敵陣に入る勇猛のさま
- 敵を執る者は置ひて敵中に墜ち入る
- 馬の前足地を探りて前に向ひ、後足は後を踏みて地をかくの義。馬の走る勢疾きをいふ
- 前後の時
- の間一躍にして三尋に達す。一尋は七尺
- 既になり担ぬぎて肉を見はす
- 衛の勇士の名
- 秦の勇
- 士の名
- 讀ひ交る、偏り慕す
- 欺き迷はすこと
- 皆韓の宮苑

攻楚。秦王必喜。夫攻楚以利其地。轉禍而說秦。計無不便於此。二者韓王聽儀計。張儀歸報。秦惠王封儀五邑。號曰武信君。使張儀東說齊。潛王曰。天下疆國。無過齊者。大臣父兄。股衆富樂。然而爲大王計者。皆爲一時之說。不顧百世之利。從人說。大王者。必曰。齊西有疆。趙南有韓。與梁。齊負海之國也。地廣民衆。兵彊士勇。雖有

秦の惠王、儀を五邑に封じ、號して武信君と曰ふ。張儀をして東齊の潛王に説かして曰く、天下の疆國齊に過ぐる者無し、大臣父兄股衆富樂なり。然り而して大王の爲めに計る者、皆一時の説をなして百世の利を顧みず。從人大王に説く者必ず曰はん、齊西に疆趙あり、南に韓と梁とあり。齊は海を負ふの國なり。地廣く、民衆く、兵彊く、士勇なり。百秦ありと雖も、將に齊を奈何ともする無からんとすと。大王其の説を賢として其の實を計らず。夫れ從人は朋黨比周し、從を以て可と爲さざる莫し。臣之を聞く、齊魯と三たび戦ひて魯三たび勝つ。國以つて危く、亡其の後に隨ふ。戦勝の名ありと雖も、亡國の實あり。是れ何ぞや。齊大にして魯小なればなり。今秦と齊とは、猶ほ齊と魯のごときなり。秦趙河漳の上に戦ふ、再び戦ひて趙再び秦に勝つ。番吾の下に戦ふ、再び戦ひて又秦に勝つ。四戦の後、趙の亡卒數十萬、邯鄲僅かに存す。戦勝

百秦將無奈齊何。大王賢其説而不計其實。夫從人朋黨比周。莫不以從爲可。臣聞之。齊與魯三戰而魯亡。隨其後。雖有戰勝之名。而有亡國之實。是何也。齊大而魯小也。今秦之與齊也。猶齊之與魯也。秦趙戰

の名有りと雖も、而かも國已に破る。是れ何ぞや。秦彊くして趙弱ければなり。今秦楚女を嫁し、婦を娶り、昆弟の國となり、韓宜陽を獻じ、梁河外を效し、趙入りて鄒池に朝し、河間を割き、以て秦に事ふ。大王秦に事へずんば、秦韓梁を驅りて齊の南地を攻めん。趙の兵を悉し、清河を渡り、博關を指さば、臨菑・即墨は王の右にあらざるなり。國一日攻めらるれば、秦に事へんと欲すと雖も得べからざるなり。是の故に願はくは、大王之を孰計せよと。齊王曰く、齊は僻陋にして東海の上に隱居す、未だ嘗て社稷の長利を聞かざるなりと。乃ち張儀を許す。

● 同志相結びて其以外の者を排斥する從黨 ● 兄弟の國 ● 黄河の南邑、曲沃平周等の地 ● 河漳の間邑、冀州縣 ● 博州にあり。趙兵全部を驅出し清河を渡り博關に向ふをいふ

於河漳之上。再戰而趙再勝。秦戰於番吾之下。再戰又勝。秦四戰之後。趙之亡卒數十萬。邯鄲僅存。雖有戰勝之名。而國已破矣。是何也。秦彊而趙弱。今秦楚嫁女娶婦。爲昆弟之國。韓獻宜陽。梁效河外。趙入朝。澠池。割河間。以事秦。大王不事秦。秦驅韓梁。攻齊之南地。



悉趙兵。渡清河。指博關。臨苗。即墨。非王之有也。國一日見攻。雖欲事秦。不可得也。是故願大王執計之也。齊王曰。齊僻陋。隱居東海之上。未嘗聞社稷之長利也。乃許張儀。

張儀去。西說趙王。曰。敝邑秦王。使使臣效愚計於大王。大王收率天下。以賓秦。秦兵不敢出函谷關。十五年。大王之威。行於山東。敝邑恐懼。伏。繕甲厲兵。飾車騎。習馳射。力田積粟。守四封之內。悉居。備處。不。敢動搖。唯大王

張儀去りて西趙王に説きて曰く、敝邑の秦王使臣をして愚計を大王に效さしむ。大王天下を收率し、以て秦を賓す。秦兵敢へて函谷關を出でざるること十五年。大王の威山東に行はる。敝邑恐懼懾伏し、甲を繕め、兵を厲き、車騎を飾り、馳射を習はし、田を力めて粟を積み、四封の内を守り、悉居懾處し、敢へて動搖せざるは、唯大王之を督過するに意あればなり。今大王の力を以て巴蜀を擧げ漢中を并せ、兩周を包ね、九鼎を遷し、白馬の津を守る。秦僻遠なりと雖も、然も心に忿り、怒を含むこと之れ日久し。今秦敝甲凋兵あり、渾池に軍す。願はくは河を渡り漳を踰え、番吾に據りて、邯鄲の下に會せん。願はくは甲子を以て合戦し、以て殷紂の事を正さん。敬みて使臣をして先づ左右に聞せしむ。凡そ大王の従をなすを信する所のものは、蘇秦を恃めばなり。蘇秦は諸侯を熒惑し、

有意督過之也。今以大王之力。舉巴蜀。并漢中。包兩周。遷九鼎。守白馬之津。秦雖僻遠。然而心忿。含怒之日久矣。今秦有敝甲凋兵。軍於渾池。願渡河踰漳。據番吾。會邯鄲之下。願以甲子合戰。以正殷紂之事。敬使使臣先開左右。凡大王之所信爲從者。恃蘇秦。蘇

是を以て非となし、非を以て是となし、齊國に反せんと欲して自ら市に車裂せしむ。夫れ天下の一にすべからざる亦明かなり。今楚は秦と昆弟の國たり。而して韓梁稱して東藩の臣となり、齊魚鹽の地を獻す。此れ趙の右臂を斷つなり。夫れ右臂を斷ちて人と闘ひ、其の黨を失ひて孤居す。危き母からんことを欲するを求むるも、豈得べけんや。今秦三將軍を發す。其の一軍午道を塞ぎ、齊に告げて師を興し、清河を渡り、邯鄲の東に軍せしめ、一軍成臯に軍し、韓梁を驅りて河外に軍し、一軍渾池に軍し、四國を約して一となし、以て趙を攻む。趙服せば、必ず其の地を四分せん。是の故に敢て意を匿し、情を隠さず。先づ左右に以て聞す。臣竊に大王の爲めに計るに、秦王と渾池に遇ひ、面り相見て、口づから權結ぶに如く莫し。請ふ兵を案じて攻むる無けん。大王の計を定めんことを願ふと。趙王曰く、先王の時奉陽君權を專にし、勢を擅にし、先王を蔽欺し、獨り擅に事を給ふ。寡人居て師傅に屬し、國の謀計に與からず。先王羣臣を



王殺之。王闕塗地。其姊聞之。因擊箠以自刺。故至今有「擊箠之山」。代王之亡。天下莫不聞。夫趙王之狼戾無親。大王之所見。且以趙王爲可親乎。趙興兵攻燕。再圍燕都。而劫大王。大王割十城以謝。今趙王已入朝。灑池。效河間。以事秦。今大王不事秦。秦下甲雲中。九原。驅趙而攻燕。則易水長城。非大王之有也。且今時趙之於秦。猶郡縣也。不敢妄舉師以攻伐。今王事秦。秦王必喜。趙不敢妄動矣。是西有彊秦之援。而南無齊趙之患。是故願大王孰計之。燕王曰。寡人蠻夷僻處。雖大男子。裁如嬰兒。言不足。以采正計。今上客幸教之。請四面而事秦。獻恆山之尾五城。

大王の有にあらざらん。且つ今時趙の秦に於ける、猶ほ郡縣のごときなり。敢て妄りに師を舉げて以て攻伐せず、今王秦に事へば、秦王必ず喜ばん。趙敢て妄りに動かざらん。是れ西に彊秦の援ありて南に齊趙の患なし、是の故に願はくは、大王之を執計せよと。燕王曰く、寡人蠻夷にして僻處す。大男子と雖も裁かに嬰兒の如し、言以て正計を采るに足らず。今上客幸に之に教ふ、請ふ西面して秦に事へ、恆山の尾五城を獻せんと。

● 句注山は代州にあり ● 金にて製したる斗。斗は斗の正字、水漿を盛るもの ● あつく熱したる炭 ● 一説、厨人辭を造むと讀む、辭は炭なりと ● 炭は研屏、とぐ ● 炭の如く凶暴、道に背きて、刺しむべき所なしきことは

燕王聽儀。儀歸報。未至咸陽。而秦惠王卒。武王立。武王自爲太子。時不說張儀。及即位。羣臣多譏張儀曰。無信。左右賣國。以取容。秦必復用之。恐爲天下笑。諸侯聞張儀有郤。武王皆畔。衡復合從。秦武王元年。羣臣日夜惡張儀。未已。而齊讓又至。張儀懼誅。乃因謂

燕王儀に聽く。儀歸り報す。未だ咸陽に至らずして秦の惠王卒し、武王立つ。武王太子たりし時より張儀を説ばず。位に即くに及び、羣臣多く張儀を譏して曰く、信なく、左右に國を賣りて以て容れらるゝを取る。秦必ず復び之を用ひば、恐らくは天下の笑とならんと。諸侯張儀武王と郤あるを聞き、皆衡を畔きて復た合從す。秦の武王の元年、羣臣日夜張儀を惡して未だ已ます。而して齊の讓又至る。張儀誅を懼れ、乃ち因りて秦の武王に謂ひて曰く、儀愚計あり、願はくは之を致さんと。王曰く、奈何と。對へて曰く、秦の社稷の爲に計れば、東方に大變ありて然る後王以て多く地を割き得べきなり。今聞く、齊王甚だ儀を憎むと。儀の在る所、必ず師を興して之を伐たん。故に儀願はくは、其の不肖の身を乞ひて梁に之かん。齊必ず師を興して梁を伐たん。梁齊の兵城下に連なりて相去る能はざらん。王其の間を以て韓を伐ち、三川に入り、兵を函谷に出して、伐つ毋くして以て周に臨まば祭器必ず出でん。天子を挟み圖籍を按ずるは此れ王

秦武王曰。儀有恩計。願效之。王曰。奈何。到曰。爲秦社稷計者。東方有大變。然後王可以多割地也。今聞齊王其憎儀。儀之所。在。必與師伐之。故儀願乞其不肖之身。之。梁。齊必與師而伐。梁。齊之兵。連於城下。而不能相去。王以其間。伐韓。入三川。出函谷。而毋

業なりと。秦王以て然りとす。乃ち革車三十乗を具へ、儀を梁に入る。齊果して師を興して之を伐つ。梁の哀王恐る。張儀曰く、王患ふること勿れ。請ふ齊の兵を罷めしめんと。乃ち其の舍人馮喜をして楚に之かしむ。使を借りて齊に之かしめ、齊王に謂ひて曰く、王甚だ張儀を憎む。然りと雖も亦厚し、王の儀を秦に託するやと。齊王曰く、寡人儀を憎む。儀の在る所必ず師を興して之を伐つ。何を以てか儀を託せんと。對へて曰く、是れ乃ち王の儀を託するなり。夫れ儀の出づるや、固と秦王と約して曰く、王の爲めに計れば、東方に大變ありて、然る後王以て多く地を割き得べし。今齊王甚だ儀を憎む。儀の在る所必ず師を興して之を伐たん。故に儀願はくは、其の不肖の身を乞ひて梁に之かん。齊必ず師を興して之を伐たん。齊梁の兵城下に連なりて相去る能はざらん。王其の間を以て、韓を伐ち三川に入り、兵を函谷に出して、伐つ無くして以て周に臨まば、祭器必ず出でん。天子を挟み、圖籍を案するは、此れ王業なりと。秦王以て然

伐。以臨周。祭器必出。挾天子。按圖籍。此王業也。秦王以爲然。乃具革車三十乗。入儀之梁。齊果與師伐之。梁哀王恐。張儀曰。王勿患也。請令罷齊兵。乃使其舍人馮喜之楚。借使之齊。謂齊王曰。王甚憎張儀。雖然亦厚矣。王之託儀於秦也。齊王曰。寡人憎儀。儀之所。在。必與師伐之。何。以。託。儀。對。曰。是。乃。王。之。託。儀。也。夫。儀。之。出。也。固。與。秦。王。約。曰。爲。王。計。者。東。方。有。大。變。然。後。王。可。以。多。割。地。也。今。齊。王。甚。憎。儀。儀。之。所。在。必。與。師。伐。之。故。儀。願。乞。其。不。肖。之。身。之。梁。齊。必。與。師。伐。之。齊。梁。之。兵。連。於。城。下。而。不。能。相。去。王。以。其。間。伐。韓。入。三。川。出。函。谷。而。無。伐。以。臨。周。祭。器。必。出。挾。天。子。案。圖。籍。此。王。業。也。秦。王。以。爲。然。故。具。革。車。三。十。乘。而。入。之。梁。也。今。儀。入。梁。王。果。伐。之。是。王。內。罷。國。而。外。伐。與。國。廣。鄰。敵。以。內。自。臨。而。信。儀。於。秦。王。也。此。臣。之。所。謂。託。儀。也。齊。王。曰。善。乃。使。解。兵。張。儀。相。魏。一。歲。卒。於。魏。也。

りと爲す。故に革車三十乗を具へて之を梁に入れしなり。今儀梁に入る。王果して之を伐つ。是れ王内は國を罷らし、外は與國を伐ち、鄰敵を廣め、以て内自ら臨みて儀を秦王に信ぜしむるなり。此れ臣の所謂る儀を託するなりと。齊王曰く、善しと。乃ち兵を解かしむ。張儀魏に相たること一歳にして魏に卒す。

● 隙に同じ ● 聖言す ● 王者の祭器をいふ。凡そ凡そ王は祭器には必ず文物新車器等を陳ぬるを禮とすなり ● 軍事に用ふる車。即、兵車 ● 齊の梁を伐つをいふ。梁は先に齊と川許して從を約せしを以て與國と稱する也

陳軫者。游說之士。與張儀俱事秦。惠王皆貴重爭寵。張儀怒陳軫於秦王曰。軫重幣輕使。秦楚之間。將為國交也。今楚不加善於秦。而善軫者。軫自為厚。而為王薄也。且軫欲去秦而之楚。王胡不聽乎。王謂陳軫曰。吾聞子欲去秦之楚。有之乎。軫曰。然。王曰。儀之言

陳軫は游說の士なり。張儀と俱に秦の惠王に事ふ。皆貴重せられて寵を爭ふ。張儀陳軫を秦王に惡して曰く、軫幣を重くして輕しく秦楚の間に使す。將に國の爲めに交らんとするなり。今楚善を秦に加へずして、軫に善きものは、軫自ら爲めにすること厚くして王の爲めにすること薄ければなり。且つ軫秦を去つて楚に之かんと欲す、王胡ぞ聽かざるやと。王陳軫に謂ひて曰く、吾聞く、子秦を去りて楚に之かんと欲すと、之れありやと。軫曰く、然り。王曰く、儀の言果して信なりと。軫曰く、獨り儀のみ之を知るにあらざるなり。道を行く之士盡く之を知れり。昔子胥其の君に忠にして天下以て臣と爲さんと爭ふ。曾參其の親に孝にして天下以て子と爲さんと願ふ。故に僕妾を賣るに、閭巷を出でずして售らるゝものは、良僕妾なり。出婦鄒曲に嫁するものは良婦なり。今軫其の君に忠ならざれば、楚も亦何ぞ軫を以て忠となさんや。忠なるも且に弃てられんとす。軫楚に之かすして何くに歸せんやと。王其の言を以て然りとなし。遂に

果信矣。軫曰。非獨儀知之也。行道之士盡知之矣。昔子胥忠於其君。而天下爭以爲臣。曾參孝於其親。而天下願以爲子。故賣僕妾不出閭巷。而售者良僕妾也。出婦嫁於鄒曲者。良婦也。今軫不忠其君。楚亦何以軫爲忠乎。忠且見弃。軫不之楚。何歸乎。王以其言

善く之を待つ。秦に居ること明年、秦の惠王終に張儀を相とす。而して陳軫楚に奔る。楚未だ之を重んぜず。而して陳軫をして秦に使せしむ。梁を過ぎて犀首を見んと欲す。犀首謝して見ず。軫曰く、吾事の爲めに來る。公軫を見ず。軫將に行かんとす。異日を待つを得ずと。犀首之を見る。陳軫曰く、公何ぞ飲を好むやと。犀首曰く、事無ければなりと。曰く、吾請ふ公をして事に鑿かしめん、可ならんかと。曰く、奈何と。曰く、田需諸侯を約して從親す。楚王之を疑ひて、未だ信ぜざるなり。公王に謂ひて曰く、臣燕趙の王と故あり。數々人をして來らしめて曰く、事なければ、何ぞ相見ざると。願はくは行を王に謁けん。王公に許すと雖も、公請ふ車を多くする毋れ。車三十乘を以て之を庭に陳ぬべし。明かに燕趙に之くと言へと。燕趙の客之を聞きて、車を馳せて其の王に告げ、人をして犀首を迎へしむ。楚王之を聞きて、大に怒りて曰く、田需寡人と約す。而して犀首燕趙に之く。是れ我を欺くなり。怒りて其の事を聽さず。齊犀首の

爲然。遂善待之。居秦期年。秦惠王終相。張儀而陳軫奔楚。楚未之重也。而使陳軫使於秦。過梁。欲見犀首。犀首謝弗見。軫曰。吾爲事來。公不見軫。軫將行。不得待。異日。犀首見之。陳軫曰。公何好飲也。犀首曰。無事也。曰。吾請令公擊事。可乎。曰。奈何。曰。田需約諸侯。從親。楚王疑之。未信也。公謂於王曰。臣與燕趙之王有故。數使人來。曰。無事。何不相見。願謂行於王。王雖許。公請毋多車。以車三十乘。可陳之於庭。明言之。燕趙。燕趙客聞之。馳車告其王。使人迎犀首。楚王聞之。大怒。曰。田需與寡人約。而犀首之燕趙。是欺我也。怒而不聽其事。齊聞犀首之北。使人以事委焉。犀首遂行。三國相事。皆斷於犀首。

● 犀首す ● 村里 ● 離縁になりたる女 ● 其の村里の内 ● 其年、一年 ● 魏の相 ● 調なり、告たり ● 政務の決断をなす

軫遂至秦。韓魏相攻。非年不救。秦惠王欲救之。問於左右。左右或曰。救之便。或曰。勿救便。惠王未之能爲。之決。陳軫適至。秦惠王曰。子去寡人之楚。亦思寡人。不陳軫對曰。王聞夫越人莊烏乎。王曰。不聞。曰。越人莊烏仕楚執珪。有頃而病。楚王曰。烏故越之鄙細人也。今仕楚執珪。貴富矣。亦思越不中謝對曰。凡人之思。故在其病也。彼思越則越

北するを聞き、人をして事を以て委せしむ。犀首遂に三國の相の事を行ふ。皆犀首に断す。  
● 犀首す ● 村里 ● 離縁になりたる女 ● 其の村里の内 ● 其年、一年 ● 魏の相 ● 調なり、告たり ● 政務の決断をなす

軫遂に秦に至る。韓魏相攻め、非年にして解けず。秦の惠王之を救はんと欲し、左右に問ふ。左右或は曰く、之を救ふ便なりと。或は曰く、救ふ勿き便なりと。惠王未だ之が爲めに決する能はず。陳軫適々秦に至る。惠王曰く、子寡人を去つ

て楚に之く、亦寡人を思ふや不やと。陳軫對へて曰く、王夫の越人莊烏を聞けりやと。王曰く、聞かずと。曰く、越人莊烏楚に仕へて執珪たり。頃くありて病あり。楚王曰く、烏は故越の鄙細の人なり。今楚に仕へ執珪として貴富なり。亦越を思ふや不やと。中謝對へて曰く、凡そ人の故きを思ふは其の病むときに在り。彼越を思はば則ち越聲し、越を思はずんば則ち楚聲せん。人をして往いて之を聴かしむれば、猶ほ尙ほ越聲せり。今臣奔逐せられて楚に之くと雖も、豈能く秦聲無からんやと。惠王曰く、善し。今韓魏相攻め、非年にして解けず。或は謂ふ、寡人之を救ふ、便なりと。或は曰く、救ふ勿き、便なりと。寡人決する能はず、願はくは子、子が主の爲めに之を計り、餘、寡人の爲めに之を計れと。陳軫對へて曰く、亦嘗て夫の下莊子の虎を刺ししことを以て王に聞せし者ありや。莊子虎を刺さんと欲す。館の豎子之を止めて曰く、兩虎方に且に牛を食はんと欲す。食うて甘からば必ず争はん。争はば必ず鬪はん。鬪はば則ち大なる者、傷つき、少

聲。不<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>越<sub>レ</sub>則楚聲。使<sub>二</sub>人往聽<sub>一</sub>之。猶<sub>レ</sub>尙<sub>レ</sub>越聲也。今<sub>レ</sub>臣雖<sub>二</sub>奔<sub>一</sub>逐<sub>レ</sub>之。楚。豈能<sub>二</sub>無<sub>一</sub>秦聲<sub>一</sub>哉。惠王曰。善。今韓魏相攻。非年不<sub>レ</sub>解。或謂寡人救<sub>レ</sub>之。便。或曰。勿<sub>レ</sub>救<sub>レ</sub>便。寡人不能<sub>レ</sub>決。願<sub>二</sub>子爲<sub>一</sub>子主計<sub>一</sub>之。餘爲<sub>二</sub>寡人<sub>一</sub>計<sub>一</sub>之。陳軫對曰。亦嘗有<sub>二</sub>以<sub>一</sub>夫<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>莊子刺<sub>レ</sub>虎。聞<sub>二</sub>於<sub>一</sub>王者上<sub>レ</sub>乎。莊子欲<sub>レ</sub>刺<sub>レ</sub>虎。館豎子止<sub>レ</sub>之。曰。兩虎方<sub>レ</sub>且<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>牛。食<sub>レ</sub>甘<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>爭<sub>レ</sub>。爭<sub>レ</sub>則<sub>レ</sub>鬪。鬪<sub>レ</sub>則<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>傷<sub>レ</sub>。小<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>死<sub>レ</sub>。從<sub>レ</sub>傷<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>刺<sub>レ</sub>之。一<sub>レ</sub>舉<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>雙<sub>一</sub>虎<sub>レ</sub>之名<sub>一</sub>。下<sub>レ</sub>莊子以<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>然。立<sub>レ</sub>須<sub>レ</sub>之。有<sub>レ</sub>頃<sub>レ</sub>。兩<sub>レ</sub>虎<sub>レ</sub>果<sub>レ</sub>鬪<sub>レ</sub>。大<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>傷<sub>レ</sub>。小<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>死<sub>レ</sub>。莊子從<sub>レ</sub>傷<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>刺<sub>レ</sub>之。一<sub>レ</sub>舉<sub>レ</sub>果<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>雙<sub>一</sub>虎<sub>レ</sub>之功<sub>一</sub>。今<sub>レ</sub>韓魏相攻。非<sub>レ</sub>年不<sub>レ</sub>解。是<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>國<sub>レ</sub>傷<sub>レ</sub>。小<sub>レ</sub>國<sub>レ</sub>亡<sub>レ</sub>。從<sub>レ</sub>傷<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>伐<sub>レ</sub>之。一<sub>レ</sub>舉<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>兩<sub>一</sub>實<sub>一</sub>。此<sub>レ</sub>猶<sub>レ</sub>莊子刺<sub>レ</sub>虎<sub>レ</sub>之類<sub>一</sub>也。臣主與<sub>レ</sub>王<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>異<sub>レ</sub>也。惠王曰。善。卒<sub>レ</sub>弗<sub>レ</sub>救<sub>レ</sub>。大<sub>レ</sub>國<sub>レ</sub>果<sub>レ</sub>傷<sub>レ</sub>。小<sub>レ</sub>國<sub>レ</sub>亡<sub>レ</sub>。秦與<sub>レ</sub>兵<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>伐<sub>レ</sub>。大<sub>レ</sub>尅<sub>レ</sub>之。此<sub>レ</sub>陳軫之計<sub>一</sub>也。

なる者死せん。傷つくに從つて之を刺さば、一舉して必ず雙虎の名あらんと。下莊子以て然りとなし、立つて之を須つ、頃ありて兩虎果して鬪ふ。大なる者は傷つき、小なる者は死す。莊子傷つく者に從うて之を刺す。一舉にして果して雙虎の功あり。今韓魏相攻めて、非年にして解けず。是れ必ず大國は傷つき、小國は亡びん。傷つくに從ひて之を伐たば、一舉にして必ず兩實あらん。此れ猶ほ莊子虎を刺すの類のごときなり。臣主と王と何ぞ異ならんやと。惠王曰く、善しと。卒に救はず。大國果して傷つき、小國亡ぶ。秦兵を興して伐ちて大に之に尅つ。此れ陳軫の計なり。

● 侍御の官なり ● 楚王を斥す ● 楚王のために計れる其餘り ● 遊談、旅舎

犀首者。魏之陰晉人也。名衍。姓公孫氏。與<sub>二</sub>張儀<sub>一</sub>不善。張儀爲<sub>レ</sub>秦之魏。魏王相<sub>二</sub>張儀<sub>一</sub>。犀首弗<sub>レ</sub>利。故<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>人<sub>一</sub>謂<sub>二</sub>韓公叔<sub>一</sub>曰。張儀已<sub>レ</sub>合<sub>二</sub>秦<sub>一</sub>魏<sub>一</sub>矣。其言曰。魏攻<sub>二</sub>南陽<sub>一</sub>。秦攻<sub>二</sub>三川<sub>一</sub>。魏王所<sub>レ</sub>以貴<sub>二</sub>張子<sub>一</sub>者。欲<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>韓地<sub>一</sub>也。且韓之南陽已<sub>レ</sub>舉<sub>レ</sub>矣。子何<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>少<sub>レ</sub>委<sub>レ</sub>焉。以<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>行<sub>一</sub>功<sub>一</sub>。則<sub>レ</sub>秦魏之交<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>錯<sub>レ</sub>矣。

犀首は魏の陰晉の人なり。名は衍、姓は公孫氏。張儀と善からず。張儀秦の爲めに魏に之く。魏王張儀を相とす。犀首利とせず。故に人をして韓の公叔に謂はしめて曰く、張儀已に秦魏を合す。其の言に曰く、魏南陽を攻め、秦三川を攻めんと。魏王の張子を貴ぶ所以の者は、韓地を得んと欲すればなり。且つ韓の南陽已に舉られん。子何ぞ少しく委し、以て衍が功となさざる。則ち秦魏の交錯むべし。然らば則ち魏必ず秦を圖りて儀を棄て、韓を收めて衍を相とせん。公叔以て便となし、因つて之を犀首に委し、以て功となす。果して魏に相たり。張儀去る。義渠の君魏に朝す。犀首、張儀復秦に相たりと聞き、之を害とす。犀首乃ち義渠の君に謂ひて曰く、道遠くして復た過るを得ず。請ふ事情を謁けん、曰く、中國事無ければ、秦君の國を燒擧焚杆するを得ん。事あれば秦將に輕使重幣して君の國に事へんとす。其の後五國秦を伐つ。會々陳軫秦王に謂ひて曰く、義渠の君は蠻夷の賢君なり。之に賂ひて以て其の志を撫するに如かずと。秦王

然則魏必圖秦而奔儀。收韓而相併。公叔以爲便。因委之犀首。以爲功。果相魏。張儀去。義渠君朝於魏。犀首聞張儀復相秦。害之。犀首乃謂義渠

曰く、善しと。乃ち文繡千純婦女百人を以て義渠の君に遺る。義渠の君羣臣を致して謀りて曰く、此れ公孫衍の謂ふ所かと。乃ち兵を起して秦を襲ひ、大に秦人を李伯の下に敗る。張儀已に卒して後、犀首入りて秦に相たり。嘗て五國の相印を佩び、約の長たりき。

● 公孫衍なり、犀首は魏の官名なり ● 併む ● 魏魏趙野楚燕、即ち國外の六國。事なれば秦と戦ふ事なきをいふ ● 楚韓して侵掠し、楚韓して牽制するをいふ ● 六國秦を攻むるが如き事あれば秦は輕使重幣し一儀復の國に事へて相助けしめんとするをいふ ● 楚魏野楚趙の五國秦を攻めしをいふなり

君曰。道遠不得復過。請謁事情。曰。中國無事。秦得日燒。擡使三杆君之國。有事。秦將輕使重幣。事君之國。其後五國伐秦。會陳軫謂秦王曰。義渠君者。蠻夷之賢君也。不如此。則三國之以撫其志。秦王曰。善。乃以文繡千純。婦女百人。遺義渠君。義渠君致羣臣而謀曰。此公孫衍所謂邪。乃起兵襲秦。大敗秦人李伯之下。張儀已卒之後。犀首入相秦。嘗佩五國之相印。爲三約長。

太史公曰。三晉多權變之士。天言從衡張秦者。大抵

太史公曰く、三晉權變の士多し。夫れ從衡を言ひて秦を強うする者は、大抵皆三晉の人なり。夫れ張儀の行事蘇秦よりも甚し。然るに世に蘇秦を惡む者は

皆三晉之人也。夫張儀之行事。甚於蘇秦。然世惡蘇秦者。以其先死。而儀振暴其短。以扶其說。成其衡道。要之此兩人。眞傾危之士哉。

其の先に死して、儀其の短を振暴し、以て其の說を扶け、其の衡道を成すを以てなり。之を要するに此の兩人は眞に傾危の士なるかな。

● 蘇秦張儀を以て衡に屬するの士 ● 其の短を振ら振暴して暴顯するをいふ ● 已の說を新くするの扶けとなす ● 函谷關西は地形衝長。張儀六國に相となり秦に連衡。 ● 國を傾け危くする人物



### 卷七十一

#### 樗里子甘茂列傳第十一

樗里子者。名疾。秦惠王之弟也。與惠王異母。母韓女也。樗里子滑也。樗里子滑。多智。秦人號曰智囊。秦惠王八年。爵樗里子右更。使將而伐曲沃。盡出其人。取其地。入秦。秦惠王二十五年。使樗里子爲將伐

樗里子は、名は疾、秦の惠王の弟なり。母は韓の女なり。樗里子滑稽にして多智なり。秦人號して智囊と曰ふ。秦の惠王の八年、樗里子を右更に爵す。將として曲沃を伐たしむ。盡く其の人を出し、其の城地を取りて秦に入る。秦の惠王の二十五年、樗里子をして將となして趙を伐たしむ。趙の將軍莊約を虜にし、蘭を抜く。明年魏章を助けて楚を攻め、楚の將屈丐を敗り、漢中の地を取る。秦樗里子を封じ、號して嚴君となす。秦の惠王卒す。太子武王立つ。張儀魏章を逐ひ、樗里子・甘茂を以て左右丞相となす。秦甘茂をして韓を攻めしめ宜陽を抜く。樗里子をして車百乘を以て周に入らしむ。周卒を以て之を迎へ、意甚だ敬す。楚王怒り、周を護むるに其の秦を重んずるを以

趙厲趙將軍莊約拔蘭。明年助魏章攻楚。敗楚將屈丐。取漢中地。秦封樗里子爲嚴君。秦惠王卒。太子武王立。逐張儀魏章。而以樗里子甘茂爲左丞相。秦使甘茂攻韓。拔宜陽。使樗里子以車百乘入周。周以卒迎之。意甚敬。楚王怒。讓周以其重。秦客游騰爲

てす。客游騰周の爲めに楚王に説きて曰く、智伯の仇猶を伐つや、之に廣車を遣り、因つて之に隨ふるに兵を以てす。仇猶遂に亡ぶ。何となれば則ち備なき故なり。齊の桓公蔡を伐つ。號し楚を誅すと曰ひ、其の實は蔡を襲ふ。今秦は虎狼の國なり。樗里子をして車百乘を以て周に入らしむ。周、仇猶・蔡を以て觀る。故に長戟をして前に居り、彊弩をして後に在らしむ。名づけて疾を衛ると曰ひて、實は之を囚ふるなり。且つ夫れ周豈能く其の社稷を憂ふる無からんや。一旦國を亡ほし、以て大王を憂へしめんことを恐ると。楚王乃ち悦ぶ。

● その居る所に樗あり故に樗里といふ ● 諸國をいふ。樗は亂なり、稽は同なり、辯捷の人、非を以て是の如く其を以て非の如く能く同異を亂るをいふ。一説に滑稽は酒器の名なり、酒の滑稽より流れ出づる如く僻舌反唇口をついて出づるをいふ ● 右更は秦の爵の名、第十四等に位す ● 明秋の國の名 ● 戰國策に智伯欲伐仇猶、遺之大鐘、載以廣車とあり。廣車は戰争に敵の側面を衝く車にして、智伯仇猶に大鐘を廣車に載せて遣り、仇猶は之を受けんがために道路を修めて廣車の通行に便にしたり、智伯直ちに廣車の後を以て兵を進めて仇猶を滅せり ● 樗里子を護衛すと稱して實は之を囚ふるなり

周說楚王曰。晉伯之伐仇猶。遺之廣車。因隨之以兵。仇猶遂亡。何則。無備故也。齊桓公伐  
蔡。號曰誅楚。其實襲蔡。今秦虎狼之國。使樛里子以車百乘入周。周以仇猶蔡觀焉。故使  
長轂居前。遷弩在後。名曰衝疾。而實囚之。且夫周豈能無愛其社稷哉。恐一旦亡國。以憂  
大王。楚王乃悅。

秦武王卒。昭  
王立。樛里子  
又益尊重。昭  
王元年。樛里  
子將伐蒲。蒲  
守恐請胡衍。  
胡衍爲蒲謂  
樛里子曰。公  
之攻蒲。爲秦  
乎。爲魏乎。爲  
魏則善矣。爲  
秦則不爲。賴  
矣。夫衛之所  
以爲衛者。以  
蒲也。今伐蒲

秦の武王卒す。昭王立つ。樛里子又益々尊重せらる。昭王の元年樛里子將と  
して蒲を伐つ。蒲の守恐れて胡衍に請ふ。胡衍蒲の爲めに樛里子に謂ひて曰く、  
公の蒲を攻むる、秦の爲めにするか、魏の爲めにするか。魏の爲めにするならば  
則ち善し、秦の爲めにするならば則ち頼となさず。夫れ衛の衛たる所以の者は蒲  
を以てなり。今蒲を伐ちて魏に入る。衛必ず折けて之に従はん。魏西河の外を  
亡うて以て取る無きは兵の弱ければなり。今衛を魏に并さば、魏必ず強からん。  
魏強き日は西河の外必ず危からん。且つ秦王將に公の事秦に害ありて魏に利  
なるを觀んとす。王必ず公を罪せんと。樛里子曰く、奈何せんと。胡衍曰く、公  
蒲を釋して攻むる勿れ。臣試に公の爲めに入りて之を言ひ、以て衛君に德せん

入於魏。衛必  
折而從之。魏  
亡。西河之外  
而無以取者  
兵弱也。今并  
衛於魏。魏必  
張魏疆之日。  
西河之外必  
危矣。且秦王  
將觀公之事。  
害秦而利魏。  
王必非公。樛  
里子曰。奈何。  
胡衍曰。公釋  
蒲勿攻。臣試  
爲公入言之。  
以德衛君。樛  
里子曰。善。胡  
衍入蒲。謂其  
守曰。樛里子

と。樛里子曰く、善しと。胡衍蒲に入り、其の守に謂ひて曰く、樛里子蒲の病む  
を知る。其の言に曰く、必ず蒲を抜かんと。衍能く蒲を釋して攻むる勿らしめん  
と。蒲の守恐れ、因つて再拜して曰く、願くは以て請はんと。因つて金三百斤を  
效して曰く、秦の兵苟くも退かば、請ふ必ず子を衛君に言ひて、子をして南面  
たらしめんと。故に胡衍金を蒲に受け、以て自ら衛に貴し。是に於て遂に蒲を解  
きて去る。還りて皮氏を撃つ。皮氏、未だ降らずして又去る。昭王の七年樛里子  
卒す。渭南章臺の東に葬る。曰く、後百歳是れ當に天子の宮有りて我が墓を  
夾むべしと。樛里子疾の室、昭王の廟の西渭南陰郷の樛里に在り。故に俗に  
之を樛里子と謂ふ。漢興るに至りて、長樂宮其の東に在り。未央宮其の西に在  
り。武庫正に其の墓に直る。秦人の諺に曰く、力は則ち任鄙、智は則ち樛里と。  
● 利、執つて以て利となすもの ● 蒲は衛國の郭南たり ● 秦兵に苦しむを知る ● 天子の宮城 ● 富  
るに同じ

知蒲之病矣。其言曰。必拔蒲。衍能令釋蒲勿攻。蒲守恐。因再拜曰。願以請。因效金三百斤。曰。秦兵苟退。請必言子於衛君。使子爲南面。故胡衍受金於蒲。以自貴於衛。於是遂解蒲而去。還擊皮氏。皮氏未降。又去。昭王七年。穰里子卒。葬于渭南章臺之東。曰。後百歲。是當有天。天子之宮。夾我墓。穰里子疾室。在於昭王廟西。渭南陰鄉穰里。故俗謂之穰里子。至漢興。長樂宮在其東。未央宮在其西。武庫正直其墓。秦人諺曰。力則任鄙。智則穰里。

甘茂者。下蔡人也。事下蔡史舉先生。學百家之說。因張儀穰里子。而求見秦惠王。王見而說之。使將而佐魏。章略定漢中地。惠王卒。武王立。張儀魏章去。東之魏。蜀侯輝相。

甘茂は下蔡の人なり。下蔡の史舉先生に事へて、百家の説を學ぶ。張儀・穰里子に因つて秦の惠王に見えんことを求む。王見て之を説ぶ。將として魏章を佐けて漢中に地を略定せしむ。惠王卒し、武王立つ。張儀魏章去り、東魏にく。蜀侯輝の相壯反す。秦甘茂をして蜀を定めしめ、還りて甘茂を以て左丞相となし、穰里子を以て右丞相となす。秦の武王の三年甘茂に謂ひて曰く、寡人車を容るゝばかり三川を通じ、以て周室を窺はんと欲す。而らば寡人死すとも朽ちざらんと。甘茂曰く、請ふ魏に之き、約して以て韓を伐たんと。向壽をして輔行せしむ。甘茂至る。向壽に謂ひて曰く、子歸りて之を王に言ひて曰へ、魏、臣に聽け

壯反。秦使甘茂定蜀。還而以甘茂爲左丞相。以穰里子爲右丞相。秦武王三年。謂甘茂曰。寡人欲下容車通三川。以窺周室。而寡人死不朽矣。甘茂曰。請之魏。約以伐韓。而令向壽輔行。甘茂至。謂向壽曰。子歸言之於王。曰。魏聽臣矣。然願王勿伐。事成。盡以爲子功。向

り。然れとも願はくは王伐つこと勿れと。事成らば盡く以て子の功となさんと。向壽歸り、以て王に告ぐ。王甘茂を息壤に迎ふ。甘茂至る。王其の故を問ふ。對へて曰く、宜陽は大縣なり。上黨南陽は之に積むこと久し。名は縣と曰へども、其の實は郡なり。今王數險に倍いて千里に行き、之を攻むるは難し。昔曾參の費に處りしとき、魯の人に曾參と姓名を同じくする者あり、人を殺す。人其の母に告げて曰く、曾參人を殺すと。其の母織ること自若たり。之を頃くして一人又之に告げて曰く、曾參人を殺すと。其の母尚ほ織ること自若たり。頃くして又一人之に告げて曰く、曾參人を殺すと。其の母杼を投げ、機を下り、杼を踏えて走る。夫れ曾參の賢と、其の母の之を信ずるとを以てしても、三人之を疑はしむれば、其の母懼る。今臣の賢曾參に若かず、王の臣を信ずること又曾參の母の曾參を信ずるに如かず。臣を疑はしむる者特に三人のみにあらず。臣大王の杼を投せんことを恐る。

壽歸以告王。王迎甘茂於息壤。甘茂至。王問其故。對曰。宜陽大縣也。上黨南陽積之。久矣。名曰縣。其實郡也。今王倍數險。行千里。攻之難。昔曾參之處。魯人有與曾參同姓名者。殺之。人告其母。母曰。曾參殺人。其母織自若也。頃之。一人又告之曰。曾參殺人。其母尙織自若也。頃又一人告之曰。曾參殺人。其母投杼下機。踰牆而走。夫以曾參之賢。與其母信之也。三人疑之。其母懼焉。今臣之賢。不若曾參。王之信臣。又不如曾參之母信曾參也。疑臣者。非特三人。臣恐大王之投杼也。

● 輔佐として行く、副使として行く ● 凶年の用意又は軍備として儲蓄を蓄積するをいふ ● 函谷、三峽、五谷などの險阻 ● 平氣なるさま、泰然 ● 機の上を織を停する器、和名ひ

始張儀西并巴蜀之地。北開西河之外。南取上庸。天下不以多張子。而以賢先王。魏文侯令樂羊將而攻中山。三年而拔之。樂羊返。始張儀西并巴蜀之地。北開西河之外。南取上庸。天下不以多張子。而以賢先王。魏文侯令樂羊將而攻中山。三年而拔之。樂羊返。始張儀西并巴蜀之地。北開西河之外。南取上庸。天下不以多張子。而以賢先王。魏文侯令樂羊將而攻中山。三年而拔之。樂羊返。

而論功。文侯示之。誘書一。樂羊再拜稽首曰。此非君之力也。今臣竊旅之臣也。楊里子公孫夷二人者。挾韓而議之。王必聽之。是王欺魏王。而臣受公仲侈之怨也。王曰。寡人不聽也。請與子盟。卒使丞相甘茂將兵伐宜陽。五月而不拔。楊里子公孫

請ふ子と盟はんと。卒に丞相甘茂をして兵に將として宜陽を伐たしむ。五月にして抜けず。楊里子公孫夷果して之を争ふ。武王甘茂を召して兵を罷めんと欲す。甘茂曰く、息壤彼に在りと。王曰く、之ありと。因りて大に悉く兵を起し、甘茂をして之を撃たしめ、首を斬ること六萬、遂に宜陽を抜く。韓の襄王公仲侈をして入りて謝せしめ、秦と平ぐ。武王竟に周に至りて周に卒す。其の弟立つ。昭王となす。王の母宣太后は楚の女なり。楚の懷王、前に秦楚を丹陽に敗りしとき、韓の救はざりしを怨み、乃ち兵を以て韓の雍氏を圍む。韓公仲侈をして急を秦に告げしむ。秦の昭王新に立つ。太后は楚の人なり。救ふことを肯せず。公仲甘茂に因る。茂韓の爲めに秦の昭王に言ひて曰く、公仲方に秦の救を得るあり。故に敢て楚を打ぐなり。今雍氏圍まれ、秦の師殺を下らず。公仲且に首を仰ぎて朝せざらんとす。公叔且に國を以て南楚に合せんとす。楚韓一とならば、魏氏敢て聽かずんばあらず。然らば則ち秦を伐つ。の形成らん。識ら

夷果爭之。武王召甘茂。欲罷兵。甘茂曰。息壤在彼。王曰。有之。因大

悉起兵。使甘茂擊之。斬首六萬。遂拔宜陽。韓襄王使公仲侈入謝與秦平。武王竟至周。而卒於周。其弟立爲昭王。王母宣太后。楚女也。楚懷王怨前秦敗楚於丹陽。而韓不肯救。乃以兵圍韓。雍氏。韓使公仲侈告急於秦。秦昭王新立。太后楚人。不肯救。公仲因甘茂。茂爲韓言於秦。昭王曰。公仲方有得秦救。故敢扞楚也。今雍氏圍秦。師不下殺。公仲且仰首而不朝。公叔且以國南合於楚。韓爲一。魏氏不敢不聽。然則伐秦之形成矣。不識。坐而待伐。孰與伐人之利。秦王曰。善。乃下師於殺。以救韓。楚兵去。

秦使向壽平宜陽。而使楊里子甘茂伐魏皮氏。向壽者。宣太后外族也。而與昭王少相長。故任用。向壽如

す。坐して伐たるを待つは、人を伐つの利なると孰與ぞやと。秦王曰く、善しと。乃ち師を殺に下し以て韓を救ふ。楚の兵去る。

一はこ 首を地につけて敬禮す 他國より來れる者 秦に朝せざらんとなす

秦向壽をして宜陽を平けしめ、楊里子甘茂をして魏の皮氏を伐たしむ。向壽は宣太后の外族なり。而して昭王と少より相長ず。故に任用せらる。向壽楚に如く。楚、秦の向壽を貴ぶを聞きて厚く向壽に事ふ。向壽秦の爲めに宜陽を守る。將に以て韓を伐たんとす。韓の公仲、蘇代をして向壽に謂はしめて曰く、禽も困めば車を覆へす。公韓を破りて公仲を辱しむ。公仲國を收めて復た秦に

楚。楚聞秦之貴向壽。而厚事向壽。向壽將以伐韓。韓公仲使蘇代謂向壽曰。禽困覆車。公破韓。韓公仲。公破秦。自以爲必可以封。今公與楚解口地。封小令尹。以杜陽。秦楚合。復攻韓。韓必亡。韓亡。公仲且躬率其私徒。以闕於秦。願公孰慮之。

事へん。自ら以爲へらく必ず以て封せらる可しと。今公楚に解口の地を與へ、小令尹を封するに杜陽を以てし、秦楚合して復た韓を攻めば、韓必ず亡びん。韓亡びば公仲且に躬ら其の私徒を率ゐ、以て秦を闕がんとす。願くは公之を孰慮せよと。向壽曰く、吾秦楚を合するは、以て韓に當るにあらざるなり。子壽が爲めに之を公仲に謁けて曰へ、秦韓の交合すべきなりと。蘇代對へて曰く、願くは公に謁ぐるあらん。人曰く、其の貴ぶ所以の者を貴ぶは貴しと。王の公を愛習するや、公孫奭に如かず。其の公を智能とするや、甘茂に如かず。今二人の者は皆秦の事に親らするを得ず。而るに公のみ獨り王と與に斷を國に主どる者は何ぞや。彼れ以て之を失ふあればなり。公孫奭は韓に黨し、甘茂は魏に黨す。故に王信ぜざるなり。今秦楚彊を争ひて公楚に黨せば、是れ公孫奭甘茂と道を同じくするなり。公何を以てか之に異ならん。人皆楚の善く變するを言ふ。而して公必ず之を亡はん。是れ自ら責を爲すなり。公王と其の變を謀るに如か

也。向壽曰。吾合秦楚。非以當韓也。子爲壽謂之公仲。曰。秦韓之交。可合也。蘇代對曰。願有謁於公。人曰。貴其所以貴者上。貴王之愛習公也。不如公孫爽。其智能公也。不如甘茂。今二人者。皆不得親於秦事。而公獨與王主斷於國者。何彼有以失之也。公孫爽黨於魏。故王不信也。今秦楚爭彊。而公黨於楚。是與公孫爽甘茂同道也。公何以異之。人皆言楚之善變也。而公必亡之。是自爲責也。公不如與王謀其變也。善韓以備楚。如此。則無患矣。韓氏必先以國從公孫爽。而後委國於甘茂。韓公之難也。今公言善韓以備楚。是外舉不辟難也。

向壽曰。然。吾

ざるなり。韓に善くし、以て楚に備へよ。此の如くなれば則ち患なけん。韓氏必ず先づ國を以て公孫爽に従ひ、而して後、國を甘茂に委せん。韓は公の難なり。今公韓に善くし、以て楚に備へんと言はば、是れ外舉難を辟けざるなりと。  
● 禽獸も困むこと危なれば猶ほよく抵觸して人の車を覆へず、人倒して必死となれば強くなるの論也 ● 公仲自ら必ず秦の封を得べしとなす ● 秦の地名、齊に近し ● 公仲韓の亡びんことを恐れ、私徒を率めて宜陽にゆき、向壽を拒がんとす。問は防 ● 向壽を斥す ● 公孫爽は韓に黨し甘茂は魏に黨するを以て、彼の二人は斯く愛習せられ智能とせられても、同事を委任せられずして心中失ふ所あり ● 楚より變改して併ずべからず若し變改せば向壽必ず亡敗せん、是れ自ら責をなすものなり ● 秦をして韓に親くして楚の變改に備へしめば向壽は患からん ● 外に在りての舉動即ち公事には、私の執難を棄てて顧みず

向壽曰く、然り、甚だ韓の合せんことを欲すと。對へて曰く、甘茂公仲に許

甚欲韓合。對曰。甘茂許公。仲以武遂。反宜陽之民。今公徒收之。甚難。向壽曰。然則奈何。武遂終不可得也。對曰。公奚不以秦爲韓求。願川於楚。此韓之寄地也。公求而得之。是令行於楚。而以其地德韓也。公求而不得。是韓楚之怨不解。而交走秦也。秦楚爭彊。而公

すに、武遂を以てし、宜陽の民を反す。今公徒に之を收めんとするは甚だ難しと。向壽曰く、然らば則ち奈何せん。武遂終に得べからざるなりと。對へて曰く、公奚ぞ秦を以て韓の爲めに願川を楚に求めざるや。此れ韓の寄地なり。公求めて之を得ば、是れ令楚に行はれて其の地を以て韓に德するなり。公求めて得ずんば、是れ韓楚の怨解けずして交々秦に走らん。秦楚彊を争ひて、公徐に楚を過め、以て韓を收む。此れ秦に利ありと。向壽曰く、奈何せん。對へて曰く、此れ善事なり。甘茂魏を以て齊を取らんと欲す。公孫爽韓を以て齊を取らんと欲す。今公宜陽を取り以て功となして楚韓を收め、以て之を安くして、齊魏の罪を誅む。是を以て公孫爽甘茂事無きなりと。甘茂竟に秦の昭王に言ひ、武遂を以て復之を韓に歸す。向壽公孫爽之を争へども得る能はず、向壽公孫爽此に由り怨みて甘茂を讒す。茂懼れ、魏の蒲阪を伐つことを輟めて亡け去る。楊里子魏と講じ、兵を罷む。

徐過楚以收韓。此利於秦。向壽曰。奈何。

對曰。此善事也。甘茂欲以魏取齊。公孫夷欲以韓取齊。今公取宜陽以爲功。收楚韓以安之。而誅齊魏之罪。是以公孫夷甘茂無事也。甘茂竟言秦昭王以武遂復歸之韓。向壽公孫夷爭之。不能得。向壽公孫夷由此怨讒甘茂。茂懼。輒伐魏蒲阪。亡去。樛里子與魏請罷兵。

甘茂之亡秦。奔齊。逢蘇代。代爲齊使於秦。甘茂曰。臣得罪於秦。懼而逃。無所容。跡。臣聞貧人女與富人女會。貧人女曰。我無以買燭。而子之燭。光幸有餘。

甘茂の秦を亡けて齊に奔るや、蘇代に逢ふ。代齊の爲めに秦に使す。甘茂曰く、臣罪を秦に得、懼れて遷逃して跡を容るゝ所無し。臣聞く、貧人の女富人の女と會績す。貧人の女曰く、我以て燭を買ふ無し。子の燭光幸に餘あり。子に餘光を分つべし。子が明を損するなくして、一の斯の便を得んと。臣今困めり。而して君方に秦に使用して路に當る。茂の妻子在り。願くは君餘光を以て之を振へと。蘇代許諾す。遂に使を秦に致す。已にして因つて秦王に説きて曰く、甘茂は非常の士なり。其の秦に居るや、累世重んぜらる。殺の塞より鬼谷

● 武遂宜陽はもと韓の邑にして秦の伐ちて之を取りしもの。今韓に返して其の民をして歸りて之に居らしむ  
● 楚、韓の頰川を侵取したり、蘇代向壽に説きて秦の威重を以て韓の爲めに楚を嚇して頰川を要求せしめんとするなり  
● 若し二國共に秦に事へば公則ち徐に説きて楚が韓の地を侵すを賣め以て韓の心を收めば秦に利あり

子可分我餘光。無損子明。而得一斯便焉。今臣困。而君方使秦。而當路矣。茂之妻子。盡爲。願君以餘光振之。蘇代許諾。遂致使於秦。已因説秦王曰。甘茂非常士也。其居於秦。累世重矣。自殺塞及至。鬼谷。其地形險易。皆明知之。彼以齊約韓魏。反以圖秦。非秦之利也。秦王曰。然則奈何。蘇代曰。王不若重其賞。厚其祿。以迎之。使彼來。則置之鬼谷。終身勿出。秦王曰。善。即賜之上卿。以相印。迎之於齊。甘茂不往。蘇代謂

に至るまで、其の地形險易、皆明かに之を知る。彼れ齊を以て韓魏を約し、反つて以て秦を圖らば秦の利にあらざるなりと。秦王曰く、然らば則ち奈何せん。蘇代曰く、王其の賢を重くし、其の祿を厚くし、以て之を迎ふるに若かず。彼をして來らしめば則ち之を鬼谷に置き終身出さなかれと。秦王曰く、善しと。即ち之に上卿を賜ひ、相印を以て之を齊より迎ふ。甘茂往かず。蘇代齊の湣王に謂ひて曰く、夫れ甘茂は賢人なり。今秦之に上卿を賜ひ、相印を以て之を迎ふ。甘茂王の賜を徳とし王の臣たるを好む。故に辭して往かず。今王何を以て之を禮するかと。齊王曰く、善しと。即ち之を上卿に位して之を處く。秦因つて甘茂の家を復し、以て齊に市る。

● 身を容るゝに所なし ● 相會して、廉を顧む ● 振は救ふなり ● 賂物、面會の時その身分に應じて對手に致す賂物 ● 留めおく

齊湣王曰。夫甘茂賢人也。今秦賜之上卿。以相印迎之。甘茂德王之賜。好爲王臣。故辭而不往。今王何以禮之。齊王曰。善。即位之上卿。而處之。秦因復甘茂之家。以市於齊。

齊使甘茂於楚。楚懷王新與秦合婚。而甘茂在楚。使人謂甘茂於秦。送甘茂於秦。楚王問於范蠡曰。寡人欲置相於秦。孰可。對曰。臣不足以識之。楚王曰。寡人欲相甘茂。可乎。對曰。不可。夫史舉下蔡之監門也。大不

齊甘茂を楚に使せしむ。楚の懷王新に秦と合婚して驩す。而して秦、甘茂楚に在りと聞き、人をして楚王に謂はしめて曰く、願くは甘茂を秦に送れと。楚王范蠡に問ひて曰く、寡人相を秦に置かんと欲す。孰か可なるかと。對へて曰く、臣以て之を識るに足らずと。楚王曰く、寡人甘茂を相とせんと欲す、可ならんかと。對へて曰く、不可なり。夫れ史舉は下蔡の監門なり。大にしては君に事ふることを爲さず、小にしては家室を爲めず。苟賤不廉を以て世に聞ゆ。甘茂之に事へて順なり。故に惠王の明、武王の察、張儀の辯にして甘茂之に事へ、十官を取りて罪せらるゝことなし。茂は誠に賢者なり。然れども秦に相とすべからず。夫れ秦の賢相あるは楚國の利にあらざるなり。且つ王前に召滑を越に用ひしめて、内行章義の難、越國亂る。故に楚南厲門を塞ぎて、江東を郡にす。王の功能

爲事君。小不爲家室。以苟賤不廉。聞於世。甘茂事之。順焉。故惠王之明。武王之察。張儀之辯。而甘茂事之。取十官。而無罪。茂誠賢者也。然不可相也。於秦。夫秦之有賢相。非楚國之利也。且王前嘗用召滑於越。而內行章義之難。越國亂。故楚南塞厲門。而郡江東。計王之功。所以能如此者。越國亂而楚治也。今王知用諸越。而忘用諸秦。臣以王爲距過矣。然則王若欲置相於秦。則莫若向壽者。利也。於是使使請秦相向壽於秦。秦卒相向壽。而甘茂竟不得復入秦。卒於魏。甘茂有孫。曰甘羅。

此の如くなる所以の者を計るに、越國亂れて楚治まるなり。今王諸を越に用ふるを知りて、諸を秦に用ふることを忘る。臣王を以て鉅過となす。然らば則ち王若し相を秦に置かんと欲せば、則ち向壽に若く者莫けん、可ならん。夫れ向壽の秦王に於けるは親なり。少きとき之と衣を同じくし、長じて之と車を同じくし、以て事を聴く。王必ず向壽を秦に相とせば、則ち楚國の利なりと。是に於て、使をして秦に請ひて向壽を秦に相とせしむ。秦卒に向壽を相とす。而して甘茂竟に復秦に入るを得ず。魏に卒す。甘茂孫あり。甘羅と曰ふ。

● 秦の昭王の二年、楚より迎へしなり ● 門の出入を誰何し、非常を警むる小吏の職名 ● 身分賤しく身を懸ぶることなくして廉潔ならざる事 ● 十たび官職に就きての意 ● 内心猜詐にして細心を包蔵し、外面には伴りて恩義を欺ちかたし難を楚國に構へたるをいふ ● 吳越の城みな楚の郡邑となる ● 大なる過失



甘羅者。甘茂孫也。茂既死。後。甘羅年十。二。事。秦。相。文。信。侯。呂。不。韋。秦。始。皇。帝。使。剛。成。君。蔡。澤。於。燕。三。年。而。燕。王。喜。使。太。子。丹。入。質。於。秦。秦。使。張。唐。往。相。燕。欲。與。燕。共。伐。趙。以。張。唐。謂。文。信。侯。曰。臣。嘗。爲。秦。昭。王。伐。趙。趙。怨。臣。曰。得。唐。者。與。百。里。之。地。今。之。燕。

甘羅は甘茂の孫なり。茂既に死したる後、甘羅年十二。秦の相文信侯呂不韋に事ふ。秦の始皇帝剛成君蔡澤を燕に使せしむ。三年、燕王喜太子丹をして入りて秦に質たらしむ。秦張唐をして往きて燕に相たらしめ、燕と共に趙を伐ち以て河間の地を廣めんと欲す。張唐文信侯に謂ひて曰く、臣嘗て秦の昭王の爲めに趙を伐つ。趙臣を怨みて曰く、唐を得る者には百里の地を與へんと。今燕に之に必ず趙を経ん。臣以て行く可からずと。文信侯快からず。未だ以て強ふるあらず。甘羅曰く、君侯何ぞ快からざるの甚しきやと。文信侯曰く、吾剛成君蔡澤をして燕に事へしむること三年。燕の太子丹已に入りて質たり。吾自ら張卿に請ひて燕に相とす。而れども行くことを肯ぜずと。甘羅曰く、臣請ふ、之を行らんと。文信侯叱して曰く、去れ。我身自ら之を請へども、而かも肯ぜず。女馮んぞ能く之を行らんと。甘羅曰く、夫れ項彙生れて七歳にして孔子の師と爲る。今臣生れて茲に十二歳なり。君其れ臣を試みよ、何ぞ遽かに叱せんやと。

必經趙。臣不可。以。行。文。信。侯。不。快。未。有。以。彊。甘。羅。曰。君。侯。何。不。快。之。甚。也。文。信。侯。曰。吾。令。剛。成。君。蔡。澤。事。燕。三。年。燕。太。子。丹。已。入。質。矣。吾。自。請。張。卿。相。燕。而。不。肯。行。甘。羅。曰。臣。請。行。之。文。信。侯。叱。曰。去。我。身。自。請。之。而。不。肯。女。馮。能。行。之。甘。羅。曰。夫。項。彙。生。七。歳。爲。孔。子。師。今。臣。生。十。二。歳。於。茲。矣。君。其。試。臣。何。遽。叱。乎。於。是。甘。羅。見。張。卿。曰。卿。之。功。孰。與。武。安。君。武。安。君。南。挫。彊。楚。北。威。燕。趙。戰。勝。攻。取。破。城。隴。邑。不。知。其。數。臣。之。功。不。如。也。甘。羅。曰。應。侯。之。用。於。秦。也。孰。與。文。信。侯。惠。張。卿。曰。應。侯。不。

是に於いて甘羅張卿を見て曰く、卿の功と武安君と孰與ぞやと。卿曰く、武安君南のかた彊楚を挫き、北のかた燕趙を威し、戦へば勝ち、攻むれば取り、城を破り、邑を墮つこと、其の數を知らず。臣の功如かざるなりと。甘羅曰く、應侯の秦に用ひらるゝや、文信侯の專なると孰與ぞやと。張卿曰く、應侯は文信侯の專なるに如かずと。甘羅曰く、卿明かに其の文信侯の專なるに如かざるを知るかと。曰く、之を知ると。甘羅曰く、應侯趙を攻めんと欲す。武安君之を難んず。咸陽を去ること七里にして立どころに杜郵に死す。今文信侯自ら卿に請ひて燕に相たらしむ。而るに行くことを肯ぜずんば、臣卿が死する所の處を知らずと。張唐曰く、請ふ孺子に因つて行かん。行を装治せしめよと。行くこと日あり。

● 行、を得んや ● 趙 ● 范雎

如文信侯事。甘羅曰。卿明知其不。如文信侯事。與曰。知之。甘羅曰。應侯欲攻趙。武安君雖之。去咸陽七里。而立死於杜郵。今文信侯自請卿相。燕而不肯行。臣不知卿所死處矣。張唐曰。請因孺子一行。令裝治行。行有日。

甘羅謂文信侯曰。借臣車五乘。請為張唐先報趙。文信侯乃入言。之於始皇曰。昔甘茂之孫甘羅年少耳。然名家之子孫。諸侯皆聞之。今者張唐欲稱疾不肯行。甘羅說而行。之。今願先報趙。請許遣之。始皇召見。使甘羅於趙。

甘羅文信侯に謂ひて曰く、臣に車五乘を借せ、請ふ張唐の爲めに先づ趙に報ぜん。と。文信侯乃ち入りて之を始皇に言ひて曰く、昔の甘茂の孫甘羅年少きのみ。然れども名家の子孫諸侯皆之を聞く。今張唐疾と稱して肯へて行かざらんと欲す。甘羅説きて之を行る。今先づ趙に報せんことを願ふ。請ふ許して之を遣らんと。始皇召見し、甘羅を趙に使せしむ。趙の襄王甘羅を郊迎す。甘羅趙王に説きて曰く、王燕の太子丹が入りて秦に質たるを聞くかと。曰く、之を聞くと。曰く、張唐が燕に相たるを聞くかと。曰く、之を聞くと。燕の太子丹秦に入るは、燕秦を欺かざるなり。張唐燕に相たるは、秦燕を欺かざるなり。燕秦相欺かずんば、趙を伐たん。危し。燕秦相欺かざるは異なる故無し。趙を攻めて河間を廣めん。と欲するなり。王臣に五城を虜らし、以て河間を廣むるに如かず。請ふ燕の

趙襄王郊迎甘羅。甘羅説趙王曰。王聞燕太子丹入質秦歟。曰。聞之。曰。聞張唐相燕歟。曰。聞之。燕太子丹入秦者。燕不欺秦也。張唐相燕者。秦不欺燕也。燕秦不相欺。一者。伐趙危矣。燕秦不相欺。二無異。故欲攻趙。而廣河間。王不如下。請歸五城。以廣河間。請歸燕太子。與彊趙。攻弱燕。趙王自立。自割五城。以廣河間。秦歸燕太子。趙攻燕。得上谷三十城。令秦有二十一。甘羅還報。秦乃封甘羅。以爲上卿。復以始甘茂田宅賜之。

太子を歸し、彊趙と與に弱燕を攻めんと。趙王立どころに自ら五城を割き、以て河間を廣む。秦燕の太子を歸す。趙燕を攻めて上谷の三十城を得、秦をして十一を有せしむ。甘羅還り報す。秦乃ち甘羅を封じ、以て上卿となす。復た始めの甘茂の田宅を以て之に賜ふ。

● 郊外まで至りて出迎へること。厚き饗なり ● 燕の太子丹秦に入るはの燕の字の上に「曰く」を補ひて見る  
● 持ち來りて秦に獻ぜしめ

太史公曰。楊里子以骨肉一重。固其理。而秦人稱其智。故頗采焉。甘

太史公曰く、楊里子骨肉を以て重んぜらるゝは固より其の理なり。而して秦人其の智を稱す。故に頗る采る。甘茂下蔡の閭閻より起り、名を諸侯に顯はし、彊き齊楚に重んぜらる。甘羅年少し。然れども一奇計を出し、聲後世に稱せらる。

茂起下蔡。閻。顯名諸侯。重。疆齊楚。甘。羅年少。然出。一奇計。聲稱。後世。雖非。篤。行之君子。然亦戰國之策士也。方秦之疆時。天下尤趨謀詐哉。

篤行の君子に非ずと雖も、然れども亦戰國の策士なり。秦の疆時に方り天下尤も謀詐に趨くかな。

● 骨と肉と相離るべからざるもの義、轉じて父子兄弟の如き血を分けたる親しき間柄。得皇子は惠王の異母弟なるを以ていふ ● 其の事跡に顯る探るべきものあり、以てこゝに記せり ● 村里。閻閻より起るは與閻より起るの意 ● 策計術計ある士

卷七十一

穰侯列傳第十二

穰侯魏冉者。秦昭王母宣太后弟也。其先楚人。姓芊氏。秦武王卒。無子。立其弟。昭王。昭王母故號爲芊。八子。及昭王即位。芊八子。號爲宣太后。宣太后非武王母。武王母號曰惠文后。先武王死。宣

穰侯魏冉は秦の昭王の母宣太后の弟なり。其の先は楚人、姓は芊氏。秦の武王卒す。子無し。其の弟を立てて昭王と爲す。昭王の母故の號を芊八子と爲す。昭王位に即くに及び芊八子號して宣太后と爲す。宣太后は武王の母に非ず。武王の母を號して惠文后と曰ふ。武王に先だちて死す。宣太后の二弟其の異父の長弟を穰侯と曰ふ。姓は魏氏、名は冉。同父の弟を芊戎と曰ひ、華陽君と爲す。而して昭王の同母弟を高陵君涇陽君と曰ふ。而して魏冉最も賢なり。惠王武王の時より、職に任じ事を用ふ。武王卒す。諸弟立たんことを爭ふ。唯魏冉のみ力めて能く昭王を立つることを爲す。昭王位に即き、冉を以て將軍と爲し、咸陽を衛らしむ。季君の亂を誅し、武王の后を逐ひて之を魏に出

太后二弟。其異父長弟曰穰侯。姓魏氏。名冉。同父弟曰平戎。爲華陽君。而昭王同母弟曰高陵君。涇陽君。而魏冉最賢。自惠王武王時。任職用事。武王卒。諸弟爭立。唯魏冉力爲能立昭王。昭王卽位。以冉爲將軍。衛咸陽。誅季君之亂。而逐武王后。出之魏。昭王諸兄弟不善者。皆滅之。威振秦國。昭王少。宣太后自治。任魏冉爲政。昭王七年。穰里子死。而使涇陽君質於齊。趙人樓緩來相秦。趙不利。乃使仇液之秦。請以

す。昭王の諸兄弟の不善なる者は皆之を滅す。威秦國に振ふ。昭王少し、宣太后自ら治め、魏冉に任じて、政を爲す。昭王の七年穰里子死す。而して涇陽君をして齊に質たらしむ。趙人樓緩來りて秦に相たり。趙利とせず。乃ち仇液をして秦に之き、請ひて魏冉を以て秦の相たらしむ。仇液將に行かんとす。其の客宋公液に謂ひて曰く、秦公に聽かすんば、樓緩必ず公を怨みん。公樓緩に謂ひて請ふ公の爲めに秦を急にする毋れと曰ふに若かず。秦王、趙の魏冉を相とするを請ふの急ならざるを見、且に公に聽かざらん。公言つて事成らすんば以て樓子に徳せん。事成らば魏冉故公を徳とせんと。是に於て仇液之に従ふ。秦果して樓緩を免じて魏冉秦に相たり。呂禮を誅せんと欲す。魏齊に出奔す。

● 秦の制にて天子の妾の一。夫人以下の爵にして其の爵第四等とす ● 季君は公子莊たり。假立して季君といふ。穰侯將軍とたり、咸陽を都り、季君及び庶太后を誅す ● 魏同策仇都に作る

魏冉爲秦相。仇液將行。其客宋公謂液曰。秦不聽公。樓緩必怨公。公不若謂樓緩曰。魏冉急秦。秦王見趙請相魏冉之不急。且不聽公。公言而事不成。以德樓子事成。魏冉故德公矣。於是仇液從之。而秦果免樓緩。而魏冉相秦。欲誅呂禮。禮出奔齊。

昭王十四年、魏冉白起を擧げ、向壽に代りて將たらしめ、韓魏を攻めて之を伊闕に敗る。首を斬ること二十四萬、魏將公孫喜を虜にす。明年又楚の宛葉を取る。魏冉病を謝して相を免す。客卿壽燭を以て相と爲す。其の明年燭免す。復冉を相とす。乃ち魏冉を穰に封じ、復陶に益し封す。號して穰侯と曰ふ。穰侯封せられて四歳、秦の將と爲りて魏を攻む。魏河東の方四百里を獻す。魏の河内を抜き、城を取ることに大小六十餘。昭王の十九年、秦西帝と稱し、齊東帝と稱す。月餘にして呂禮來りて、齊秦各々復帝を歸して王となる。魏冉復た秦に相たり。六歳にして免じ、免じて二歳にして復た秦に相たり。四歳にして白起をして楚の郢を抜かしめ、秦南都を置く。乃ち白起を封じて武安君と爲す。白起は穰侯の任舉せし所なり。相善し。是に於て穰侯の富王室より富む。昭王の三十

將攻魏。魏獻河東方四百里。拔魏之河內。取城大小六十餘。昭王十九年。秦稱西帝。齊稱東帝。月餘。呂禮來。而齊秦各復歸帝爲王。魏冉復相秦。六歲而免。免二歲。復相秦。四歲而使白起拔楚之郢。秦置南郡。乃封曰起爲武安君。白起者穰侯之所任也。相善。於

二年穰侯相國と爲り、兵に將として魏を攻め、芒卯を走らせ、北宅に入る。遂に大梁を圍む。梁の大夫須賈穰侯に説きて曰く、臣聞く魏の長吏魏王に謂ひて曰く、昔梁の惠王趙を伐ち戦ひて三梁に勝ち邯鄲を抜く。趙氏割かずして邯鄲復た歸る。齊人衛を攻めて故國を抜き、子良を殺し、衛人割かずして故地復た反る。衛趙の、國全く兵剋くして、地諸侯に并せられざる所以の者は、其の能く難きを忍びて地を出すを重るを以てなり。宋・中山數々伐たれ地を割き、國隨ひて以て亡ぶ。臣以爲らく、衛・趙法る可くして宋・中山戒となす可しと。秦は貪戾の國なり。而して親母く、魏氏を蠶食し、又晉國を盡す。戦ひて暴子に勝ち、八縣を割く。地未だ畢く入れざるに兵復た出づ。夫れ秦何の厭くことか之れあらんや。今又芒卯を走らせ、北宅に入る。此れ敢へて梁を攻むるに非ざるなり。且に王を劫かし、以て多く地を割くことを求めんとするなり。王必ず聽すこと勿れ。今王楚趙に背いて秦に講ず。楚趙怒りて王を去てん。王と秦に事ふるこ

是穰侯之富。富於王室。昭王三十二年。穰侯爲相國。將兵攻魏。走芒卯入北宅。遂闢大梁。梁大夫須賈説穰侯曰。臣聞魏之長吏謂魏王曰。昔梁惠王伐趙。戰勝三梁。拔邯鄲。趙氏不割。而邯鄲復歸。齊人攻衛。拔故國。殺子良。衛人不割。而故地復反。衛趙之所以國全。兵勁。而地不并於諸侯者。以其能忍難。而重出地也。宋中山數伐割地。而國隨以亡。臣以爲衛趙可法。而宋中山可爲戒也。秦貪戾之國也。而毋親。蠶食魏氏。又盡晉國。戰勝於子。割八縣。地未畢入。兵復出矣。夫秦何厭之有哉。今又走芒卯入北宅。此非敢攻梁也。且劫王以求多割地。王必勿聽也。今王背楚趙而講秦。楚趙怒而去王。與王爭事秦。秦必受之。秦挾楚趙之兵。以復攻梁。則國求無亡。不可得也。願王之必無講也。王若欲講。少割而有質。不然必見欺。此臣之所聞於魏也。願君王之以是慮事也。

とを争はば、秦必ず之を受けん。秦、楚趙の兵を挾み、以て復た梁を攻めば、則ち國亡ぶる無きを求むるも得べからざるなり。願はくは王の必ず講すること無きを。王若し講せんと欲せば、少しく割きて質を有せよ。然らずんば必ず欺かれん。此れ臣の魏より聞く所なり、願はくは君王の是を以て事を慮らんことを。

● 秦の法、人を推置して其人その職に稱はざれば己れその罪を受くること ● 宅陽の一名 ● 食りて道にもとれる國 ● 河西河東河内は魏の地にして故の晉國なり、今秦の魏を蠶食したるを晉國を盡くすといへるなり

● 穰侯將也 ● 和なり ● 楚趙魏王を捨て秦に事へんとし、魏王亦た楚趙に背いて秦に和せんとし、互に秦に事ふることを争はば、秦は楚趙を受け容れん ● 僅少の土地を割きて秦より確かなる人質を取り置けよ



明年魏背秦與齊從親。秦使穰侯伐魏。斬首四萬。走魏將暴鳶。得魏三縣。穰侯益封。明年穰侯與白起客卿胡陽復攻趙韓魏破芒卯於華陽下。斬首十萬。取魏之卷蔡陽長社。趙氏觀津。且與趙觀津。益趙以兵伐齊。齊襄王懼。使蘇代爲齊陰遣穰侯書曰。臣聞往

明年魏、秦に背き齊と從親す。秦穰侯をして魏を伐たしむ。首を斬ること四萬。魏の將暴鳶を走らせ、魏の三縣を得、穰侯益し封ぜらる。明年穰侯白起の客卿胡陽と復た趙韓魏を攻め、芒卯を華陽の下に破り、首を斬ること十萬、魏の卷・蔡陽・長社・趙氏の觀津を取る。且つ趙に觀津を與へ、趙に益すに兵を以てし、齊を伐つ。齊の襄王懼れて蘇代をして齊の爲めに陰かに穰侯に書を遣らしめて曰く、臣聞く、往來する者言ひて曰く、秦將に趙に甲四萬を益し、以て齊を伐たんとすと。臣竊かに之を弊邑の王に必して曰く、秦王明にして計に熟す。穰侯智にして事に習ふ。必ず趙に甲四萬を益し、以て齊を伐たざらん。是れ何ぞや。夫れ三晉の相與するや、秦の深讎なり。百たび相背き、百たび相欺くも、不信と爲さず、無行と爲さず。今齊を破り以て趙を肥やす。趙は秦の深讎なり、秦に利ならざる此れ一なり。秦の謀る者必ず曰はん、齊を破り、晉楚を弊り、而して後晉楚の勝を制せん。夫れ齊は罷國なり。天下を以て齊を攻むるは、千鈞の

來者言曰。秦將益趙甲四萬以伐齊。臣竊必之弊邑之王曰。秦王明而熟於計。穰侯智而習於事。必不益趙甲四萬以伐齊。是何也。夫三晉之相與也。秦之深讎也。百相欺也。百相欺也。不爲不信。不爲無行。今破齊而肥趙。趙秦之深讎。不利於秦。此一也。秦之謀者必曰。破齊弊晉楚。而後制晉楚之勝。夫齊罷國也。以天下攻齊。如下以千鈞之

弩を以て、潰癘を決するが如きなり、必ず死せん。安んぞ能く晉楚を弊らん。此れ二なり。秦少しく兵を出さば、則ち晉楚信ぜざるなり。多く兵を出さば、則ち晉楚秦に制せられん。齊恐れて秦に走らずんば、必ず晉楚に走らん。此れ三なり。秦、齊を割き以て晉楚に啖はしめん。晉楚之を案するに兵を以てせば、秦反つて敵を受けん。此れ四なり。是れ晉楚、秦を以て齊を謀り、齊を以て秦を謀るなり。何ぞ晉楚の智にして秦齊の愚なるや。此れ五なり。故に安邑を得、以て善く之に事へば、亦必ず患無けん。秦安邑を有せば韓氏必ず上黨無けん。天下の腸胃を取ると、兵を出して其の反せざるを懼るゝと孰れか利なる。臣故に曰ふ、秦王明にして計に熟せり。穰侯智にして事に習へり。必ず趙に甲四萬を益し以て齊を伐たざらんと。是に於て穰侯行かず、兵を引いて歸る。

● 穰侯を伐てば、晉楚また弊敗せんとも ● 罷國したる國 ● つぶれかゝりたるてきもの

每決潰難上也。必死。安能擊晉楚。此二也。秦少出兵。則晉楚不信也。多出兵。則晉楚爲制。於秦。齊恐不走秦。必走晉楚。此三也。秦割齊以啖晉楚。晉楚案之以兵。秦反受敵。此四也。是晉楚以秦謀齊。以齊謀秦也。何晉楚之智。而秦齊之愚。此五也。故得安邑。以善事之。亦必無患矣。秦有安邑。韓氏必無上黨矣。取天下之腸胃。與出兵。而懼其不反也。孰利。臣故曰。秦王明而熟於計。穰侯智而習於事。必不益趙甲四萬。以伐齊矣。於是穰侯不行。引兵而歸。

昭王三十六年。相國穰侯。言客卿竈。欲伐齊。取剛壽。以廣其陶邑。於是魏人范雎。自謂張祿先生。說穰侯。之伐齊。乃越三晉。以攻齊也。以此時。奸說秦昭王。昭

昭王の三十六年、相國穰侯客卿竈に言ひ、齊を伐つて剛壽を取り以て其の陶邑を廣めんと欲す。是に於て魏人范雎自ら張祿先生と謂ひ、穰侯の齊を伐ち乃ち三晉を越えて以て齊を攻むるを諷る。此時を以て奸して秦の昭王に説く。昭王是に於て范雎を用ふ。范雎、宣太后制を専らにし、穰侯權を諸侯に擅にし、涇陽君・高陵君の屬太だ侈りて王室より富むと言ふ。是に於いて秦王悟り、乃ち相國を免じ、涇陽の屬をして皆關を出でて封邑に就かしむ。穰侯關を出づるとき、輜軍千乗有餘あり。穰侯陶に卒す。囚つて葬る。秦復た陶を收めて郡と爲す。

爲す。宗族の意

王於是用范雎。范雎言宣太后專制。穰侯權於諸侯。涇陽君高陵君之屬太侈。富於王室。於是秦王悟。乃免相國。令涇陽之屬皆出關。就封邑。穰侯出關。輜車千乘有餘。穰侯卒於陶。而因葬焉。秦復收陶爲郡。

太史公曰。穰侯昭王親舅也。而秦所以東益地。弱諸侯。嘗稱帝於天下。天下皆西鄉。穰侯之功也。及其貴極富。一夫開說。身折勢奪。而以憂死。況於羈旅之臣乎。

● 顯を地につくち設け、頼りてする最敬禮。謹みて服従するをいふ



卷七十三

白起王翦列傳第十三

白起者。郿人也。善用兵。事秦昭王。昭王十三年。而白起爲左庶長。將而擊韓之新城。是歲穰侯相秦。擊任鄙以爲漢中。守其明年。白起爲左更。攻韓魏於伊闕。斬首二十四萬。又虜其將公孫喜。拔五

白起は郿の人なり。善く兵を用ふ。秦の昭王に事ふ。昭王の十三年にして白起左庶長と爲り、將として韓の新城を撃つ。是の歲穰侯秦に相たり。任鄙を擧げて以て漢中の守と爲す。其の明年白起左更と爲り、韓魏を伊闕に攻め、首を斬ること二十四萬、又其の將公孫喜を虜にし五城を拔く。起遷りて國尉と爲る。河を涉りて韓の安邑以東乾河に到るまでを取る。明年白起大良造と爲り、魏を攻めて之に拔き、城を取る事小大六十一。明年起客卿錯と與に垣城を攻めて之を拔く。後五年白起趙を攻めて光狼城を拔く。後七年白起楚を攻めて鄢郢の五城を拔く。其の明年楚を攻め、郢を拔き、夷陵を燒き、遂に東竟陵に至る。楚王亡けて郢を去り、東に走りて陳に徙る。秦郢を以て南郡となす。白

城起遷爲國尉。涉河取韓安邑。以東到乾河。明年白起爲大良造。攻魏拔之。取城小大六十一。明年起與客卿錯攻垣城。拔之。後五年。白起攻趙拔光狼城。後七年。白起攻楚拔鄢郢五城。其明年攻楚拔郢燒夷陵。遂東至竟陵。楚王亡去。郢東走徙陳。秦以郢爲南

起遷りて武安君と爲る。武安君囚りて楚を取り、巫黔中郡を定む。昭王の三十四年白起魏を攻め、華陽を拔きて芒卯を走らせ、而して三晉の將を虜にし、首を斬ること十三萬。趙の將賈偃と戰ひて、其の卒二萬人を河中に沈む。昭王の四十三年、白起韓の陘城を攻めて五城を拔き、首を斬ること五萬。四十四年白起南陽の太行道を攻めて之を絶つ。四十五年韓の野王を伐つ。野王秦に降る。上黨の道絶ゆ。其の守馮亭民と謀りて曰く、鄭の道已に絶ゆ。韓必ず民と爲すを得べからず。秦の兵日に進まば、韓應する能はざらん。上黨を以て趙に歸するに如かず。趙若し我を受けば、秦怒りて必ず趙を攻めん。趙兵を被らば、必ず韓に親しまん。韓趙一と爲らば、則ち以て秦に當るべしと。因つて人をして趙に報せしむ。趙の孝成王、平陽君平原君と與に之を計る。平陽君曰く、受くること勿きに如かず。之を受くるの禍は得る所より大ならんと。平原君曰く、故無くして一郡を得。之を受くるは便なりと。趙之を受く。因りて馮亭を封じて華陽君と

爲す。

● 官名 ● 太尉 ● 安邑以東乾河に至るまでは晉韓の故地なり ● 河内に屬し太行の東南にあり ● 河南新鄭、韓の都 ● 韓は上黨の人民を己れの治下の人民となして上黨を教ふ事能はざらん

郡。白起遷爲武安君。武安君因取楚定二巫黔中郡。昭王三十四年。白起攻魏拔華陽走芒卯。而虜三晉將斬首十三萬。與趙將賈偃戰。沉其卒二萬人於河中。昭王四十四年。白起攻韓陘城。拔五城。斬首五萬。四十四年。白起攻南陽。太行道絕之。四十五年。伐韓之野。野王降秦。上黨道絕。其守馮亭。與民謀曰。鄭道已絕。韓必不可得爲民。秦兵日進。韓不能應。不如以二上黨歸趙。趙若受我。秦怒必攻趙。趙被兵必親韓。韓趙爲一。則可以當秦。因使人報趙。趙孝成王與平原君計之。平原君曰。不如勿受。受之禍大於所得。平原君曰。無故得一郡受之便。趙受之。因封馮亭爲華陽君。

四十六年。秦攻韓緹氏。閻拔之。四十七年。秦使左庶長王齕攻韓取上黨。上黨民走趙。趙軍長平。以按據

四十六年、秦、韓の緹氏・閻を攻めて之を抜く。四十七年、秦左庶長王齕をして韓を攻めしめて上黨を取る。上黨の民趙に走る。趙長平に軍し以て上黨の民を按據す。四月齕因りて趙を攻む。趙廉頗をして將たらしむ。趙軍の士卒秦の斥兵を犯す。秦の斥兵趙の裨將茄を斬る。六月趙軍を陥れて二鄣四尉を取る。七月趙の軍壘壁を築きて之を守る。秦又其の壘を攻めて二尉を取り、其の陣を敗り、

上黨民。四月。齕因攻趙。趙使廉頗將。趙軍士卒犯秦斥兵。秦斥兵斬趙裨將茄。六月。昭趙軍取二鄣四尉。七月。趙軍築壘壁而守之。秦又攻其壘。取二尉。敗其陣。奪西壘壁。廉頗堅壁以待秦。秦數挑戰。趙兵不出。趙王數以爲讓。而秦相應。侯又使人行千金於趙。爲甲

西の壘壁を奪ふ。廉頗壁を堅くして以て秦を待つ。秦數々、戰を挑む。趙兵出でず、趙王數々、以て讓むることをなす。而して秦の相應侯又人をして千金を趙に行り、反間をなさしめて曰く、秦の惡む所は獨り馬服の子趙括が將たるを畏るのみ。廉頗與みし易し、且に降らんとすと。趙王、既に廉頗が軍多く失亡し、軍數々敗れ、又反つて壁を堅うして敢へて戰はざるを怒り、而して又秦の反間の言を聞きて因りて趙括をして廉頗に代り將として以て秦を撃たしむ。秦馬服の子將たるを聞き、乃ち陰かに武安君白起をして上將軍たらしめ、王齕をして尉裨將たしむ。令して軍中敢へて武安君將たるを泄す者有らば斬らんと。趙括至れば、則ち兵を出して秦軍を撃つ。秦軍詳り敗れて走り、二奇兵を張りて以て之を劫かす。趙軍勝を逐ひ、追ひて秦の壁に造る。壁堅く拒ぎて入るを得ず。而して秦の奇兵二萬五千人、趙軍の後を絶つ。又一軍五千騎、趙の壁間を絶つ。趙軍分れて二となり、糧道絶ゆ。而して秦輕兵を出して之を撃つ。趙戰利あらず、因りて

反間上曰。秦之所惡。獨畏二馬服子趙括將一耳。廉頗易與。且降矣。趙王既怒廉頗軍多失亡。軍數敗。又反堅壁。不三敢戰。而又不三秦反間之言。因使趙括代廉頗。將以擊秦。秦聞馬服子將。乃陰使武安君白起爲上將軍。而王齕爲副將。令軍中有敢泄武安君將者上斬。趙

壁を築きて堅守し、以て救の至るを待つ。秦王趙の食道絶えたるを聞き、王自ら河内之に之き、民に爵各一級を賜ふ。年十五以上を發して悉く長平に詣らしめ、趙の救及び糧食を遮絶す。九月に至り趙の卒食を得ざる。こと四十六日、皆内陰かに相殺して食ふ。來りて秦の壘を攻めて出でんと欲し、四隊と爲し四五たび之を復すれども出づる能はず。其の將軍趙括銳卒を出し、自ら搏戰す。秦軍射て趙括を殺す。括が軍敗る。卒四十萬人、武安君に降る。武安君計りて曰く、前に秦已に上黨を抜く。上黨の民秦と爲るを樂はずして趙に歸す。趙の卒反覆す。盡く之を殺すに非ずんば、恐らくは亂を爲さんと。乃ち詐を挟んで盡く之に坑殺す。其の小なる者二百四十人を遣りて趙に歸し、前後斬首虜四十五萬人。趙人大いに震ふ。

● 地名 ● 落河かしむ、安堵せしむ。抑へて其處に據らしむる義 ● 斥候兵 ● 大將の補佐たる將官。副將 ● 郡は堡城。尉は官をり ● 大將の補佐たる將軍。副將 ● 輕便したる銳兵 ● 士卒相互に殺してその肉を食ふ ● 趙少つち一隊ふ ● 好み圖ふ ● 穴に落し入れて殺す。たき埋めにして殺す ● 首を斬

り又は處にするると四十五萬人

括重則出兵。擊秦軍。秦軍詳敗而走。張二絕趙軍後。又一因築壁堅守。以詣長平。遮絶趙人降武安君。武安君爲亂。乃挾詐大震。

奇兵以劫之。趙軍逐勝。追造秦壁。壁堅拒不得入。而秦奇兵二萬五千人。軍五千騎。絕趙壁間。趙軍分而爲二。糧道絕。而秦出輕兵二萬五千人。待救至。秦王聞趙食道絕。王自之河內。賜民爵各一級。發二年十五以上悉救及糧食。至九月。趙卒不得食。四十六日。皆内陰相殺食。來攻秦壘。欲出。不能出。其將軍趙括出銳卒。自搏戰。秦軍射殺趙括。括軍敗。卒四十萬人。盡坑殺之。遺其小者二百四十人。歸趙。前後斬首虜四十五萬人。趙人大震。

四十八年。十月。秦復定上黨郡。秦分軍爲二。王齕攻皮牢。拔之。司馬梗定太原。韓趙恐使蘇代厚幣說秦。秦相應侯曰。武安君攜馬服

四十八年十月秦復た上黨郡を定む。秦軍を分ちて二と爲し、王齕皮牢を攻めて之を抜く。司馬梗太原を定む。韓趙恐れて蘇代をして幣を厚くして秦の相應侯に説かしめて曰く、武安君馬服の子を携にせしかと。曰く、然りと。又曰く、即ち邯鄲を圍むかと。曰く、然りと。趙亡びば、則ち秦王王たらん。武安君三公と爲らん。武安君が秦の爲めに戦ひ勝ちて攻め取りし所の者、七十餘城。南鄭郡。漢中を定め、北趙括の軍を擒にす。周・邵・呂望の功と雖も、此より益さじ。今趙

子乎。曰然。又曰。即圍邯鄲。手曰。然。趙亡。則秦王王矣。武安君爲三公。武安君所爲。秦戰勝攻取者七十餘城。南定鄆郢。漢中。北拔趙。括之軍。雖周。邵呂望之功。不益於此矣。今趙亡。秦王則武安君必爲三公。君能爲之下乎。雖無欲爲之下。固不得已矣。秦嘗攻韓。圍邯鄲。丘二上黨。上黨之民皆反爲趙。天下不樂爲秦民之日久矣。今亡趙。北地入燕。東地入齊。南地入韓。魏則君之所得民。亡幾何人。故不如因而割之。無以爲武安君功也。於是應侯言於秦王曰。秦兵勞。請許韓趙之地以和。且休士卒。王聽之。割韓垣雍趙六城以和。正月。皆罷兵。武安君聞之。由是與應侯有隙。

○周公旦、郟公爽、太公望呂尚文 ○ 白起が攻取せし韓趙の地を割くをいふ

亡び、秦王王たらば則ち武安君必ず三公と爲らん。君能く之が下爲らんか。之が下爲るを欲する無しと雖も、固より已むを得ざらん。秦嘗て韓を攻め、邢丘を圍みて上黨を困しましむ。上黨の民、皆反て趙の爲めにす。天下秦の民と爲るを樂はざるの日久し。今趙を亡ほして北地燕に入り、東地齊に入り、南地、韓魏に入らば、則ち君の得る所の民幾何人も亡からん。故に因つて之を割き、以て武安君の功と爲す無きに如かずと。是に於て應侯秦王に言ひて曰く、秦兵勞る。請ふ韓趙の地を割き以て和せんとするを許し、且つ士卒を休めんと。王之を聽し、韓の垣雍趙の六城を割き以て和す。正月皆兵を罷む。武安君之を聞きて、是に由りて應侯と隙あり。

其九月。秦復發兵。使五大夫王陵攻趙邯鄲。是時武安君病不任行。四十九年。正月。陵攻邯鄲。少利。秦益發兵佐陵。陵兵亡五校。武安君病愈。秦王欲使武安代陵將武安君言曰。邯鄲實未易攻也。且諸侯救日至。彼諸侯怨秦之日久矣。今秦雖破長平軍。而秦卒

其の九月秦復兵を發し、五大夫王陵をして趙の邯鄲を攻めしむ。是の時武安君病みて行くに任へず。四十九年正月。陵邯鄲を攻めて、利少なし。秦益々兵を發して陵を佐く。陵の兵五校を亡ふ。武安君病愈ゆ。秦王武安君をして陵に代りて將たらしめんと欲す。武安君言ひて曰く、邯鄲は實に未だ攻め易からざるなり。且に諸侯の救日に至らんとす。彼の諸侯秦を怨むの日久し。今秦長平の軍を破ると雖も、而かも秦の卒死する者半に過ぐ。國內空しく、遠く河山を絶てて人の國都を爭ふ。趙其の内に應じ、諸侯其の外を攻めて秦兵を破らんこと必せり。不可なりと。秦王自ら命すれども行かず。乃ち應侯をして之を請はしむ。武安君終に辭して行くことを肯ぜず。遂に病と稱す。秦王王龔をして陵に代りて將たらしむ。八九月邯鄲を圍む。拔くこと能はず。楚春申君及び魏の公子をして兵數十萬に將として秦軍を攻めしむ。秦軍多く失亡す。武安君言ひて曰く、秦臣が計を聽かず。今如何ぞやと。秦王之を聞きて怒り、彊ひて武安君を起

死者過牛。國內空。遠絕。河山。而爭。入國。都。趙。應。其。內。諸。侯。攻。其。外。破。秦。兵。必。矣。不可。秦王。自命。不行。及。使。應。侯。請。之。武。安。君。終。辭。不。肯。行。遂。稱。病。秦王。使。王。卮。代。陵。將。八。九。月。圍。邯。鄲。不。能。拔。楚。使。春。申。君。及。魏。公。子。將。兵。數。十。萬。攻。秦。軍。秦。軍。多。失。亡。武。安。君。言。曰。秦。

たしむ。武安君遂に病篤しと稱す。應侯之を請へども起たず。是に於て武安君を免じて士伍となし之を陰密に遷す。武安君病みて未だ行くこと能はず。居ること三月、諸侯秦軍を攻むること急にして、秦軍數々却き、使者日々に至る。秦王乃ち人をして白起に遣り、咸陽中に留るを得ざらしむ。武安君既に行き、咸陽の西門を出づること十里、杜郵に至る。秦の昭王應侯羣臣と議して曰く、白起の遷るや、其の意向快快として服せず、餘言ありと。秦王乃ち使者をして之に劍を賜ひ、自裁せしむ。武安君劍を引き將に自劉せんとして曰く、我れ何ぞ天に罪ありて此に至るやと。良久しうして曰く、我れ固當に死すべかりき。長平の戰、趙卒の降りしもの數十萬人。我詐りて盡く之を阬にせり。是れ以て死するに足ると。遂に自殺す。武安君の死するや、秦の昭王の五十年十一月を以てす。死すれども其の罪にあらず。秦人之を憐れみ、郷邑皆祭祀す。

● 五人の將校 ● 故の咸陽城は渭水の北にあり、西門を出づる十里杜郵といふは今の咸陽城中なりと ● 不

不聽。臣計。今如何矣。秦王聞之怒。遷起。

武安君遂稱病篤。應侯請之不起。於是免武安君爲士伍。遷之陰密。武安君病未幾。行。居三月。諸侯攻秦軍。數却。使者日至。秦王乃使人遣白起。不令得留咸陽中。武安君既行。出咸陽西門十里。至杜郵。秦昭王與應侯羣臣議曰。白起之遷。其意尙快快不。服。有餘言。秦王乃使使者賜之劍。自裁。武安君引劍將自劉曰。我何罪乎。天而至此哉。良久曰。我固當死。長平之戰。趙卒數十萬人。我詐而盡阬之。是足以死。遂自殺。武安君之死也。以秦昭王五十年十一月。死而非其罪。秦人憐之。郷邑皆祭祀焉。

満たるさま、樂しめる形容 ● 餘言を泄したる言 ● 自殺、裁は切 ● 自ら首斬る、到は刀を以て首を断つなり、自刺 ● 坑殺す

王翦者。頻陽東郷人也。少而好兵。事秦始皇。始皇十一年。翦將攻趙。拔九城。十八年。翦將攻趙。歲餘。遂拔趙。趙王降。盡定。

王翦は頻陽の東郷の人なり。少にして兵を好む。秦の始皇に事ふ。始皇の十一年、翦將として趙の關與を攻めて之を破り、九城を拔く。十八年、翦將として趙を攻むること歳餘、遂に趙を拔く。趙王降る。盡く趙の地を定めて郡と爲す。明年、燕荆軻をして賊を秦に爲さしむ。秦王王翦をして燕を攻めしむ。燕王喜遼東に走る。翦遂に燕の薊を定めて還る。秦王の子王賁をして荆を撃たしむ。荆の兵敗る。還つて魏を撃つ。魏王降り、遂に魏の地を定む。秦の始皇既に三

趙地爲郡。明年。燕使荆軻爲賊於秦。秦王使王翦攻之。燕王喜走遼東。翦遂定燕。而還。秦使翦子王賁擊荆。荆兵敗。還擊魏。魏王降。遂定魏地。秦始皇既滅三晉。走燕王。而數破荆師。秦將李信者。年少壯勇。嘗以兵數千。逐燕太子丹。至於衍水中。卒破得丹。始皇

晉を滅し、燕王を走らせて、數々荆の師を破る。秦の將李信といふ者年少くして壯勇なり。嘗て兵數千を以て燕の太子丹を逐ひて衍水の中に至り、卒に丹を破り得たり。始皇以て賢勇となす。是に於て始皇李信に問ふ。吾攻めて荆を取らんと欲す。將軍に於て度るに、幾何人を用ひて足るか。李信曰く、二十萬人を用ふるに過ぎずと。始皇王翦に問ふ。王翦曰く、六十萬人に非ざれば不可なりと。始皇曰く、王將軍老いたり。何ぞ怯なるや。李將軍果して勢壯勇。其の言是なりと。遂に李信及び蒙恬をして二十萬に將として南のかた荆を伐たしむ。王翦言用ひられず、因りて病と謝し、歸りて頻陽に老す。李信平與を攻め、蒙恬寢を攻め大いに荆の軍を破る。信又鄒郢を攻めて之を破る。是に於て兵を引いて西す。蒙恬と城父に會す。荆人因つて之に隨ひ三日三夜頓舍せず、大に李信の軍を破り、兩壁に入り、七都尉を殺す。秦の軍走る。

● 賊は殺なり。秦王を殺害せんとせしめしをいふ ● 世事を避けて隱居す、隱居す ● 頓は留まるをいふ、頓舍は留まり難ること

以爲賢勇。於是始皇問李信。吾欲攻取荆。於將軍度。用幾何人而足。李信曰。不過用二十萬人。始皇問王翦曰。非二十萬人不可。始皇曰。王將軍老矣。何怯也。李將軍果壯勇。其言是也。遂使李信及蒙恬將二十萬南伐荆。王翦言不用。因謝病歸老於頻陽。李信攻平與。蒙恬攻郢。大破荆軍。信又攻鄒郢。破之。於是引兵而西。與蒙恬會城父。荆人因隨之。三日三夜不頓舍。大破李信軍。入兩壁。殺七都尉。秦軍走。

始皇聞之大怒。自馳如頻陽。見謝王翦曰。寡人以不用將軍計。李信果辱秦軍。今聞荆兵日進而西。將軍雖病。獨忍棄寡人乎。王翦謝曰。老臣罷病悖亂。唯大王更擇賢將。

始皇之を聞きて大に怒り、自ら馳せて頻陽に如き、見て王翦に謝して曰く、寡人將軍の計を用ひざるを以て、李信果して秦の軍を辱かしむ。今聞く、荆兵日に進みて西すと。將軍病むと雖も、獨り寡人を弃るに忍びんやと。王翦謝して曰く、老臣罷病悖亂す。唯大王更に賢將を擇べと。始皇謝して曰く、已めよ、將軍復言ふ勿れと。王翦曰く、大王必ず已むを得ずして臣を用ひば六十萬人に非ざんば不可なり。始皇曰く、將軍の計を聽くことを爲さんのみと。是に於て王翦兵六十萬人に將たり。始皇自ら送りて灞上に至る。王翦行々美なる田宅園池を請ふこと甚だ衆し。始皇曰く、將軍行け。何ぞ貧しきを憂へんやと。王翦曰

始皇謝曰。已矣。將軍勿復言。王翦曰。大王必不得已。用臣。非六十萬人不可。始皇曰。爲聽將軍計耳。於是王翦將兵六十萬人。始皇自送至灞上。王翦行請美田宅園池甚衆。始皇曰。將軍行矣。何憂貧乎。王翦曰。爲大王將。有功終不得封侯。故及大王之嚮臣。臣亦及時以請園池。爲子孫業耳。始皇大笑。王翦既至關。使使還請善田者五輩。或曰。將軍之乞貸亦已甚矣。王翦曰。不然。夫秦王世而不信人。今空秦國甲士而專委於我。我不多請田宅。爲子孫業。以自堅。願令秦王坐而疑我邪。王翦果代李信擊荊。荊聞王翦益軍而來。乃悉國中兵以拒秦。

く、大王の將と爲り、功有るも終に封侯を得ず。故に大王の臣に嚮ふに及び、臣も亦時に及びて以て園池を請ひ、子孫の業と爲さんのみと。始皇大いに笑ふ。王翦既に關に至り、使をして還りて善田を請はしむる者五輩。或ひと曰く、將軍の乞貸すること亦已に甚だしと。王翦曰く、然らず、夫の秦王祖にして人を信ぜず。今秦國の甲士を空しうして専ら我に委ぬ。我多く田宅を請ひ、子孫の業を爲し、以て自ら堅くせずして願つて秦王をして坐して我を疑はしめんやと。王翦果して李信に代りて荊を撃つ。荊王翦軍を益して來ると聞き、乃ち國中の兵を悉くして以て秦を拒く。

● 賜は假なり ● 理に背き亂る、心取り亂れて爲すこと理に逆ふ ● 五人、使者を出すこと五度 ● 乞借、こひ借る ● 歸りて氣劇し

王翦至堅壁而守之。不肯戰。荊兵數出挑戰。終不出。王翦日休士。洗沐而善飲食。撫循之。親與士卒同食。久之。王翦使人問軍中戲乎。對曰。方投石超距。於是王翦曰。士卒可用矣。荊數挑戰而秦不出。乃引而東。翦因擊兵追之。令壯士擊大破荊軍。至蕲南。殺其將

王翦至り、壁を堅くして之を守り、戦を肯せず。荊の兵數々出でて戦を挑めども終に出でず。王翦日々士を休め、洗沐して善く飲食せしめて之を撫循し、親ら士卒と食を同じくす。之を久しうして王翦人をして軍中に問はしむ、戲るか。對へて曰く、方に投石超距すと。是に於て王翦曰く、士卒用ふ可しと。荊數々戦を挑めども秦出でず。乃ち引いて東す。翦因りて兵を擧げて之を追ひ、壯士をして撃たしむ。大に荊の軍を破り、蕲の南に至り、其の將軍項燕を殺す。荊の兵遂に敗走す。秦因りて勝に乗じ、荊地の城邑を略定す。歲餘にして荊王負芻を虜にす。竟に荊の地を平けて郡縣と爲す。因りて南百越の君を征す。而して王翦の子王賁李信と與に燕齊の地を破り定む。秦始皇の二十六年、盡く天下を并す。王氏蒙氏功多しと爲し、名後世に施く。秦の二世の時、王翦及び其子賁皆已に死せり。而して又蒙氏を滅せり。陳勝の秦に反するや、秦王翦の孫王離をして趙を撃たしむ。趙王及び張耳を鉅鹿城に圍む。或ひと曰く、王

軍項燕。荆兵遂敗走。秦因乘勝略定荆地城邑。歲餘虜荆王負芻。竟平荆地。爲郡縣。因南征百越之君。而王翦子王賁與李信破定燕齊地。秦始皇二十六年。

太史公曰。鄙

離は秦の名將なり。今彊秦の兵に將として新造の趙を攻む。之を擧げんこと必せりと。客曰く、然らず。夫れ將たること三世なる者は必ず敗る。必ず敗るは何ぞや。其の殺伐する所多きを以て其の後其の不祥を受くと。今王離已に三世の將たり。居ること何くもなくして、項羽趙を救ひて秦軍を撃ち、果して王離を虜にす。王離の軍遂に諸侯に降る。

● 離は趙に同じ ● 其の子孫 ● 離 ● 共に勝負を争ふ遊戯。投石は石を投ぐる事。

盡并天下。王氏蒙氏功爲多。名施於後世。秦二世之時。王翦及其子賁皆已死。而又滅蒙氏。陳勝之反秦。秦使王翦之孫王離擊趙。圍趙王及張耳鉅鹿城。或曰。王離秦之名將也。今將遺秦之兵。攻新造之趙。擊之必矣。客曰。不然。夫爲將三世者必敗。必敗者何也。以其所殺伐多矣。其後受其不祥。今王離已三世將矣。居無何項羽救趙擊秦軍。果虜王離。王離軍遂降諸侯。

太史公曰く、鄙語に云ふ。尺も短き所あり。寸も長き所ありと。白起敵を料

語云。尺有所短。寸有所長。白起料敵合變。出奇無窮。聲震天下。然不能救患於應侯。王翦爲秦將。夷六國。當是時。翦爲宿將。始皇師之。然不能補秦建德。固其根本。偷合取容。以至物身。及孫王離爲項羽所虜。不亦宜乎。彼各有短也。

り變に合ひ、奇を出すこと窮り無し。聲天下を震はす。然れども患を應侯に救ふ能はず。王翦秦の將と爲り、六國を夷ぐ。是の時に當り翦宿將たり。始皇之を師とす。然れども秦を輔け、徳を建てて其の根本を固くする能はず。偷合して容れられんことを取り、以て身を物するに至る。孫王離に及びて項羽に虜にせらるゝ、亦宜ならずや。彼各短き所有るなり。

● 楚辭卜居篇に出づ ● 老将 ● 苟合、道を顧みず、苟にして只管人主の氣に合はんとすること ● 段、段



卷七十四

孟子荀卿列傳第十四

太史公曰。余讀孟子書。至梁惠王問。何以利吾國。未嘗不廢書而歎也。曰。嗟乎。利誠亂之始也。夫子罕言利者。常防其原也。故曰。放於利而行。多怨。自天子至庶人。好利之弊。何以異哉。

太史公曰く、余孟子の書を讀みて、梁の惠王、何を以て吾が國を利せんとするかを問ふに至りて、未だ嘗て書を廢して歎ぜずんばあらざるなり。曰く、嗟乎、利は誠に亂の始めなり。夫子罕に利を言ふものは常に其の原を防ぐなり。故に曰く、利に放りて行へば、怨み多しと。天子より庶人に至るまで利を好むの弊、何を以てか異ならんや。

● 孔子利に關する事をいふこと少きは、亂の源を防ぐなり。弊は少なり ● 國亂の根源 ● 放は依なり

孟軻。鄒人也。受業于思之門人。道既通。

孟軻は鄒の人なり。業を子思の門人に受く。道既に通じ、齊の宣王に游事す。宣王用ふる能はず。梁に適く。梁の惠王言ふ所を果さず。則ち見て以て迂遠に

游事齊宣王。宣王不能用。適梁。梁惠王不果所言。則見以爲迂遠。而澗於事情。當是之時。秦用商君。富國彊兵。楚魏用吳起。戰勝弱敵。齊威王宣王用孫子田忌之徒。而諸侯東面朝齊。天下方務於合從連衡。以攻伐爲賢。而孟軻乃述唐虞三代之德。是以所如者不合。退而與萬章之徒序詩書。述仲尼之意。作孟子七篇。

して事情に闕なりとなす。是の時に當り、秦商君を用ひて國を富まし、兵を彊くす。楚魏吳起を用ひて戰勝ちて敵を弱む。齊の威王宣王孫子田忌の徒を用ひて諸侯東面して齊に朝す。天下方に合從連衡に務め、攻伐を以て賢と爲す。而るに孟軻乃ち唐虞三代の徳を述ぶ。是を以て如く所の者は合はず。退きて萬章の徒と詩書を序し、仲尼の意を述して孟子七篇を作る。

● 魯の地 ● 名は侯、孔子の孫。中庸を作る ● 齊の都大陵によりて魏の稱とす ● 迂はり遠きこと、適切ならざること ● 國は疎なり ● 傳述。古人の道を傳へての明かにすること

其後。有騶子之屬。齊有三騶子。其前騶忌。以鼓琴干威王。因及國。

其の後騶子の屬あり。齊に三騶子有り。其の前の騶忌は琴を鼓するを以て威王を干し、因つて國政に及び、封ぜられて成侯となりて、相印を受く。孟子に先だてり。其の次の騶衍は孟子に後れたり。騶衍、國を有つ者、益々淫侈にして徳を尙

政。封爲成侯。而受相印。先孟子。其次驪衍。後孟子。驪衍。皆淫侈。不能尚德。若大雅。整之於身。施及黎庶矣。乃深觀陰陽消息。而作怪迂之變。終始大聖之篇。十餘萬言。其語闕大不經。必先驗小物。推而大之。至於無垠。先序今以至上黃帝。學者所共術。大

ぶ能はざるを睹て、大雅の之を身に整へ、施して黎庶に及ぼす若くせんとなす。乃ち深く陰陽消息を觀て怪迂の變、終始大聖の篇十餘萬言を作る。其の語闕大不經。必ず先づ小物を驗し、推して之を大にして垠無きに至る。先づ今より以上黃帝に至るまでを序し、學者の共に術ふる所、大いに世の盛衰に並ぶ。因りて其の禮祥度制を載せ、推して之を遠くして天地未だ生ぜず、竊冥考へて原ぬ可からざるに至る。先づ中國の名山大川通谷禽獸、水土の殖する所、物類の珍とする所を列ね、因つて之を推して、海外人の睹る能はざる所に及ぼす。天地剖判以來五德轉移し、治各宜しき有りて符應茲の若きを稱引し、以て儒者の所謂中國なる者、天下に於て、乃ち八十一分にして、其の一分に居るのみとなす。中國名づけて赤縣神州と曰ふ。赤縣神州の内、自ら九州有り。禹の九州を序する是なり。州數となすを得ず。中國の外赤縣神州の如き者九あり。乃ち所謂九州なり。是に裨海有りて之を環る。人民禽獸能く相通する者莫し。一區中の如き

並世盛衰。因載其識詳度。制推而遠之。至天地未生。竊冥不可考而原也。先列中國名山大川通谷禽獸。水土所殖。物類所珍。因而推之。及海外人之所不能。請稱引天地。剖判以來。五德轉移。治各宜。而符應若茲。以爲儒者所謂中國者。於天下。乃八十一分居。

者は、乃ち一州爲り。此の如き者九あり。乃ち大瀛海ありて其の外を環る。天地之際なりと。其の術皆此の類なり。然れども、其の歸を要するに、必ず仁義節儉、君臣上下六親の施に止まる。始めや濫のみ。王公大人初め其の術を見て懼然として顧化す。其の後之を行ふ能はず。是を以て鬪子齊に重ぜらる。梁に適く。惠王郊迎し賓主の禮を執る。趙に適く。平原君側行して席を褫ふ。燕に如く。昭王慧を擁して先驅す。弟子の座に列して業を受けんと請ひ、碣石宮を築きて、身親ら往きて之を師とす。主運を作る。其の諸侯に遊びて尊禮せらるること此の如し。豈仲尼陳蔡に菜色し、孟軻齊梁に困しむと同じからんや。故に武王仁義を以て紂を伐ちて王たり。伯夷餓死て周の粟を食はず。衛の靈公陳を問ひて孔子答へず。梁の惠王謀りて趙を攻めんと欲し、孟軻太王邲を去るを稱す。此れ豈世俗に阿りて苟も合ふに意あるのみならんや。方納を持して圍擊に内れんと欲するも其れ能く入らんや。或ひと曰く、伊尹鼎を負うて湯を勉めて以

其一分二耳。中國名曰赤縣神州。赤縣神州內。自有九州。禹之序九州。是也。不得爲九州數。中國外如赤縣神州者九。乃所謂九州也。於是有裨海環之。人民禽獸莫能相通者。如一區中者。乃爲一州。如此者九。乃有大瀛海環其外。天地之際焉。其術皆此類也。然要其

て王たり。百里奚牛を車下に飼ふ。而して繆公用ひて霸たり。先づ合ふことを作して然る後之を大道に引く。騶衍其の言不軌なりと雖も、儒しくは亦牛鼎の意有るか。騶衍與び齊の稷下先生より、淳于髡・慎到・環淵・接子・田駢・騶奭の徒の如き、各々書を著して治亂の事を言ひ、以て世主を干す。豈道ふに勝ふべけんや。

- 用ひられんことを求む
- 淫逸奢侈
- 徳正しき君子
- 萬民
- 天地間の二氣の或は清派し或は生息する理
- 廣大にして境界なし。經は境界
- 限
- 世の祥瑞
- 渾沌たる中より天地が分る、こと
- 五行の徳。木火土金水の五徳移りかはる
- 感應
- 小海
- 際涯、はて、かぎり
- 階級する所
- 君臣上下六親に對して施し行ふべき事
- 始めは汎濫にして編羅なき詞を以て人の耳を驚かすのみ
- 顧みて歸往す。衍の術皆人心を動かし、見る者靡然として想を駐め、内心照顯して己も之に化して其術に従はん
- 敢て正坐せず。賓主の禮に當る
- 側行して衣にて席を拂ふ、敬をなすなり。徹は拂ふ
- 帶は帶なり。之が爲めに地を掃ふなり。衣袂を以て帶を拂して却行し履塊の長者に及ばんことを恐る、は敬となす所以なり
- 都子の言の名
- 菜の如き顔色。人の飢え苦しめるさま
- 陣
- 四角なる棧を丸き穴に入れんとするも相合はず
- 伊尹鼎を貢ひ行き股湯王勤め之を勉めしめて王たらしめたり
- 飼
- 軌轡を離れ法外なること
- 伊尹が鼎を貢ひ百里奚が牛を飼ひて各その君に策を進めしと同じ意に出づるか

歸。必止乎仁義節儉。君臣上下。六親之施。始也。蓋耳。王公大人初見其術。懼然顧化。其後不能行之。是以騶子重於齊。適梁。惠王郊迎。執賓主之禮。適趙。平原君側行。撤席。如燕。昭王擁彗先驅。請列弟子之座。而受業。築碣石宮。身親往師之。作主運。其游諸侯。見尊禮如王。豈與仲尼菜色陳蔡。困於齊梁。同乎哉。故武王以仁義伐紂。而王。伯夷餓不食。周粟。衛靈公問陳。而孔子不答。梁惠王謀欲攻趙。孟軻稱太王去邠。此豈有意阿二世俗。苟合上而已哉。持方柄。欲內圓鑿。其能入乎。或曰。伊尹負鼎。而勉湯以王。百里奚舂牛車下。而繆公用霸。作先合。然後引之。大道騶衍其言。雖不軌。儒亦有牛鼎之意乎。自騶衍與齊之稷下先生。如淳于髡。慎到。環淵。接子。田駢。騶奭之徒。各著書言治亂之事。以干世主。豈可勝道哉。

淳于髡。齊人也。博聞彊記。學無所主。其諫說慕晏嬰之爲人也。然而承意觀色。爲務。客有見髡於梁。惠王獨坐而再見。

淳于髡は齊の人なり。博聞彊記。學主とする所無し。其の諫說晏嬰の人と爲りを慕ふ。然り而して意を承け色を觀るを務めと爲す。客髡を梁の惠王に見えしむるあり。惠王左右を屏け、獨坐して再び之を見る。終に言ふこと無し。惠王之を怪しみ、以て客を讓めて、曰く、子の淳于先生を稱する、管嬰も及ばずと。寡人に見ゆるに及びて、寡人未だ得るあらざるなり。豈寡人言を爲すに足らざるか。何の故ぞやと。客以て髡に謂ふ。髡曰く、固よりなり。吾れ前に王に見ゆるに、王

之終無言也。惠王怪之。以讓客曰。子之稱淳于先生。管嬰不及。及見寡人。寡人未得也。豈寡人不足爲言邪。何故哉。客以謂髡。髡曰。固也。吾前見王。王志在驅逐。後復見王。王志在音聲。吾是以默然。客具以報王。王大駭曰。嗟乎。淳于先生誠聖人也。前淳于先生來。人有獻謳者。未及試。亦會先生來。寡人雖屏人。然私心在彼。有之。後淳于髡見。壹語連三日。三

の志驅逐に在り。後復た王に見ゆるに王の志音聲に在り。吾是を以て默然たりと。客具に以て王に報ず。王大いに駭きて曰く、嗟乎淳于先生は誠に聖人なり。前に淳于先生の來りしとき、人善馬を獻する者有り。寡人未だ視るに及ばずして先生の至るに會ふ。後に先生の來りしとき、人の謳者を獻するあり。未だ試みるに及ばずして、亦先生の來るに會ふ。寡人人を屏くと雖も、然も私心彼に在り、之れ有り。後淳于髡見ゆ。壹たび語りて、三日三夜を連ねて倦むこと無し。惠王卿相の位を以て之を待たんと欲す。髡因つて謝し去る。是に於て送るに安車駕馭・束帛・加璧・黃金百鎰を以てす。終身仕へず。

- 其の君を諷め、その君に説くこと
- 己が諷説せんとする君主の意を迎合へ、君主の顔色を見て事をいふ
- 馬に乗りて驅逐せんと欲する意あり
- 歌を謳ふ人
- 我實に此事ありとの意
- 腰を掛けて乗る四頭立の馬車
- 帛の束ね巻きたるもの

夜無倦。惠王欲下以卿相位待之。髡因謝去。於是送以安車駕馭。束帛加璧。黃金百鎰。終身不仕。

慎到は趙の人、田駢・接子は齊の人、環淵は楚の人なり、皆黃老道德の術を學ぶ。因りて發明して其の指意を序す。故に慎到十二論を著し、環淵上下篇を著し、而して田駢接子皆論する所あり。

- 未だ通ぜざる所を發き、未だ明かならざる所を明にすること

慎到著十二論。環淵著上下篇。而田駢接子皆有所論焉。驕爽者。齊諸驕子。亦頗采。驕術之術。以紀文。於是齊王嘉之。自如淳于髡以下。皆命曰列大夫。爲開第康莊之衢。高門大屋。尊龍之。覽天下諸侯賓客。言齊能致天下賢士也。

驕爽は齊の諸驕子なり。亦頗る驕術の術を采り以て文を紀す。是に於て齊王の之を嘉みす。淳于髡の如きより以下皆命じて列大夫と曰ひ、爲めに第を康莊の衢に開き、門を高くし、屋を大にして之を尊寵す。天下の諸侯の賓客に覽せて、齊能く天下の賢士を致すと云ふ。

- 文を記す、文を作る
- 五運六運の大路

荀卿趙人。年五十始來游學於齊。騶衍之術迂大而閑辯。爽也文具難施。淳于髡久與處。時有得善言。故齊人頌曰。談天行。騶龍爽。多轂過。髡田駢之屬皆已死。齊襄王時而荀卿最為老師。齊尙修列大夫之缺。而荀卿三爲祭酒焉。齊人或譏荀卿。荀卿乃適楚。而

荀卿は趙の人なり。年五十にして始めて來りて齊に游學す。騶衍の術迂大にして閑辯、爽や文具はりて施し難し。淳于髡久しく與に處る。時に善言を得る有り。故に齊人頌して、曰く、天を談ずるは行、龍を騶るは爽、轂過を炙るは髡と。田駢の屬皆已に死す。齊の襄王の時にして荀卿最も老師爲り。齊尙ほ列大夫の缺を修む。而して荀卿三たび祭酒と爲る。齊の人或るもの荀卿を譏す。荀卿乃ち楚に適く。而して春申君以て蘭陵の令と爲す。春申君死して荀卿廢せらる。囚りて蘭陵に家す。李斯嘗て弟子と爲り、已にして秦に相たり。荀卿濁世の政、亡國亂君相屬し、大道を遂けずして巫祝を營み、禮祥を信じ、鄙儒の小拘、莊周等の如き、又滑稽俗を亂るを嫉む。是に於て儒墨道德の行事興壞を推し、序列して數萬言を著して卒す。囚りて蘭陵に葬る。

● 文章修飾具備あれども之を實地に施し難し ● 騶衍の論ずる所、五行の徳天地の廣大に亘る ● 騶龍騶初の論を修飾して徒に龍の模様を雕刻するが如し ● 淳于髡の多智言論盡きざること。轂過は轂輦なり。車の油を入る、器物。轂過を炙るに油盡くと雖も尚は餘流盡きざるが如し ● 古へ多人相會して宴する時其の中の尊長なる

春申君以爲蘭陵令。春申君死。而荀卿廢。因家蘭陵。李斯嘗爲弟子。已而相秦。荀卿嫉濁世之政。亡國亂君相屬。不遂大道。而營於巫祝。信讖祥。鄙儒小拘。如莊周等。又滑稽亂俗。於是推儒墨道德之行事興壞。序列著數萬言。而卒。因葬蘭陵。

● 春申君酒を以て地を祭る。轉じて學政を司る者の稱 ● 小節に拘はること ● 興廢、興替

而して趙に亦公孫龍有り、堅白同異の辯を爲す。劇子の言あり、魏に李悝あり。地力を盡くすの教なり。楚に尸子長盧あり。阿の吁子あり。孟子の如きより吁子に至るまで世多く其の書あり。故に其の傳を論ぜずと云ふ。蓋し墨翟は宋の大夫、善く守禦して用を節することを爲す。或は曰く、孔子の時に並ぶと。或は曰く、其の後にありと。

● 堅く白き石の堅と白とを分別し、同者をして異ならしめ、異者をして同ならしむる一種の流弊

書。故不論其傳云。蓋墨翟宋之大夫。善守禦爲節用。或曰。並孔子時。或曰。在其後。

卷七十五

孟嘗君列傳第十五

孟嘗君。名文。姓田氏。文之父曰靖。郭君田嬰。田嬰者。齊威王少子。而齊宣王庶弟也。田嬰自威王時。任職用事。與成侯。鄒忌及田忌。將而救韓。伐魏。成侯與田忌爭寵。成侯懼。嬰齊之邊

孟嘗君。名は文。姓は田氏。文の父を靖。郭君田嬰と曰ふ。田嬰は齊の威王の少子にして齊の宣王の庶弟なり。田嬰威王の時より職に任じ、事を用ふ。成侯鄒忌及び田忌と與に、將として韓を救ひて魏を伐つ。成侯と田忌と寵を争ふ。成侯田忌を賣る。田忌懼れて、齊の邊邑を襲ひ、勝たずして亡走す。會々威王卒し、宣王立つ。成侯の田忌を賣りしを知り、乃ち復た田忌を召し、以て將と爲す。宣王の二年田忌、孫臏・田嬰と俱に魏を伐ちて之を馬陵に敗り、魏の太子申を虜にし、魏の將龐涓を殺す。宣王の七年田嬰、韓・魏に使す。韓魏齊に服す。嬰韓の昭侯魏の惠王と齊の宣王に東阿の南に會し盟ひて去る。明年復た梁の惠王と甄に會す。是の歲梁の惠王卒す。宣王の九年田嬰齊に相たり。齊の宣王

邑。不勝亡走。會威王卒。宣王立。知成侯。賣田忌。乃復召田忌。以爲將。宣王二年。田忌與孫臏。田嬰俱伐魏。敗之馬陵。虜魏太子申。而殺魏將龐涓。宣王七年。田嬰使於韓。魏。韓魏服於齊。嬰與韓昭侯。魏惠王會齊宣王東阿南。盟而去。明年。復與梁惠王會甄。是歲。梁惠王卒。宣王九年。田嬰相齊。齊宣王與魏襄王會徐州。而相王也。楚威王聞之。怒田嬰。明年。楚伐敗齊師於徐州。而使入逐田嬰。田嬰使張丑說楚威王。威王乃止。田嬰相齊十一年。宣王卒。潘王即位。即而三年。而封田嬰於薛。初。田嬰有子四十餘人。其賤妾有子名文。文以五月五日生。嬰告其母曰。勿舉也。其母竊舉生之。及長。其母因兄弟。而見其子文於田嬰。

魏の襄王と徐州に會して相王たり。楚の威王之を聞きて田嬰を怒る。明年楚伐ちて齊の師を徐州に敗り、人をして田嬰を逐はしむ。田嬰張丑をして楚の威王に説かしむ。威王乃ち止む。田嬰齊に相たること十一年、宣王卒し、潘王位に即く。位に即きて三年にして田嬰を薛に封す。初め田嬰子四十餘人有り。其の賤妾子あり、文と名づく。文五月五日を以て生る。嬰其の母に告げて曰く、舉ぐる勿れと。其の母竊かに舉げて之を生ず。長するに及びて、其の母兄弟に因つて其の子文を田嬰に見えしむ。

- 妾腹に生れたる弟 ● 欺く ● 國境の郡邑 ● 相互に王號を稱したり ● 取りあげて之を育つ ● 養ひて之を長ぜしむ、生育す

田嬰怒其母曰。吾令若去此子。而敢生之。何也。文頓首。因曰。君所以不舉五月子者何故。嬰曰。五月子者長與戶齊。將不利其父母。文曰。人生受命於天乎。將受命於戶邪。嬰默然。文曰。必受命於天。君何憂焉。必受命於戶。則高其戶耳。誰能至者。嬰曰。子休矣。久之。

田嬰其の母を怒りて曰く、吾若をして此の子を去らしむ。而るに敢へて之を生ずるは何ぞやと。文頓首し、因りて曰く、君五月の子を舉げざる所以のものは何の故ぞと。嬰曰く、五月の子は長戸と齊しければ、將に其の父母に利ならざらんとす。文曰く、人生れて命を天に受くるか、將た命を戸に受くるかと。嬰默然たり。文曰く、必ず命を天に受けば君何ぞ憂へん。必命を戸に受けば、則ち其の戸を高くせんのみ。誰れか能く至る者ぞと。嬰曰く、子休せよと。之を久しうして、文間を承けて其の父嬰に問ひて曰く、子の子を何と爲すと。曰く、孫と爲すと。孫の孫を何と爲すと。曰く、玄孫と爲すと。玄孫の孫を何となすと。曰く、知る能はざるなりと。文曰く、君事を用ひて齊に相たること今に至りて三王なり。齊廣きを加へずして、君の私家富萬金を累ぬるに、門下に一賢者を見ず。文聞く、將の門には必ず將あり。相の門には必ず相ありと。今君の後宮綺穀を踏めども、士短褐を得ず。僕妾梁肉を餘せども、士糟糠にだに厭かず。今君又尚ほ積

文承問問其父嬰曰。子之孫。孫之孫爲何。曰。爲玄孫。何。曰。爲玄孫。玄孫之孫爲何。曰。不能知也。文曰。君用事相齊。至今三王矣。齊不加廣。而君私家富累萬金。門下不見一賢者。文問將門必有將。相門必有相。今君後宮蹈綺穀。而士不得短褐。僕妾餘梁肉。而士不厭糟糠。今君又尚厚積餘藏。欲以遺所不知何人。而忘公家之事。日損文竊怪之。於是嬰乃禮文使主家待賓客。賓客日進。名聲聞於諸侯。諸侯皆使人請薛公田嬰。以文爲太子。嬰許之。嬰卒。諡爲靖郭君。而文果代立於薛。是爲孟嘗君。

を厚くし、藏を餘し、以て知らざる所の何人に遺らんと欲するか。而して公家の事日々損するを忘る。文竊かに之を怪しむと。是に於て嬰乃ち文を禮し、家を主り。賓客を待たしむ。賓客日々進み、名聲諸侯に聞ゆ。諸侯皆人をして薛公田嬰に請ひ、文を以て太子と爲さしむ。嬰之を許す。嬰卒す。諡して靖郭君と爲す。而して文果して代りて薛に立つ。是を孟嘗君と爲す。

- 俗説に五月五日に生れたる子は男は父を害し女は母を害すと
- 父のひまを見はからひて
- あやぎぬとろすぎぬ
- 粗毛の毛衣の短きもの。賤者の服
- よき米と肉。美食
- 何人に遺らんと欲するかを知らず

孟嘗君在薛。招致諸侯賓客。及亡人有

孟嘗君薛に在り、諸侯の賓客を招致す。及び亡人の罪ある者皆孟嘗君に歸す。孟嘗君業を捨てて厚く之を遇す。故を以て天下の士を傾く。食客數千人。貴賤と

罪者皆歸孟嘗君。孟嘗君舍業厚遇之。以故傾天下之士。食客數千人。無貴賤一與文等。孟嘗君待客坐語。而屏風後常有侍史。主記君所與客語。問親戚居處。客去。孟嘗君已使使存問。獻遺其親戚。孟嘗君嘗待客夜食。有二人。蔽火光。客怒。以飯不潔。輒食辭去。

無く一に文と等しくす。孟嘗君客を待ち、坐して語る。而して屏風の後に常に侍史あり。君の客と語る所、親戚居處を問ふを記することを主る。客去る。孟嘗君已に使をして存問し、其の親戚に獻遺せしむ。孟嘗君曾て客を待し、夜食す。一人有り。火光に蔽はる。客怒り、飯等しからずと以ひ、食を輒めて辭し去る。孟嘗君起ちて自ら其の飯を持ちて之を比す。客慙ちて自剄す。士此を以て多く孟嘗君に歸す。孟嘗君客擇ぶ所なくして皆善く之を遇す。人人各々自ら以て孟嘗君己を親しむとおもふ。秦の昭王其の賢を聞き、乃ち先づ涇陽君をして齊に質とならしめ、以て孟嘗君を見んことを求む。孟嘗君將に秦に入らんとす。賓客其の行くことを欲する莫し。諫むれども聽かず。蘇代謂ひて曰く、今且代外より來る。木偶人と土偶人と相與に語るを見る。木偶人曰く、天雨ふらば、子將に敗れんとすと。土偶人曰く、我土より生る。敗るれば則ち土に歸す。今天雨ふらば子を流して行き、未だ止息する所を知らざらんと。今秦は虎狼の國なり。而

して君往かんと欲す。如し還るを得ざるあらば、君土偶人に笑はるゝなきを得んやと。孟嘗君乃ち止む。

● 罪あり他國に逃亡して身を隠せる人 ● 其の家の產業を捨てて厚く賓客を遇するなり ● なじまめ訪ふ、  
 慰問 ● 自ら首刎ぬ、自殺す ● 木彫りの人形。木人 ● 土にて造りたる人形。

孟嘗君起自持其飯比之。客慙自剄。士以此多歸孟嘗君。孟嘗君客。無所擇。皆善遇之。人人各自以爲孟嘗君親己。秦昭王聞其賢。乃先使涇陽君爲質於齊。以求見孟嘗君。孟嘗君將入秦。賓客莫欲其行。諫不聽。蘇代謂曰。今且代從外來。見木偶人與土偶人相與語。木偶人曰。天雨。子將敗矣。土偶人曰。我生於土。敗則歸土。今天雨流子而行。未知所止。息也。今秦虎狼之國也。而君欲往。如有不得還。君得無爲土偶人所笑乎。孟嘗君乃止。

齊湣王二十五年。復卒。使孟嘗君入秦。昭王即以孟嘗君爲秦相。人或說秦昭王曰。孟嘗君賢。而又齊族

齊の湣王の二十五年復卒に孟嘗君をして秦に入らしむ。昭王即ち孟嘗君を以て秦の相と爲す。人或は秦の昭王に説きて曰く、孟嘗君賢にして又齊の族なり。今秦に相たらば必ず齊を先にして秦を後にせん。秦其れ危からんと。是に於て秦の昭王乃ち止む。孟嘗君を囚へ、謀りて之を殺さんと欲す。孟嘗君人をして昭王の幸姫に抵りて解かんことを求めしむ。幸姫曰く、妾願はくは君の狐白裘を得ん



也。今相秦。必先齊而後秦。秦其危矣。於此。孟嘗君乃謀欲殺之。孟嘗君使人抵昭王幸姬。幸姬曰。妾願得君狐白裘。此時孟嘗君有一狐白裘。直千金。天下無雙。入秦獻之昭王。更無他裘。孟嘗君患之。徧問客。莫能對。最下坐有能爲狗盜者。曰。臣

と。此の時孟嘗君一狐白裘有り、直ひ千金、天下無雙なり。秦に入りて之を昭王に獻じて更に他の裘なし。孟嘗君之を患へ、徧く客に問へども能く對ふるもの莫し。最下の坐に能く狗盜を爲す者有り。曰く、臣能く狐白裘を得んと。乃ち夜狗と爲り、以て秦宮の藏中に入り、獻せし所の狐白裘を取りて至る。以て秦王の幸姬に獻す。幸姬爲めに昭王に言ふ。昭王孟嘗君を釋す。孟嘗君出づるを得、即ち馳せ去る。封傳を更め、名姓を變じ以て關を出づ。夜半函谷關に至る。秦の昭王孟嘗君を出ししを後悔し、之を求むるに已に去れり。即ち人をして傳を馳せて之を逐はしむ。孟嘗君關に至る。關の法に雞鳴いて客を出す。孟嘗君追ふもの至らんことを恐る。客の下坐に居る者、能く雞鳴を爲すあり。而して雞盡く鳴く。遂に傳を發して出づ。出でて食頃如りにして秦の追ふもの果して關に至る。已に孟嘗君の出づるに後る。乃ち還る。

● 氣に入りた女。寵愛 ● 抵は至也 ● 狐腋の白毛を以て造れる裘、美にして得難きものなり ● 狗のま

ねをして忍びこむ監人。小妾、寵愛 ● 脚勢の類なり。姓を記したる關所の通行手形 ● 更は改なり ● 宿つぎの車馬 ● 函谷關 ● 食事をすする程の時間

能得狐白裘。乃夜爲狗。以入秦宮藏中。取所獻狐白裘。封傳變名姓。以出關。夜半至函谷關。秦昭王後悔。出孟嘗君。求之已去。即使人馳傳逐之。孟嘗君至關。關法雞鳴而出客。孟嘗君恐。追至客之居。下坐者有能爲雞鳴。而雞盡鳴。遂發傳出。出如食頃。秦追果至關。已後孟嘗君出。乃還。

始孟嘗君列此二人於賓客。賓客盡羞之。及孟嘗君有秦難。卒此二人拔之。自是之後客皆服。孟嘗君過趙。趙平原君客之。趙人聞孟嘗君賢。出觀之。皆笑曰。

始め孟嘗君此の二人を賓客に列せしとき、賓客盡く之を羞づ。孟嘗君秦の難あるに及び、卒に此の二人之を抜く。是より後客皆服す。孟嘗君趙を過ぐ。趙の平原君之を客とす。趙人孟嘗君の賢なるを聞き、出でて之を觀る。皆笑ひて曰く、始め薛公を以て魁然たりとおもへり。今之を視るに、乃ち眇たる小丈夫のみと。孟嘗君之を聞きて怒る。客の與に俱にする者と下りて斫撃して數百人を殺し、遂に一縣を滅し以て去る。齊の潛王自得せず。其の孟嘗君を遣りしを以てなり。孟嘗君至れば則ち以て齊の相となして政に任ず。孟嘗君秦を怨み、將に齊が韓

始以薛公爲之。然也。今視之乃眇小丈夫耳。孟嘗君聞之怒。客與俱者。下斫擊殺。數百人。遂滅一縣以去。齊湣王不自得。以其遣孟嘗君。孟嘗君至。則以爲齊相。任以政。孟嘗君怨秦。將以下齊爲韓魏攻秦。因與韓魏攻秦。而借兵食於西周。蘇代爲西周謂曰。君以齊爲

魏の爲めに楚を攻むるを以て因りて韓魏と與に秦を攻めて兵食を西周に借らんとす。蘇代西周の爲めに謂ひて曰く、君齊を以て韓魏の爲めに楚を攻め、九年宛葉以北を取り以て韓魏を強うす。今復秦を攻め以て之を益さば、韓魏南に楚の憂なく、西に秦の患なからん。則ち齊危し。韓魏必ず齊を輕んじて秦を畏れん。臣君の爲めに之を危ぶむ。君弊邑をして深く秦に合せしめ、而して君攻むることなく、又兵食を借ること無きに如かず。君函谷に臨みて攻むることなく、弊邑をして君の情を以て秦の昭王に謂はしめて曰はん、薛公必ず秦を破り、以て韓魏を強くせざらん。其の秦を攻むるや、王之楚王をして東國を割き、以て齊に與へしめ、而して秦が楚の懷王を出し和をなさんと欲すと。君弊邑をして此を以て秦に恵ましめば、秦破るゝなくして、而して東國を以て自ら免るゝを得ん。秦必ず之を欲し、楚王出づるを得て必ず齊を徳とせん。齊東國を得て益々強くして薛世世患なけん。秦大に弱からずして三晉の西に處らば、三晉必ず齊を重んぜ

んと。薛公曰く、善しと。因りて韓魏をして秦に賀せしめ、三國をして攻むること無からしめて、兵食を西周に借らす。是の時楚の懷王秦に入る。秦之を留む。故に必ず之を出さんと欲す。秦果して楚の懷王を出さず。

● 大きくすぐれたるさま、偉大なるさま ● 小さなこと、微小 ● 斬り倒す ● 得一に徳に作る。湣王孟嘗君を兼に遣はししは自ら己れの徳なき故なりと言ひしなり ● 宛は鄧州にあり、葉は許州にあり、二縣もと楚に屬せしを以て韓魏に併す

韓魏攻楚。九年。取宛葉。以北。以強韓魏。今復攻秦。以益之。韓魏南無楚憂。西無秦患。則齊危矣。韓魏必輕齊。長秦。臣爲君危之。君不如下令弊邑。深合於秦。而君無攻。又無借兵食。君臨函谷。而無攻。令弊邑以君之情。謂秦昭王曰。薛公必不破秦。以強韓魏。其攻秦也。欲王之令楚王割東國。以與齊。而秦出楚懷王。以爲和。君令弊邑。以此惠秦。秦得無破。而以東國自免也。秦必欲之。楚王得之。必德齊。齊得東國。益強。而薛世世無患矣。秦不強大。而處三晉之西。三晉必重齊。薛公曰。善。因令韓魏賀秦。使三國無攻。而不借兵食於西周矣。是時楚懷王入秦。秦留之。故欲必出之。秦不果出楚懷王。

孟嘗君相齊。其舍人魏子爲孟嘗君收

孟嘗君齊に相たり。其の舍人魏子孟嘗君の爲めに邑入を收む。三反にして一入をも致さず。孟嘗君之に問ふ。對へて曰く、賢者あり、竊かに假して之に與へた

邑入。三反而  
不致。一入。孟  
嘗君問之。對  
曰。有賢者。竊  
假與之。以故  
不致。入。孟嘗  
君怒。而退魏  
子。居數年。人  
或毀孟嘗君  
於齊。孟嘗君  
曰。孟嘗君將  
為亂。及田甲劫  
孟嘗君。孟嘗  
君乃奔魏。魏  
子所與粟。賢  
者聞之。乃上  
書言孟嘗君  
不作為亂。請  
以身為盟。遂  
自

り。故を以て入を致さずと。孟嘗君怒りて魏子を退く。居ること數年、人或は孟嘗君を齊の潛王に毀りて曰く、孟嘗君將に亂を爲さんとすと。田甲潛王を劫かすに及び、潛王意孟嘗君を疑ふ。孟嘗君乃ち奔る。魏子が粟を與へし所の賢者之を聞き、乃ち上書して言ふ、孟嘗君亂を作さず、請ふ身を以て盟を爲さんと。遂に宮門に自剄し以て孟嘗君を明かにす。潛王乃ち驚きて蹤跡驗問するに孟嘗君果して反謀なし。乃ち復た孟嘗君を召す。孟嘗君因りて病を謝し、歸りて薛に老せんとす。潛王之を許す。其の後秦の亡將呂禮齊に相たり。蘇代を困しめんと欲す。代乃ち孟嘗君に謂ひて曰く、周最齊に於て至厚なり。而して齊王之を逐ひて親弗に聽きて、呂禮を相とするは秦を取らんと欲すればなり。齊秦合はば則ち親弗と呂禮と重からん。齊に用ひらるゝあらば、秦必ず君を輕んぜん。君急に兵を北にして趙に趨き、以て秦魏を和し、周最を收めて以て行を厚くし、且つ齊王之信を反し、又天下の變を禁するに如かず。齊秦なくんば、天下齊に集ら

ん。親弗必ず走らん。則ち齊王孰れと與にか其の國を爲めんと。

- 一家中の職務を掌る人
- 領邑の租税を收め入るゝをいふ
- 貧る、毀廢す
- 査問
- 病と稱してことわる
- 世事を避けて隱居す
- 滅亡したる將軍
- 周の公子
- 其取扱ひを手厚くし
- 齊王が周最を逐ひて天下の信を失ひしを、周最を收めて齊の信を取り返へす
- 秦齊合併せば天下の形勢一變せんとす、之を考へて秦魏を和してその變を遏むべし

到宮門。以明  
孟嘗君。潛王  
乃驚。而蹤跡  
驗問。孟嘗君  
果無反謀。乃  
復召孟嘗君。  
孟嘗君因謝  
病。歸老於薛。  
潛王許之。其  
後秦亡將呂  
禮相齊。欲因  
蘇代。代乃謂  
孟嘗君曰。周  
最於齊。至  
厚也。而齊王  
逐之。而聽親  
弗。弗相。呂禮  
二者。欲取秦  
也。齊秦合。則  
親弗與呂禮。重  
矣。有用齊。秦  
必輕君。君不  
如下急。北兵  
趨趙。以和秦  
魏。收周最。以  
厚行。且反齊  
王之信。又禁  
天下之變。齊  
無秦。則天下  
集齊。親弗必  
走。則齊王孰  
與爲其國一也。

於其計。而呂  
禮嫉害於孟  
嘗君。孟嘗君  
懼。乃遣秦相  
穰侯魏冉書  
曰。吾聞秦欲  
以呂禮收齊。

是に於て孟嘗君其の計に従ふ。而して呂禮孟嘗君を嫉害す。孟嘗君懼れ、乃ち秦の相穰侯魏冉に書を遣りて曰く、吾聞く、秦、呂禮を以て齊を收めんと欲すと。齊は天下の強國なり。子必ず輕んぜられん。齊秦相取りて以て三晉に臨まば、呂禮必ず并せ相たらん。是れ子齊に通じ、以て呂禮を重んずるなり。若し齊天下の兵を免れば、其の子を歸とすること必ず深からん。子秦王に勸めて齊を

齊天下之疆國也。子必輕矣。齊秦相取。以臨三晉。呂禮必并相矣。是子通齊。以重呂禮也。若齊免於天下之兵。其疆子必深矣。子不如此。勸秦王伐齊。齊破。吾請以所得封子。齊破。秦必重之。疆。秦必重子。以取晉。晉國弊於齊。而長秦。秦必重子。以取秦。是子破齊。以爲

伐たしむるに如かず。齊破れば、吾請ふ得る所を以て子を封ぜん。齊破れば、秦は晉の疆きを畏れ、秦必ず子を重んじ、以て晉を取らん。晉國齊に弊られて秦を畏れば、晉必ず子を重んじ、以て秦を取らん。是れ子齊を破り、以て功となし、晉を挟み以て重きをなさん。是れ子齊を破りて封を定め、秦晉交々子を重んぜん。若し齊破れずんば、呂禮復た用ひられ、子必ず大に窮せんと。是に於て穰侯秦の昭王に言ひて齊を伐つ。呂禮じぐ。後齊の湣王宋を滅して益驕り、孟嘗君を去らんと欲す。孟嘗君恐れて乃ち魏に如く。魏の昭王以て相となす。西秦趙に合し、燕と共に伐ちて齊を破る。齊の湣王亡けて莒に在り、遂に死す。齊の襄王立つ。而して孟嘗君中立して諸侯となり、屬する所なし。齊の襄王新に立ち、孟嘗君を畏れて、與に連和して復た薛公に親しむ。文卒す。諡して孟嘗君となす。諸子立たんことを争ふ。而して齊魏共に薛を滅す。孟嘗君絶えて後無きなり。

● 組合ひて ● 齊にも魏にも屬せず、中立す

功。挟晉以爲重。是子破齊定封。秦晉交重子。若齊不破。呂禮復用。子必大窮。於此穰侯言於秦昭王。伐齊。而呂禮亡。後齊湣王滅宋。益驕。欲去孟嘗君。孟嘗君恐。乃如魏。魏昭王以爲相。四合於秦趙。與燕共伐破齊。湣王亡在莒。遂死焉。齊襄王立。而孟嘗君中立爲諸侯。無所屬。齊襄王新立。畏孟嘗君。與連和。復親薛公。文卒。諡爲孟嘗君。諸子争立。而齊魏共滅薛。孟嘗君絶嗣無後也。

初馮驩聞孟嘗君好客。驩而見之。孟嘗君曰。先生遠辱。何以教文也。馮驩曰。聞君好士。以貧身歸於君。孟嘗君置傳舍。十日。孟嘗君問傳舍長。曰。客何所爲。答曰。馮先生

初め馮驩、孟嘗君客を好むと聞き、驩を蹴みて之に見ゆ。孟嘗君曰く、先生遠く辱うす。何を以て文を教ふるやと。馮驩曰く、君士を好むと聞き、貧身を以て君に歸すと。孟嘗君傳舍に置く十日。孟嘗君傳舍の長に問ひて曰く、客何の爲す所ぞと。答へて曰く、馮先生甚だ貧し。猶一劍あるのみ。又脯糒なり。其の劍を彈じて調つて曰く、長、鋏歸らんか、食に魚なしと。孟嘗君之を幸舍に遷す。食に魚あり。五日にして又傳舍の長に問ふ。答へて曰く、客復た劍を彈じて歌ひて曰く、長、鋏歸らんか、出づるに輿なしと。孟嘗君之を代舍に遷す。出入輿車に乗る。五日にして孟嘗君復た傳舍の長に問ふ。舍長答へて曰く、先生又嘗

甚貧。猶有二一  
 劍耳。又剛縱。  
 彈其劍而謂  
 曰。長鉄歸來  
 乎。食無魚。孟  
 嘗君遷之幸  
 舍。食有魚矣。  
 五日又問傳  
 舍長。答曰。客  
 復彈劍而歌  
 曰。長鉄歸來  
 乎。出無與。孟  
 嘗君遷之代  
 舍。出入乘與  
 車矣。五日孟  
 嘗君復問傳  
 舍長。復無所  
 言。孟嘗君時  
 相齊。封萬戶  
 於薛。其食客  
 三千人。邑入  
 不不足以奉  
 客。使三人  
 出錢於薛。歲  
 餘不入。貸錢  
 者多。不能與  
 其息。客奉將  
 不給。孟嘗君  
 憂之。問左右  
 何人可使  
 收債於薛者。傳  
 舍長曰。代舍  
 客馮公。形容  
 狀貌甚辯。長  
 者無他技能。  
 宜可令收債。

で劍を弾じて歌ひて曰く、長鉄歸らんか、以て家を爲むるなしと。孟嘗君悦ばず。居ること朞年馮驩言ふ所無し。孟嘗君時に齊に相たり。萬戸に薛に封ぜらる。其の食客三千人、邑入以て客に奉ずるに足らず、人をして錢を薛に出さしむ。歳餘入れず。錢を貸るもの多く、其の息を與ふる能はず。客の奉將に給せざらんとす。孟嘗君之を憂へて左右に問ふ。何人か債を薛に收めしむべき者ぞと。傳舍の長曰く、代舍の客馮公、形容狀貌、甚だ辯あり、長者にして他の技能なし。宜しく債を收めしむべしと。

● 草履を踏みて來る、其の貧しきをいふ ● 代舍空舍傳舍は上中下三等の客をかく所の舍 ● 剛は茅の穎。  
 剛は劍を把る剛即刀剛。剛縱は茅を以て柄を懸したるもの ● 長き刀剛 ● 一年 ● 息は利子。息を與ふとは利子を拂ふをいふ

孟嘗君乃ち馮驩を進めて之に請ひて曰く、賓客、文が不肖なるを知らず、幸に文に臨むもの三千餘人、邑入以て賓客に奉ずるに足らず、故に息錢を薛に出さしむ。薛歳ごとに入れず、民頗る其の息を與へず。今客の食給せざらんことを恐る。願くは先生之を責めよと。馮驩曰く、諾と。辭して行く。薛に至り、孟嘗君の錢を取る者を召して皆會せしむ。息錢十萬を得たり。乃ち多く酒を釀し、肥牛を買ひ、諸々の錢を取る者を召す。能く息を與ふる者皆來れ、息を與ふる能はざる者も亦來れと。皆錢を取るの券書を持して之を合す。齊しく會日をなし、牛を殺し置酒す。酒酣にして、乃ち券書を持して前の如く之を合す。能く息を與ふる者は與に期をなし、貧しくして息を與ふる能はざる者は其の券を取りて之を燒きて曰く、孟嘗君の錢を貸す所以のものは、民の無き者の爲めに以て本業をなさしむるなり。息を求むる所以のものは、以て客に奉ずる無きが爲めなり。今富給なる者は以て期を要す。貧窮なる者は券書を燔き以て之を捐つ。諸君強ひて

孟嘗君乃進馮驩而請之曰。賓客不肖。文不肖。幸臨文者三千餘人。邑入不不足以奉客。故以息錢於薛。薛歲不入。民頗不與其息。今客食恐不給。願先生責之。馮驩曰。諾。辭行至薛。召取孟嘗君錢者皆會。得息錢十萬。乃多釀酒買肥牛。召諸取錢者。能與息者皆

孟嘗君乃ち馮驩を進めて之に請ひて曰く、賓客、文が不肖なるを知らず、幸に文に臨むもの三千餘人、邑入以て賓客に奉ずるに足らず、故に息錢を薛に出さしむ。薛歳ごとに入れず、民頗る其の息を與へず。今客の食給せざらんことを恐る。願くは先生之を責めよと。馮驩曰く、諾と。辭して行く。薛に至り、孟嘗君の錢を取る者を召して皆會せしむ。息錢十萬を得たり。乃ち多く酒を釀し、肥牛を買ひ、諸々の錢を取る者を召す。能く息を與ふる者皆來れ、息を與ふる能はざる者も亦來れと。皆錢を取るの券書を持して之を合す。齊しく會日をなし、牛を殺し置酒す。酒酣にして、乃ち券書を持して前の如く之を合す。能く息を與ふる者は與に期をなし、貧しくして息を與ふる能はざる者は其の券を取りて之を燒きて曰く、孟嘗君の錢を貸す所以のものは、民の無き者の爲めに以て本業をなさしむるなり。息を求むる所以のものは、以て客に奉ずる無きが爲めなり。今富給なる者は以て期を要す。貧窮なる者は券書を燔き以て之を捐つ。諸君強ひて

來。不能與息者亦來。皆持取錢之券書。合之。齊爲會。日殺牛置酒。酒酣乃持券如前合之。能與息者與爲期。貧不能與息者。取其券而燒之。曰。孟嘗君所以貸錢者。爲民之無者。以爲本業也。所以求息者。爲無以奉客也。今富給者以要期。貧窮者燒券。書以捐之。諸

飲食せよ。君あること此くの如し。君負くべけんやと。坐者皆起ちて再拜す。孟嘗君馮驩が券書を燒きしを聞き、怒りて使をして驢を召さしむ。驢至る。孟嘗君曰く、文の食客三千人あり。故に錢を薛に貸す。文の奉邑少くして、民尚ほ多くは時を以て其の息を與へず。客の食足らざらんことを恐る。故に先生に請ひて之を收責せしむ。聞く先生錢を得れば、即ち以て多く牛酒を具へ而して券書を燒くと。何にと。馮驢曰く、然り。多く牛酒を具へざれば、即ち早く會する能はず、以て其の有餘不足を知るなし。餘ある者は爲めに期を要す。足らざる者は守りて之を責むること十年なりと雖も、息愈々多からん。急にすれば、即ち以て逃亡し、自ら之を捐てん。若し急にして終に以て償ふ無くんば、上は則ち君利を好みて士民を愛せずとなし、下は則ち上に離れて負くに抵るの名あり。士民を厲まし、君聲を彰はす所以にあらざるなり。無用虚債の券を焚き、得可からざるの虚計を捐てて、薛の民をして君に親しみて君の善聲を彰さしむる

なり。君何の疑かあらんと。孟嘗君乃ち手を拊つて之を謝す。

● 金を借したる證書 ● 利子支拂の期日を定む ● 孟嘗君の賢仁の度あることかくの如し ● きびしく督促す ● 君の名聲、君のよき評判 ● 軽く打つ、たく

君強飲食。有君如此。豈可負哉。坐者皆起再拜。孟嘗君聞馮驢燒券書。怒而使召驢。驢至。孟嘗君曰。文食客三千人。故貸錢於薛。文奉邑少。而民尚多。不以時與其息。客食恐不足。故請先生收責之。聞先生得錢。即以多具牛酒。而燒券書。何。馮驢曰。然。不多具牛酒。即不能畢會。無以知其有餘不足。有餘者爲要期。不足者雖守而責之。十年息愈多。急即以逃亡。自捐之。若急終無以償。上則爲君好利。不愛士民。下則有難上抵負之名。非所以下厲士民。彰君聲也。焚無用虚債之券。捐不可得之虚計。令薛民親君。而彰君之善聲也。君有何疑焉。孟嘗君乃拊手而謝之。

齊王秦楚の毀に惑ひ、以て孟嘗君名其の主より高くして、齊國の權を擅にすと爲し、遂に孟嘗君を廢す。諸客孟嘗君の廢せられしを見て、皆去る。馮驢曰く、臣に車一乘以て秦に入るべきものを借せ、必ず君をして國に重んぜられしめ、奉邑をして益々廣からしめん、可ならんやと。孟嘗君乃ち車幣を約して之を遣る。馮驢乃ち西秦王に説きて曰く、天下の游士、軾に憑り、鞞を結びて西秦に入る者

齊王惑於秦楚之毀。以爲孟嘗君名高。其主而擅齊國之權。遂廢孟嘗君。諸客見孟嘗君廢。皆去。馮驢曰。

齊王秦楚の毀に惑ひ、以て孟嘗君名其の主より高くして、齊國の權を擅にすと爲し、遂に孟嘗君を廢す。諸客孟嘗君の廢せられしを見て、皆去る。馮驢曰く、臣に車一乘以て秦に入るべきものを借せ、必ず君をして國に重んぜられしめ、奉邑をして益々廣からしめん、可ならんやと。孟嘗君乃ち車幣を約して之を遣る。馮驢乃ち西秦王に説きて曰く、天下の游士、軾に憑り、鞞を結びて西秦に入る者

借臣車一乘。可令君重於國。而奉邑益廣。可乎。孟嘗君乃約車幣。而遣之。馮驩曰。天下之游士。憑軾結鞶。西入秦者。無不欲彊秦。而弱齊。憑軾結鞶。東入齊者。無不欲彊齊。而弱秦。此雄雌之關也。勢不兩立。爲雄雌者。得天下矣。秦王跽而

は、秦を彊くして齊を弱くせんと欲せざるなし。軾に馮り、鞶を結びて東齊に入る者は、齊を彊くして秦を弱くせんと欲せざるなし。此れ雄雌の國なり。勢兩立して雄とならず。雄たる者は天下を得んと。秦王跽いて之に問ひて曰く、何を以てか秦をして雌たるなくして可ならしむるか。馮驩曰く、王亦た齊の孟嘗君を廢するを知るかと。秦王曰く、之を聞けりと。馮驩曰く、齊をして天下に重からしむるものは孟嘗君なり。今齊王毀を以て之を廢す。其の心怨みて必ず齊に背かん。齊に背きて秦に入らば、則ち齊國の情、人事の誠、盡く之を秦に委せん。齊の地得可きなり。豈直に雄たるのみならんや。君急に使をして幣を載せて陰に孟嘗君を迎へしめよ。時を失ふべからざるなり。如し齊覺悟して復た孟嘗君を用ふる有らば、則ち雌雄の在る所、未だ知るべからざるなりと。秦王大に悦び、乃ち車十乘黄金百鎰を遣し、以て孟嘗君を迎ふ。

● 軾は車の前にある横木、車中にて敷置するとき手をつく所。軾に馮るは軾によりかゝる意にて、車に乗るをいふ。● 鞶は牛馬に車を引かすためにその胸の下に取りつけた革紐、引き綱。鞶を結ぶは車に乗るをいふ。

問之曰。何以使秦無爲雌而可。馮驩曰。王亦知齊之廢孟嘗君乎。秦王曰。聞之。馮驩曰。使齊重於天下者。孟嘗君也。今齊王以毀廢之。其心怨必背齊。背齊入秦。則齊國之情。人事之誠。盡委之秦。齊地可得也。豈直爲雄也。君急使使載幣。陰迎孟嘗君。不可失時也。如有齊覺悟。復用孟嘗君。則雌雄之所在。未可知也。秦王大悦。乃遣車十乘。黄金百鎰。以迎孟嘗君。

馮驩辭以先行。至齊說齊王曰。天下之游士憑軾結鞶。東入齊者。無不欲彊齊而弱秦者。憑軾結鞶。西入秦者。無不欲彊秦而弱齊者。夫秦齊雄雌之國。秦彊則齊弱矣。此

馮驩辭して以て先づ行き、齊に至りて齊王に説きて曰く、天下の游士、軾に憑り、鞶を結びて、東齊に入る者は、齊を彊くして秦を弱くせんことを欲せざる者なし。軾に憑り、鞶を結びて西秦に入る者は、秦を彊くして齊を弱くせんと欲せざる者なし。夫れ秦齊は雄雌の國なり。秦彊ければ齊弱し。此れ勢ひ兩ながら雄ならず。今臣竊に聞く、秦使を遣はして車十乘黄金百鎰を載せ、以て孟嘗君を迎へしむと。孟嘗君西せざれば則ち已む、西入りて秦に相たらば、則ち天下之に歸し、秦雄となりて齊雌とならん。雌たれば、則ち臨淄即墨は危し。王何ぞ秦の使の未だ到らざるに先だつて孟嘗君を復して之に邑を益し與へ、以て之に謝

勢不兩雄。今臣竊聞秦遣使車十乘載黃金百鎰以迎孟嘗君。孟嘗君不西則已。西入相秦則天下歸之。秦爲雄而齊爲雌。雌則臨淄卽墨危矣。王何不先秦使之未到復孟嘗君而益與之邑以謝之。孟嘗君必喜而受之。秦雖還國豈可下以請人相而迎之哉。折秦

せざる。孟嘗君必ず喜んで之を受けん。秦強國なりと雖も豈以て人の相を請ひて之を迎ふべけんや。秦の謀を折きて、其の霸強の略を絶たんと。齊王曰く、善しと。乃ち人をして境に至りて秦の使を候はしむ。秦の使の車適く齊の境に入る。使還り馳せて之を告ぐ。王孟嘗君を召して、其の相位を復し、其の故邑の地を與へ、又益すに千戸を以てす。秦の使者孟嘗君復た齊に相たりと聞き、車を還して去る。齊王孟嘗君を毀廢してより、諸客皆去る。後召して之を復す。馮驩之を迎ふ。未だ到らず。孟嘗君太息して歎じて曰く、文常に客を好み、客を遇するに敢て失する所なし。食客三千有餘人。先生の知る所なり。客文の一日廢せらるゝを見て、皆文に背きて去り、文を顧る者莫し。今先生に頼りて其の位に復するを得たり。客亦た何の面目ありて復た文を見んや。如し復た文を見ば、心す其の面に唾して大に之を辱しめんと。馮驩轡を結び、下りて拜す。孟嘗君車より下り、之に接して曰く、先生客の爲めに謝するかと。馮

之謀而絶其霸疆之略。齊王曰。善。乃使人至。境候秦使。秦使車適人。齊境。使還。馳告之。王召孟嘗君。而復其相位。而與其故邑之地。又益以千戸。秦之使者聞孟嘗君復相。去矣。自齊王毀廢孟嘗君。諸客皆去。後召而復之。馮驩迎之。未到。孟嘗君太息歎

驩曰く、客の爲めに謝するにあらざるなり。君の言の失の爲めなり。夫れ物必ず至るあり。事固より然るあり。君之を知るかと。孟嘗君曰く、愚謂ふ所を知らざるなりと。曰く、生者必ず死あるは、物の必ず至るなり。富貴なれば士多く、貧賤なれば友寡きは、事の固より然るなり。君獨り夫の朝に市に趨く者を見ずや。明旦肩を側て門を争ひて入る。日暮の後市朝を過る者、臂を掉ひて顧みず。朝を好みて、暮を惡むにあらず。期する所の物其の中に忘れればなり。今君位を失ひて賓客皆去る。以て士を怨むに足らず。而して徒に賓客の路を絶たん。願くは君客を遇するに故の如くせよと。孟嘗君再拜して曰く、敬んで命に従はん。先生の言を聞く、敢て教を奉ぜざらんやと。

● 遷くして朝を唱ふるの策略 ● 故の封邑 ● 毀廢して既す ● 馬の銜にとりつけたる轡、たづな ● 市。市の行列朝位の如きものあるを以て云ふと。又一説に市は朝に於て最も群集する故にいふと ● 市に入りて心中に翻する所の物即ち利を求めんとする事 ● 市には日暮に至りては賣買の物盡くるを以て入顧みず ● 忘は無の意



曰。文常好客。遇客無所敢失。食客三千有餘人。先生所知也。客見文一日廢。皆背文去。莫顧文者。今願先生得復其位。客亦有何面目復見文乎。如復見文者。必唾其面而大辱之。馮驩結轡下拜。孟嘗君下車接之曰。先生爲客謝乎。馮驩曰。非爲客謝也。爲君之言失也。夫物有必至。事有固然。君知之乎。孟嘗君曰。愚不知所謂也。曰。生者必有死。物之必至也。富貴多士。貧賤寡友。事之固然也。君獨不見夫朝趨市者乎。明且側肩爭門而入。日暮之後。過市朝者。掉臂而不顧。非好朝而惡暮。所期物忘其中。今君失位。賓客皆去。不足以致士。而徒絕賓客之路。願君遇客如故。孟嘗君再拜曰。敬從命矣。聞先生之言。敢不奉教焉。

太史公曰。吾嘗過薛。其俗閭里率多暴桀。樂子弟。與鄰魯殊。問其故。曰。孟嘗君招致天下任俠姦人。入薛中。蓋六萬餘家矣。世之傳孟嘗君好客。自喜。名不虛矣。

太史公曰く、吾嘗て薛を過ぐ。其の俗閭里率ね暴桀の子弟多く、郷魯と殊なり。其の故を問ふに曰く、孟嘗君天下の任俠の姦人を招致し、薛中に入るよこと蓋し六萬餘家なり。世の孟嘗君客を好みて自ら喜ぶと傳ふる、名虚しからず。

● 凶暴驕奢 ● 處石ならずして正に其實あり

卷七十六

平原君虞卿列傳第十六

平原君趙勝者。趙之諸公子也。諸子中勝最賢。喜賓客。賓客蓋至者數千人。平原君相趙。惠文王及孝成王。三去相。三復位。封於東武城。平原君家樓臨民家。民家有躰者。槃散行汲。平原君美人居

平原君趙勝は趙の諸公子なり。諸子の中勝最も賢にして、賓客を喜む。賓客蓋し至る者數千人。平原君趙の惠文王及び孝成王に相たり。三たび相を去り、三たび位に復す。東武城に封ぜらる。平原君の家樓民家に臨む。民家に躰者有り。槃散として行きて汲む。平原君の美人樓上に居り、臨み見て大に之を笑ふ。明日躰者平原君の門に至り、請ひて曰く、臣君の士を喜むを聞く。士千里を遠しとせずして至るは、君能く士を貴んで妾を賤しむを以てなり。臣不幸にして罷癘の病有り。而して君の後宮臨みて臣を笑ふ。臣願はくは臣を笑ひし者の頭を得んと。平原君笑ひて應へて曰く、諾すと。躰者去る。平原君笑ひて曰く、此の躰子を觀よ。乃ち一笑の故を以て吾が美人を殺さんと欲す、亦甚しからずやと。終

樓上。臨見大  
笑之。明日覺  
者至。平原君  
門。請曰。臣聞  
君之喜士。士  
不遠千里而  
至者。以君能  
貴士而賤妾  
也。臣不幸有  
罷癘之病。而  
君之後宮臨  
而笑之。臣願  
得笑君者。頭  
平原君笑。應  
曰。諾。覺者去。  
平原君笑曰。觀此豎子。乃欲以一笑之故。殺吾美人。不亦甚乎。終不殺。居歲餘。賓客門下  
舍人。稍稍引去者過半。平原君怪之。曰。勝所以待諸君者。未嘗敢失禮。而去者何多也。門  
下。一人前對曰。以君之不以殺。覺者以君爲愛色。而賤士。士即去耳。於是平原君乃斬笑  
覺者。美人頭。自造門。進覺者。因謝焉。其後門下。乃復稍稍來。是時齊有孟嘗。魏有信陵。楚  
有春申。故爭相傾以待士。

に殺さず。居ること歳餘、賓客門下舍人稍稍に引き去る者過半なり。平原君之を  
怪しみて曰く、勝、諸君を待つ所以のものは、未だ嘗て敢へて禮を失はず、而れど  
も去る者何ぞ多きやと。門下の一人前みて對へて曰く、君の覺者を笑ひしもの  
を殺さざるを以て、君を以て色を愛して士を賤しむと爲し、士即ち去るのみ  
と。是に於て平原君乃ち覺者を笑ひし美人の頭を斬り、自ら門に造りて覺者  
に進め、因りて謝す。其の後門下乃ち復た稍稍に來る。是の時齊に孟嘗有り、魏  
に信陵有り、楚に春申有り。故らに争ひ相傾けて以て士を待つ。

● 大名の子 ● 賊者 ● 高階に同じ ● 腰曲りて背の骨高くなる病。癘は毒に同じ。背の疾 ● 半歌以  
上に及ぶ

秦之圍邯鄲。  
趙使平原君  
求救合從於  
楚。約與食客  
門下有勇力  
文武備具者  
二十人。上僭  
平原君曰。使  
能取勝。則善  
矣。文不能取  
勝。則歃血於  
華屋之下。必  
得定從。而還  
士。不外交。取  
於食客門下  
足矣。得二十九  
人。無以滿二  
十人。門下有  
毛遂者。前自

秦の邯鄲を圍むや、趙平原君をして救を求め、楚に合從せしむ。食客門下の勇  
力有り文武備具する者二十人と僭にせんと約す。平原君曰く、文をして能く勝を  
取らしめば則ち善し。文勝を取る能はずんば、則ち血を華屋の下に歃り、必ず從  
を定めて還ることを得ん。士外に索めず、食客門下より取らば足らんと。十九人  
を得て、餘は取るべき者なく、以て二十人に滿つる無し。門下に毛遂といふ者有  
り。前みて、平原君に自贊して曰く、遂聞く、君將に楚に合從せんとして、食  
客門下二十人と僭にせんと約し、外に索めずして今一人を少くと。願はくは君即  
ち遂を以て目に備へて行けよと。平原君曰く、先生勝の門下に處ること、此に幾  
年なるかと。毛遂曰く、此に三年なりと。平原君曰く、夫れ賢士の世に處るや、  
譬へば、錐の囊中に處るが若し。其の末立どころに見はる。今先生勝の門下に  
處ること此に三年なるに、左右未だ稱誦する所有らず。勝未だ聞く所有らず。  
是れ先生有する所無きなり。先生不能なり。先生留まれと。毛遂曰く、臣乃ち今

贊於平原君曰。遂聞君將合從於楚。約與食客門下二十人。偕上不外索。今少一人。願君即行。遂備員而行。先生處勝之門下。幾年於此矣。毛遂曰。三年於此矣。平原君曰。夫賢士之處世也。譬若錐之處囊中。其末立見。今先生處勝之門下。三年於此矣。

日囊中に處らんことを請ふのみ。遂をして蚤く囊中に處ることを得しめば、乃ち穎脱して出でん、特に其の末の見はるゝのみに非ざらんと。平原君竟に毛遂と偕にす。十九人相與に之を目笑すれども未だ發せず。毛遂楚に至る比ひ十九人と論議す。十九人皆服す。平原君楚と合從し、其の利害を言ふ。日出でて之を言ひ、日中すれども決せず。十九人毛遂に謂ひて曰く、先生上れと。毛遂劍を按じ、歷階して上り、平原君に謂ひて曰く、從の利害は兩言にして決せんのみ。今日出でて從を言ひ、日中して決せざるは何ぞやと。楚王平原君に謂ひて曰く、客は何たる者ぞやと。平原君曰く、是れ勝の舍人なりと。楚王叱して曰く、胡ぞ下らざる。吾乃ち而の君と言ふ。汝何たる者ぞと。

● 文事、禮文 ● 武事、勇力に訴へても必ず合從を定めてかへらん ● 自ら自己の才能を賞讃す ● 歌、一歌 ● 稱美、稱譽 ● 無能 ● 鋭尖のぬけ出づること ● 目を見かはして笑ふ ● きたはしの一段毎に歩を轉じて昇ること ● 諾と否との兩言。 ● 一家中の總務を掌る人 ● 而は汝

左右未有所稱誦。勝未有所聞。是先生無所有也。先生不能。先生留。毛遂曰。臣乃今日請處囊中耳。使遂蚤得處囊中。乃穎脱而出。非特其末見而已。平原君竟與毛遂偕。十九人相與目笑之。而遂比至楚。與十九人論議。十九人皆服。平原君與楚合從。言其利害。日出而謂之。日中不決。十九人謂毛遂曰。先生上。毛遂按劍歷階而上。謂平原君曰。從之利害。兩言而決耳。今日出而謂之。日中不決。何也。楚王謂平原君曰。客何爲者也。平原君曰。是勝之舍人也。楚王叱曰。胡不下。吾乃與而君言。汝何爲者也。

毛遂按劍而前曰。王之所以叱遂者。以楚國之衆也。今十步之內。王不得恃楚國之衆也。王之命懸於遂手。吾君在前。叱者何也。且遂聞湯以七十里之地。文王以天下。文王以

百里之壤。而臣諸侯。豈其士卒衆多哉。誠能據其勢。而奮其威。今楚地方五千里。持教百萬。此霸王之資也。以楚之彊。天下弗能當。白起小豎子耳。率數萬之衆。與師以與。楚戰。一戰而舉鄧郢。再戰而燒夷陵。三戰而辱王之先人。此百世之怨。而趙之所羞。而王弗

す。合従するは楚の爲めにして趙の爲めに非ざるなり。吾が君前に在り、叱する者は何ぞやと。楚王曰く、唯唯。誠に先生の言の若し。謹しみて社稷を奉じて以て従はんと。毛遂曰く、従定まるかと。楚王曰く、定まると。毛遂楚王の左右に謂ひて曰く、難狗馬の血を取り來れと。毛遂銅盤を奉じて跪きて之を楚王に進めて曰く、王當に血を飲りて従を定むべし。次なる者は吾が君。次なる者は遂と。遂に従を殿上に定む。毛遂左手に盤血を持して右手に十九人を招きて曰く、公相與に此の血を堂下に飲れ。公等録録たり。所謂人に因りて事を成すものなりと。平原君己に従を定めて歸る。歸りて趙に至りて曰く、勝敢へて復た士を相せず。勝士を相すること多きは千人、寡きは百數。自ら曰爲らく天下の士を失はずと。今乃ち毛先生に於て之を失ふ。毛先生一たび楚に至りて、趙をして九鼎大呂より重からしむ。毛先生三寸の舌を以て、百萬の師より彊し。勝敢へて復た士を相せじと。遂に以て上客となす。

知怒焉。合従者爲楚。非爲趙也。吾君在前。叱者何也。

● 戈戟を持つ戰士 ● 誓約の證として、血を以て口旁に塗り、其餘は之を埋む ● 借定なり。凡庸、一説隨後の貌と ● 自ら天下を相して謀ることなしとなす ● 禹の時九州より金を貢して鑄たる日所。夏殷周三代の寶器 ● 周の宗廟の大鐘。國の寶器たり

楚王曰。唯唯。誠若先生之言。謹奉社稷。而以従。毛遂曰。従定乎。楚王曰。定矣。毛遂謂楚王之左右曰。取雞狗馬之血。來。毛遂奉銅盤。而跪進之。楚王曰。王當飲血。而定。従。次者吾君。次者遂。遂定。従。於殿上。毛遂左手持盤。血。而右手招十九人。曰。公相與飲。此血於堂下。公等錄錄。所謂因人成事者也。平原君已定。従。而歸。歸至。於趙。曰。勝不敢復相士。勝相士多者千人。寡者百數。自目爲不。失。天下之士。今乃於毛先生。而失之也。毛先生一至楚。而使趙重。於九鼎大呂。毛先生以三寸之舌。彊於百萬之師。勝不敢復相士。遂以爲上客。

平原君既返。趙。楚使春申君將兵赴救。趙。魏信陵君亦矯奪晉鄙軍。往救趙。皆未至。秦急圍邯鄲。邯鄲急。

平原君既に趙に返る。楚春申君をして兵に將として赴きて趙を救はしむ。魏の信陵君も亦晉鄙の軍を矯奪し、往きて趙を救ふ。皆未だ至らざるに秦急に邯鄲を圍む。邯鄲急にして且に降らんとす。平原君甚だ之を患ふ。邯鄲の傳舍吏の子李同平原君に説きて曰く、君趙の亡ぶるを憂へざるかと。平原君曰く、趙亡びば則ち勝虜と爲らん。何ぞ憂へずと爲さんやと。李同曰く、邯鄲の民骨を炊ぎ、

且降平原君。甚患之。邯鄲傳舍吏子李同說平原君曰。君不憂趙亡邪。平原君曰。趙亡則勝爲虜。何爲不憂乎。李同曰。邯鄲之民炊骨易子而食。可謂急矣。而君之後宮以百數。婢妾被綺縠。餘粱肉。而民褐衣不完。糟糠不厭。民困兵盡。或刻木爲矛矢。而君器物鍾

子を易へて食ふ。急なりと謂ふべし。而るに君の後宮百を以て數ふ。婢妾綺縠を被、梁肉を除す、而るに民褐衣完からず、糟糠にだに厭かず。民困しみ、兵盡く。或は木を刻りて矛矢と爲す。而して君が器物鍾磬自若たり。秦をして趙を破らしめば君安んぞ此を有するを得ん。趙をして全きを得しめば、君何ぞ有る無きを患へん。今君誠に能く夫人以下をして士卒の間に編せしめ、功を分つて作し、家の有る所盡く散じ、以て士を饗せば、士其の危苦の時に方り徳し易きのみと。是に於て平原君之に従ふ。敢死の士三千人を得たり。李同遂に三千人と秦軍に赴く。秦軍之れが爲めに却くこと三十里。亦會、楚魏の救至る。秦の兵遂に罷め、邯鄲復た存せり。李同戰死す。其の父を封じて李侯と爲す。

- 伴りて奪ひとる ● 糧食を炊ぐに薪湯きて人骨を焚き、糧食盡きて他人の子ととりかへて其の肉を食ふ ● 穀類とらす類 ● 上き米と肥えたる美肉 ● かすとなか。粗食をいふ ● 削る ● 鍾は鐘に通ず、かね。磬は石に作れる樂器 ● 其の繼にて前とかはりなきこと。自知 ● 諸侯の正妻。又貴人の妻をいふ ● 作業す、勞動す ● 士の危苦の時に方りて恩徳を感ぜしめ易し ● 必死、殊死

磬自若。使秦破趙。君安得有此。使趙得全。君何患無有。今君誠能令夫人以下編於士卒之間。分功而作。家之所。盡散以饗士。士方其危苦之時。易德耳。於是平原君從之。得敢死之士三千人。李同遂與三千人赴秦軍。秦軍爲之却三十里。亦會楚魏救至。秦兵遂罷。邯鄲復存。李同戰死。封其父爲李侯。

虞卿欲下以信陵君之存邯鄲。爲平原君請封。公孫龍聞之。夜駕見平原君。曰。龍聞下虞卿欲以信陵君之存邯鄲。爲君請封。有之乎。平原君曰。然。龍曰。此甚不可。且王舉君而

虞卿、信陵君の邯鄲を存するを以て、平原君の爲めに封を請はんと欲す。公孫龍之を聞きて、夜駕して平原君を見て曰く、龍、虞卿が信陵君の邯鄲を存するを以て、君の爲めに封を請はん欲すと聞く。之れ有りやと。平原君曰く、然りと。龍曰く、此れ甚だ不可なり。且つ王君を舉げて趙に相とする者は、君の智能を以て趙國に有ること無しと爲すに非ざるなり。東武城を割きて君を封するものは、君を以て功ありと爲し、國人を以て勳無しとするに非ざるなり。乃ち君が親戚爲るを以ての故なり。君相印を受けて無能を辭せず、地を割きて無功を言はざるものは亦自ら親戚たるを以ての故なり。今信陵君邯鄲を存して封を請

相趙者。非以君之智能爲趙國無有也。割東武城而封君者。非以君爲有功也。而以國一人無勳。乃以君爲親戚。故也。君受相印不辭。無能割地。不言無功者。亦自以爲親戚。故也。今信陵君存邯鄲而請封。是親戚受城而國人計功也。此甚不可。且虞卿操其兩權。事成操右券。以責事不成。以虛名。君必勿聽也。平原君遂不聽虞卿。平原君以趙孝成王十五年卒。子孫代。後竟與趙俱亡。平原君厚待公孫龍。公孫龍善爲堅白之辯。及鄒衍過趙。言至道。乃緇公孫龍。

ふ。是れ親戚城を受けて國人功を計るなり。此れ甚だ不可なり。且つ虞卿其の兩權を操る。事成らば右券を操り、以て責め、事成らずんば、虚名を以て君に徳せん。君必ず聽くこと勿れと。平原君遂に虞卿に聽かず。平原君趙の孝成王の十五年を以て卒す。子孫代り、後竟に趙と俱に亡ぶ。平原君厚く公孫龍を待つ。公孫龍善く堅白の辯を爲す。鄒衍趙を過ぎりて至道を言ふに及び、乃ち公孫龍を細く。

● 何れか一方に於いて外れざる様にしたる二道の確略。兩天秤にかける ● 鄒符の右の方のもの。右契、説文、  
 證 ● 孟子荀卿列傳參照 ● 堅白同異の辯、白く堅き石の白と堅とを分別する説を立て、同者を異ならしめ、異者を同じからしむる一種の辯論法、強辯以て人を屈するの術なり

虞卿者。游説之士也。躡蹠擔簞。說趙孝成王。一見。賜黃金百鎰。白璧一雙。再見。爲趙上卿。故號爲虞卿。秦趙戰於長平。趙不勝。亡一都尉。趙王召樓昌與虞卿。曰。軍戰不勝。尉復死。寡人之何如。樓昌曰。無益也。不如下發重使。爲媾。虞卿曰。昌言媾者。以爲

虞卿は游説の士なり。躡蹠を躡み、簞を擔ひて、趙の孝成王に説く。一たび見え、て黄金百鎰白璧一雙を賜ふ。再び見えて趙の上卿と爲る。故に號して虞卿と爲す。秦趙長平に戦ひ、趙勝たずして一都尉を亡ふ。趙王樓昌と虞卿とを召して曰く、軍戦ひて勝たず、尉復た死す。寡人甲を束ねて之に趨かしめん、何如と。樓昌曰く、益無きなり。重使を發して媾をなすに如かずと。虞卿曰く、昌媾を言ふものは、以て媾ぜずんば軍必ず破ると爲せばなり。而して媾を制する者は秦に在り。且つ王の秦を論するや、趙の軍を破らんと欲するや、不やと。王曰く、秦餘力を遺さず必ず且に趙軍を破らんと欲すと。虞卿曰く、王、臣に聽き、使を發し、重使を出し以て楚魏に附け。楚魏王の重使を得んと欲し、必ず吾が使を内れん。趙の使楚魏に入らば、秦必ず天下の合従を疑ひ、且つ必ず恐れん。此の如くなれば媾乃ち爲すべきなりと。趙王聽かず、平陽君と媾を爲し、鄭朱を發し秦に入らしむ。秦之を内る。趙王虞卿を召して曰く、寡人平陽君をして媾を秦

不媾軍必破也。而制媾者在秦。且王之論秦也。欲破趙之軍乎。不邪。王曰。秦不遺餘力矣。必且欲破趙軍。虞卿曰。王聽臣。發使出重寶以附楚魏。楚魏欲得王之重寶。必內之。吾使趙使入楚魏。秦必疑天下之合從。且必恐。如此則媾乃可爲也。趙王不聽。與平原君爲媾。發鄭朱入秦。秦內之。趙王召虞卿曰。寡人使下平陽君爲媾於秦。秦已內鄭朱矣。卿以爲奚如。虞卿對曰。王不得媾軍必破矣。天下賀戰勝者皆在秦矣。鄭朱貴人也。入秦秦王與應侯必顯重。以示天下。楚魏以趙爲媾。必不救王。

に爲さしむ。秦已に鄭朱を内る。卿以て奚如と爲すと。虞卿對へて曰く、王媾を得ず、軍必ず破れん。天下戰勝を賀する者皆秦に在り。鄭朱は貴人なり。秦に入らば秦王應侯と必ず顯重し、以て天下に示さん。楚魏、趙の媾を爲すを以て必ず王を救はざらん。秦天下の王を救はざるを知らば、則ち媾成るを得べからざるなりと。應侯果して鄭朱を顯にし、以て天下の戰勝を賀する者に示し、終に媾を肯せず。長平大いに敗れ、遂に邯鄲を圍まれ、天下の笑と爲る。秦既に邯鄲の圍を解き、而して趙王入朝す。趙郝をして事を秦に約し、六縣を割きて媾せしむ。

● 草履 ● 笠の長き柄あるもの ● 戰士の甲冑を束ね裏みて履きて敵の不意を襲はんとす ● 身分を貴くして尊重す。國を尊重す ● 高位にして貴ぶ

秦知天下不救王。則媾不可得成也。應侯果顯鄭朱。以示天下。賀戰勝者終不肯媾。長平大敗。遂圍邯鄲。爲天下笑。秦既解邯鄲圍。而趙王入朝。使趙郝約事於秦。割六縣而媾。

虞卿謂趙王曰。秦之攻王也。倦而歸乎。王以其力尙能進。愛王而弗攻乎。王曰。秦之攻我也。不遺餘力矣。必以倦而歸也。虞卿曰。秦以其力攻其所以不能取。倦而歸。王又以不能取。以送之。是助秦自攻也。來年秦復

虞卿趙王に謂ひて曰く、秦の王を攻むるや、倦みて歸りしか、王以ふに其の力尙ほ能く進めども、王を愛して攻めざりしかと。王曰く、秦の我を攻むるや、餘力を遺さず。必ず倦みしを以て歸りしならんと。虞卿曰く、秦其の力を以て其の取る能はざる所を攻め、倦みて歸れり。王又其の力の取る能はざる所を以て以て之を送る、是れ秦を助けて自ら攻むるなり。來年秦復た王を攻むとも、王救ひ無からんと。王虞卿の言を以て趙郝に告ぐ。趙郝曰く、虞卿誠に能く秦の力の至る所を盡さんか。誠に秦の力の進む能はざる所を知らば、此の彈丸の地予へず。秦をして來年復た王を攻めしめば、王其の内を割きて媾する無きを得んやと。王曰く、請ふ子に聽きて割かん。子能く來年秦の復た我を攻めざらしむるを必せんかと。趙郝對へて曰く、此れ臣の敢て任ずる所に非ざるなり。他日三秦の晉に

攻王。王無救矣。王以告趙郝。趙郝曰。虞卿誠能盡秦力之所至乎。誠知秦力之所不能進。此彈丸之地弗予。令秦來年復攻王。王得無割其內而媾乎。王曰。請聽子割矣。子能必使來年秦之不復攻我乎。趙郝對曰。此非三臣之所敢任也。他日三晉之交於秦。相善也。今秦善韓魏而攻王。王之所以事秦。必不如韓魏也。今臣爲足下解負親之攻。開關通幣。齊交韓魏。至來年。而王獨取攻於秦。此王之所以事秦。必在韓魏之後也。此非三臣之所敢任也。

王以告虞卿。虞卿對曰。郝言不媾。來年

交る、相善きなり。今秦韓魏に善くして王を攻む。王の秦に事ふる所以は必ず韓魏に如かざればなり。今臣兄下の爲め、親に負くの攻めを解き、關を開き、幣を通ず、交りを韓魏に齊しくするも、來年に至りて王獨り攻めを秦に取らば、此れ王の秦に事ふる所以必ず韓魏の後に在るなり。此れ臣の敢へて任ずる所に非ざるなりと。

● 六縣を割きて之を贈り與ふ ● 彈丸の如き數小の土地 ● 趙晉で秦に親しみて後之に負く、故に秦は之を賈めて趙を攻めんとするを解かん

王以て虞卿に告ぐ。虞卿對へて曰く、郝言ふ、媾せずんば、來年秦復た王を攻めん。王其の内を割きて媾する無きを得んかと。今媾するも郝又以て秦の復び攻めざ

秦復攻王。王得無割其內而媾乎。今媾郝又以不能必秦之不復攻也。今雖割六城。何益。來年復攻。又割其力之所不能取而媾。此自盡之術也。不知無媾。秦雖善攻。不能取六縣。趙雖不能守。終不失六城。秦倦而歸。兵必罷。我以六城。收天下。以攻之。秦是。是我失之。

るを必ずする能はざるなり。今六城を割くと雖も、何の益かあらん。來年復た攻めば、又其の力の取る能はざる所を割きて媾せん。此れ自ら盡くるの術なり。媾する無きに如かず。秦善く攻むと雖も、六縣を取る能はず。趙守る能はずと雖も、終に六城を失はざらん。秦倦みて歸らば兵必ず罷れん。我六城を以て天下を收め、以て罷秦を攻む。是れ我之を天下に失ひて償ひを秦に取るなり。吾が國尚ほ利あり。坐して地を割き自ら弱くして以て秦を強くすると孰與ぞや。今郝曰く、秦韓魏に善くして趙を攻むる者は必ず以て韓魏趙を救はずとなせばなり。而して王の軍必ず孤ならん。有王の秦に事ふること韓魏に如かざるを以てなり。是れ王をして歳ごとに六城を以て秦に事へしむるなり。即ち坐して城盡きん。來年秦復た地を割かんことを求めば、王將に之を與へんとするか。與へずんば、是れ前功を棄てて秦の禍を挑むなり。之に與ふれば、則ち地にして之に給する無けん。語に曰く、強き者は善く攻め、弱き者は守る能はずと。今坐して秦に聽



於天下而取二  
 價於秦也。吾  
 國尙利。孰與  
 坐而割地。自  
 弱以彊秦哉。  
 今郝曰。秦善  
 韓魏而攻趙  
 者。必以爲韓  
 魏不救趙也。  
 而王之軍必孤。  
 有以王之軍  
 秦復求割地。  
 攻弱者不能守。  
 弱之趙。其計  
 必無趙矣。

趙王計未定。  
 樓緩從秦來。  
 趙王與樓緩  
 計之曰。予秦  
 地何如。毋予

秦不救趙也。是使王歲以六城事秦也。即坐而城盡。來年而王之軍必孤。有以王之軍秦復求割地。王將與之乎。弗與。是棄前功而挑秦禍也。與之則無地而給之。語曰。彊者善攻。弱者不能守。今坐而聽秦。秦兵不弊而多得地。是彊秦而弱趙也。以益彊之秦而割之。愈弱之趙。其計故不止矣。且王之地有盡。而秦之求無已。以有盡之地而給無已之求。其勢必無趙矣。

く、秦兵弊れずして多く地を得ん。是れ秦を彊くして趙を弱むるなり。益々彊き  
 の秦を以て愈々弱き趙を割く、其の計故に止まず。且つ王の地盡くる有つて秦  
 の求め已む無し。盡くるあるの地を以て已む無きの求めに給す。其の勢必ず趙  
 無けん。

● 有は又なり ● 無弊

趙王計未定。樓緩秦より來る。趙王樓緩と之を計りて曰く、秦に地  
 を予ふる何如。予ふる毋きと孰れか吉なるかと。緩辭讓して曰く、此れ臣の能く  
 知る所にあらざるなりと。王曰く、然りと雖も試に公の私を言へと。樓緩對へ

孰吉。緩辭讓  
 曰。此非三臣之  
 所能知也。王  
 曰。雖然。試言  
 公之私。樓緩  
 對曰。王亦聞  
 夫公甫文伯  
 母乎。公甫文  
 伯仕於魯。病  
 死。女子爲自  
 殺於房中者  
 二人。其母聞  
 之弗哭也。其  
 相室曰。焉有  
 子死而弗哭  
 者乎。其母曰。  
 孔子賢人也。  
 逐於魯。而是  
 人不隨也。今  
 死而婦人爲之

て曰く、王も亦夫の公甫文伯の母を聞くか。公甫文伯魯に仕へ、病みて死す。女  
 子爲めに房中に自殺する者二人。其の母之を聞けども哭せず。其の相室曰く、焉  
 んぞ子死して哭せざる者あらんやと。其の母曰く、孔子は賢人なり。魯より逐  
 はれて是の人隨はざるなり。今死して婦人之れが爲めに自殺する者二人。是の  
 若き者は必ず其の長者に薄くして婦人に厚きなりと。故に母より之を言へば、是  
 れ賢母たり。妻より之を言へば、是れ必ず妬妻たるを免れず。故に其の言は一  
 なり。言ふ者異なれば、則ち人心變ず。今臣新たに秦より來りて、予ふる勿れと言  
 はば、則ち計にあらざるなり。之を予へよと言はば、王臣を以て秦の爲めにすと  
 爲さんことを恐る。故に敢へて對へず。臣をして大王の爲めに計るを得しめば、  
 之を予ふるに如かずと。王曰く、諾と。

● 私心 ● 傳舞の類 ● 失計なり、謀の誤れるものなり

母。從妻言之。是必不免爲二嫡妻。故其言一也。言者異。則人心變矣。今臣新從秦來。而言勿予。則非計也。言予之。恐王以臣爲爲秦也。故不敢對。使臣得爲大王計。不如予之。王曰。諾。

虞卿聞之。入見王曰。此飾說也。王春勿予。樓緩聞之。往見王。王又以虞卿之言。告樓緩。樓緩對曰。不然。虞卿得其一。不趙構難。而天下皆說。何也。曰。吾且因彊而乘弱矣。今趙兵困於秦。天下之賀戰勝者。則必盡

虞卿之聞き、入りて王に見えて曰く、此れ飾説なり。王春みて予ふることを勿れと。樓緩之聞き、往きて王に見ゆ。王又虞卿の言を以て樓緩に告ぐ。樓緩對へて曰く、然らず。虞卿其の一を得て其の二を得ず。夫れ秦趙難を構へて天下皆説ふは何ぞや。曰く、吾且に強に因りて弱に乗ぜんとす。今趙の兵秦に困しむ。天下の戰勝を賀する者は則ち必ず盡く秦にあり。故に亟かに地を割きで和をなし、以て天下を疑はしめて秦の心を慰するに如かず。然らずんば、天下將に秦の強弩に因りて趙の弊に乗じ、之を瓜分せんとす。趙且に亡びんとす。何ぞ秦之れ圖らんや。故に虞卿其の一を得て其の二を得ずと曰ふ。願はくは王此を以て之を決せよ、復た計る勿れと。虞卿之聞き、往きて王に見えて曰く、危いかな、樓子の秦の爲めにする所以のもの。是れ愈々天下を疑はしめて、而も何ぞ秦

在於秦矣。故不如亟割地爲和。以疑天下。而慰秦之心。不然。天下將因秦之彊。乘趙之弊。瓜分之。趙且亡。何秦之圖乎。故曰。虞卿得其一。不復此決之。勿復計也。虞卿聞之。往見王曰。危哉。樓子之。所以爲秦者。是愈疑天下。而何慰秦之心哉。獨不言

の心を慰せんや。獨り其の天下に弱を示すを言はずや。且つ臣予ふる勿れと言ふものは、固より予ふる勿きのみにあらざるなり。秦六城を王に索む。而して王六城を以て齊に賂はば、齊は秦の深驪なり。王の六城を得て力を併せて西秦を撃たば、齊の王に聽くこと、辭の畢るを待たざらん。則ち是れ王之れを齊に失ひて、償ひを秦に取るなり。而して齊趙の深驪以て報ゆべく、而して天下に能く爲す有ることを示すなり、王此れを以て聲を發せば、兵未だ境を窺はざるに、臣秦の重賂趙に至りて反つて王に媾するを見ん。秦より媾をなさば、韓魏之を聞きて必ず悉く王を重せん、王を重せば必ず重寶を出し以て王に先せん。則ち是れ王一舉にして三國の親を結びて秦と道を易ふるなりと。趙王曰く、善しと。則ち虞卿をして東齊王に見えて、之と秦を謀らしむ。虞卿未だ返らずして秦の使者已に趙に在り。樓緩之を聞きて、亡け去る。趙是に於て虞卿を封するに一城を以てす。

其示天下弱一乎。且臣言勿予者。非固勿予而已也。秦索六城於王。而王以六城賂齊。齊秦之深讎也。得王之六城。并力西擊秦。齊之聽王。不待辭之畢也。則是王失之於齊。而取償於秦也。而齊趙之深讎。可一以報之矣。而示天下有能為一也。王以此發聲。兵未窺於境。臣見秦之重賂至趙。而反構於王也。從秦為媿。韓魏聞之。必盡重王。重王必出重寶。以先於王。則是王一舉而結三國之親。而與秦易道也。趙王曰善。則使下虞卿東見齊王。與之謀秦。虞卿未返。秦使者已在趙矣。樓緩聞之亡去。趙於是封虞卿以一城。

居頃之。而魏請為從。趙孝成王召虞卿一謀。過平原君。平原君曰。願卿之論從也。虞卿入見王。王曰。魏請為從。對曰。魏過王曰。寡人固

● 巧み飾りたる説 ● 賢 ● 説音エツ。悅に同じ ● 瓜を割く如くに土地を分ち取る ● 王の求めの立どころに迎かれて、使者の述ぶる言葉の終るを待たず ● 前には秦より攻められ、今は略を得るに至る、即ち秦と我と立場をかふる事になる也と

居ること之を頃くして魏從をなさんことを請ふ。趙の孝成王虞卿を召して謀る。平原君に過ぎる。平原君曰く、卿の從を論せんことを願ふと。虞卿入りて王に見ゆ。王曰く、魏從を為さんと請ふ。對へて曰く、魏過つと。王曰く、寡人固より未だ之を許さずと。對へて曰く、王過つと。王曰く、魏從を請ふ、卿、魏過つと曰ひ、寡人未だ之を許さず、又曰く寡人過つと。然らば從終に不可なるかと。對へて曰く、臣聞く、小國の大國と事に從ふや、利あれば則ち大國其の福

未之許。對曰。王過。王曰。魏請從。卿曰。魏過。寡人未之許。又曰。寡人不可乎。對曰。與二小國從事也。有彩則大國受其福。有彩則小國受其禍。今魏目小國。請其福。而王以大國辭其福。臣故曰。王過。魏亦過。竊目為從便。王曰善。乃合魏為從。虞卿既以魏齊之故。不重萬戶侯卿相之印。與魏齊間行。卒去趙。困於梁。魏齊已死。不得意。乃著書。上探春秋。下觀近世。曰。節義稱號。揣摩政謀。凡八篇。以刺譏國家得失。世傳之。曰虞氏春秋。

を受け、敗るゝ有れば、則ち小國其の禍を受くと。今魏は小國を以て、其の禍を請ひ、而して王大國を以て其の福を辭す。臣故に曰く、王過つ、魏も亦過つと。竊かに目ふに從を為すこと便なりと。王曰く、善しと。乃ち魏に合して從をなす。虞卿既に魏齊の故を以て萬戶侯卿相の印を重んぜず。魏齊と間行し、卒に趙を去りて梁に困しむ。魏齊已に死して、意を得ず。乃ち書を著す。上は春秋を探り、下は近世を観る。曰く、節義・稱號・揣摩・政謀凡そ八篇、以て國家の得失を刺譏す。世之を傳へて虞氏春秋と曰ふ。

● 忍びゆく、微行す ● 忍ぶる、評論して批難す

太史公曰。平

太史公曰く、平原君は翩翩たる濁世の佳公子なり。然れども未だ大體を睹ず。

原君朝謂濁世之佳公子也。然未嘗大體。鄒語曰。利令智昏。平原君貪馮亭邪說。使趙陷長平兵四十餘萬。衆邯鄲幾亡。虞卿料事揣情。爲趙畫策。何其工也。及不忍魏齊。卒見於後世云。

鄒語に曰く、利は智をして昏からしむと。平原君馮亭の邪説を貪り、趙をして長平の兵四十餘萬衆を陥いらしめ、邯鄲幾んど亡びんとす。虞卿事を料り、情を揣り、趙の爲めに畫策す、何ぞ其れ工なるや。魏齊に忍びざるに及びて、卒に大梁に困しむ。庸夫すら且つ其の不可なるを知る。況や賢人をや。然れども虞卿窮愁に非ずんば、亦書を著し以て自ら後世に見はるゝ能はずと云ふ。

● 鳥の飛翔するさま、又輕騎のさま、獨世に神説行はれて人心驚愕かざるさまをいふ。一説才智の美なるさまをいふ。● 凡庸の人、俗人

卷七十七

信陵君列傳第十七

魏公子無忌者。魏昭王少子。而魏安釐王異母弟也。昭王薨。安釐王卽位。封公子爲信陵君。是時范雎亡魏。相秦。以怨魏。齊故。秦兵圍大梁。破魏。華陽下軍。走芒卯。魏王及公子患之。公

魏の公子無忌は魏の昭王の少子にして魏の安釐王の異母弟なり。昭王薨す。安釐王位に卽き、公子を封じて信陵君となす。是の時范雎魏を亡けて秦に相たり。魏齊を怨むを以ての故に秦兵大梁を圍み、魏の華陽下の軍を破り、芒卯を走らす。魏王及び公子之を患ふ。公子人となり仁にして士に下る。士賢不肖と無く、皆謙して之に禮交す。敢て其の富貴を以て士に驕らず。士此れを以て方數千里、争ひ往きて之に歸す。食客三千人を致す。是の時に當り、諸侯公子の賢にして客多きを以て、敢て兵を加へて魏を謀らざること十餘年なり。公子魏王と博す。而して北境烽を傳へ擧ぐ。言ふ、趙の寇至り、且に界に入らんとすと。魏王博を釋て、大臣を召して謀らんと欲す。公子王を止めて曰く、趙王田獵する

下士。士無賢不肖。皆謙而禮交之。不取以其富貴。士以此方數千里。爭往歸之。致食客三千人。當是時。諸侯以公子賢多客。不敢加兵謀魏。十餘年。公子與魏王博。而北地傳舉烽。言趙寇至。且入界。魏王釋博。欲召大臣謀。公子止王曰。趙王田獵耳。非爲寇也。復博如故。王恐。心不在博。居頃。復從北方來。傳言曰。趙王獵耳。非爲寇也。魏王大驚曰。公子何以知之。公子曰。臣之客有能探得趙王陰事者。趙王所爲。客輒以報。臣以此知之。是後魏王畏公子之賢能。不敢任公子以國政。

のみ、寇をなすにあらざるなりと。復た博すること故の如し。王恐れて心博にあらず。居ること頃くにして復た北方より來り、傳言して曰く、趙王獵するのみ、寇をなすにあらざるなりと。魏王大に驚きて曰く、公子何を以て之を知るかと。公子曰く、臣の客に能く趙王の陰事を探り得たる者あり。趙王の爲す所、客輒ち以て臣に報ず。臣此れを以て之を知ると。是の後、魏王公子の賢能を畏れ、敢へて公子に任ずるに國政を以てせず。

● 禮義を以て交際す ● 博奕す ● 次々にのろしを上ぐ、舞は高き楯の上に火を焚きて遠近に警報するもの ● 收斂、個數、かり

魏有隱士曰

魏に隱士あり侯嬴と曰ふ。年七十。家貧しくして大梁の夷門の監者たり。公子

侯嬴年七十。家貧爲大梁夷門監者。公子聞之。往請欲厚遺之。不肯受。曰。臣修身絮行數十年。終不以監門困故。而受甲子財。公子於是乃置酒大會賓客。坐定。公子從車騎虛左。自迎夷門侯生。侯生攝弊衣冠。直上載公子。上坐不讓。欲以觀公子。公子執轡愈恭。

之を聞き、往き請ひて厚く之に遺らんと欲す。受くることを肯せずして曰く、臣身を修め、行を絮くすると數十年。終に監門に困しむの故を以て、公子の財を受けずと。公子是に於て乃ち置酒して大に賓客を會す。坐定まりて、公子車騎を從へ、左を虚しくして、自ら夷門の侯生を迎ふ。侯生弊れたる衣冠を攝け、直ちに上りて公子の上坐に載りて讓らず、以て公子を觀んと欲す。公子轡を執りて愈々恭し。侯生又公子に謂ひて曰く、臣に客有り、市屠の中に在り。願はくは車騎を枉けて之に過ぎれと。公子車を引きて市に入る。侯生下りて其の客朱亥を見て、俾倪し、故らに久しく立ちて其の客と語り、微かに公子を察る。公子顔色愈々和ぐ。是の時に當り魏の將相、宗室賓客堂に滿つ。公子を待ち、酒を舉げ、市人皆公子の轡を執るを觀る。從騎皆竊かに侯生を罵る。侯生公子の色終に變ぜざるを視る、乃ち客を謝し、車に就きて家に至る。公子侯生を引きて上坐に坐せしめ、徧く賓客に贊ぐ。賓客皆驚く。酒酣にして公子起ちて壽を侯生の前に爲

侯生又謂公子曰。臣有客在市屠中。願枉車騎過之。公子引車入市。侯生下見其客朱亥。俾倪故久立。與其客語。微察公子。公子顏色愈和。當是時。魏將相宗室賓客滿堂。持公子卮酒。市人皆觀公子執轡。從騎皆竊罵侯生。侯生視公子。色終不變。乃謝客。就車至

す。侯生因りて公子に謂ひて曰く、今日嬴の公子の爲めにする亦足れり。嬴は乃ち夷門の抱關者なり。而るに公子親ら車騎を枉けて、自ら嬴を衆人廣坐の中に迎ふ。宜しく過ぐる所有るべからず。今公子故らに之を過ぐ。然れども嬴公子の名を就さんと欲す。故に久しく公子の車騎を市中に立てて客に過りて以て公子を觀しむ。公子愈々恭し。市人皆嬴を以て小人と爲し、而して公子を以て長者にして能く士に下ると爲すなりと。是に於て酒を罷む。侯生遂に上客と爲る。侯生公子に謂ひて曰く、臣過る所の屠者朱亥此の子は賢者なり。世能く知る莫し。故に屠間に隱るゝのみと。公子往きて數々之を請ふ。朱亥故らに復た謝せず。公子之を怪しむ。

● 魏の部 ● 監誓者、門番 ● 憑に憑ず、いさぎよくす ● 門番 ● 古へ馬車に聚るに中央に駢背、左に駢背、右に陪乘者聚る。今左を慮くして侯生を迎ふるは之を駢殺したるなり ● 馬の背につけたる手綱 ● 市中の屠者、屠は牛豚などを屠殺するを業とする者 ● 睥睨に同じ。正視せず、斜ににらみつくるなり ● 朱亥 ● 共ぐ ● 傷を擧げて健康長壽を祝福す ● 門番。監門。抱はいだく、門は門の貫木 ● 公子の通り

家。公子引侯生坐上坐。偏贊賓客。賓客皆驚。酒酣公子起爲壽侯生前。侯生因謂公子曰。今日蘇之爲公子亦足矣。蘇乃夷門抱關者也。而公子親枉車騎自迎蘇於衆人廣坐之中。不宜有所過。今公子故過之。然蘇欲就公子之名。故久立公子車騎市中。過客以觀公子。公子愈恭。市人皆以爲蘇小人。而以公子爲長者能下士也。於是罷酒。侯生遂爲上客。侯生謂公子曰。臣所過屠者朱亥。此子賢者。世莫能知。故隱屠間耳。公子往數請之。朱亥故不復謝。公子怪之。

過ぐべき所にあらざる所を今故らに迎らしめたり ● この人 ● 答禮を爲さず

魏安釐王二十年。秦昭王已破趙長平軍。又進兵圍邯鄲。公子姊平原君夫人數遺魏王及公子書。請救於魏。魏王使將軍晉鄙

魏の安釐王の二十年、秦の昭王已に趙の長平の軍を破り、又兵を進めて邯鄲を圍む。公子の姊趙の惠文王の弟平原君の夫人爲り、數々魏王及び公子に書を遣り、救を魏に請ふ。魏王將軍晉鄙をして十萬の衆を將りて趙を救はしむ。秦王使者をして魏王に告げしめて曰く、吾趙を攻めて日暮且に下さんとす。而して諸侯の敢へて救ふ者、已に趙を抜かば、必ず兵を移して先づ之を撃たんと。魏王恐れ、人をして晉鄙を止めしめ、軍を留めて、鄴に壁せしめ、名は趙を救ふと爲して、實は兩端を持し、以て觀望す。平原君の使者冠蓋魏に相屬す。魏の公子

將二十萬衆一救者告魏王曰。吾攻趙且暮且下。而諸侯敢救者。已拔趙必移兵先擊之。魏王恐。使人止晉鄙。留軍壁鄴。名為救趙。實持兩端以觀望。平原君使者冠蓋相屬於魏。讓魏公子曰。勝所以自附爲婚姻者。以公子之高義爲能急人之困。今邯鄲

を讓めて曰く、勝自ら附きて婚姻を爲す以所の者は、公子の高義能く人の困しみを急にするを爲すを以てなり。今邯鄲且暮に秦に降らんとす。而して魏の救ひ至らず、安んぞ公子能く人の困しみを急にするに在らんや。且つ公子縦ひ勝を輕んじ、之を棄てて秦に降るも、獨り公子の姉を憐まざらんやと。公子之を患へ、數々魏王に請ひ、及び賓客辯士王に説くと萬端なれども、魏王秦を畏れて終に公子に聽かず。公子自ら終に之を王に得る能はざるを度り、計るに獨り生きて趙をして亡びしめじと。乃ち賓客に請ひ、車騎百餘乘を約し、客を以て往きて秦の軍に赴き趙と俱に死せんと欲す。行きて夷門を過ぎて侯生を見、具さに秦の軍に死せんと欲する所以の狀を告げ、辭決して行く。侯生曰く、公子之を勉めよ。老臣從ふ能はずと。公子行くこと數里。心に快からずして曰く、吾が侯生を待つ所以のものは備はれり。天下聞かざる莫し。今吾且に死せんとす。而るに侯生會て一言半辭の我を送るなし。我れ豈失ふ所有るか。復た車を引きて還りて

侯生に問ふ。

● 彙釋を簡かしむ ● 兩方の形勢を觀て利のある方に附かんとす ● 冠はかんむり、蓋は車上にさしかくる傘、蓋傘。平原君が魏に差し遣はしたる使者數人もあとよりつきくと來りて前後の使者の冠蓋があとより引きつゝきたるをいふ ● 暇乞、告別 ● 何か手荷にてもあらんかと

且暮降秦。而魏救不至。安人之困也。且公子縱輕勝棄之降秦。獨不憐公子姊邪。公子患之。數請魏王。及賓客辯士說王萬端。魏王畏秦終不聽公子。公子自度終不能得之於王。計不獨生而令趙亡。乃請賓客約車騎百餘乘。欲以客往赴秦軍。與趙俱死。行過夷門。見侯生。具告所以。欲死秦軍。狀辭決而行。侯生曰。公子勉之矣。老臣不能從。公行數里。心不快。曰。吾所以待侯生者備矣。天下莫不聞。今吾且死。而侯生曾無一言半辭送我。我豈有所失哉。復引車還問侯生。

侯生笑曰。臣固知公子之還也。曰。公子喜士。名聞天下。今有難無他端而欲赴秦軍。譬若以肉投餒虎。何

侯生笑ひて曰く、臣固より公子の還るを知るなり、曰く、公子士を喜み、名天下に聞ゆ。今難有りて他に端なくして秦の軍に赴かんと欲す。譬ふれば肉を以て餓虎に投ずるが若し。何の功か之れあらんや。尙ほ安んぞ客を事とせんや。然れども公子の臣を遇すること厚し。公子往けども臣送らず。是を以て公子の之を恨みて復た返るを知るなりと。公子再拜して因りて問ふ。侯生乃ち人を屏け問

功之有哉。尙安事客。然公子遇臣厚。公子往而臣不送。以是知公子恨之復返也。公子再拜因問。侯生乃屏人問語曰。嬴聞晉鄙之兵符常在王臥內。而如姬最幸。出入王臥內。力能竊之。嬴聞如姬父爲人所殺。如姬資之三年。自王以下欲求報其父仇。莫能得。如

語して曰く、嬴聞く、晉鄙の兵符常に王の臥内に在り。而して如姫最も幸せられ、王の臥内に入出入す。力能く之を竊まん。嬴聞く、如姫の父人に殺さる。如姫之を資すること三年。王より以下其の父の仇を報するものを求めんと欲すれども、能く得る莫し。如姫公子の爲めに泣く。公子客をして其の仇の頭を斬らしめ、敬みて如姫に進めば、如姫の公子の爲めに死するを欲して辭する所無からん。願ふに未だ路有らざるのみ。公子誠に一たび口を開きて如姫に請はば、如姫必ず許諾せん。則ち虎符を得て晉鄙の軍を奪ひ、北趙を救ひて、西秦を却く。此れ五霸の伐なりと。公子其の計に従ひて如姫に請ふ。如姫果して晉鄙の兵符を盗みて公子に與ふ。公子行く。侯生曰く、將外に在れば、主の令も受けざる所あり。以て國家に便す。公子即し符を合すとも、晉鄙公子に兵を授けずして復之を請はば、事必ず危からん。臣の客屠者朱亥與に俱にすべし。此の人力士なり。晉鄙聽かば大に善し。聽かずんば、之を撃たしむべしと。是に於て公子泣く。侯生曰く、公子

死を畏るか、何ぞ泣くやと。公子曰く、晉鄙は嚙嗜たる宿將なり。往くとも聽かざらんことを恐る。必ず當に之を殺すべし。是を以て泣くのみ。豈死を畏れんやと。是に於て公子朱亥に請ふ。朱亥笑ひて曰く、臣は乃ち市井刀を鼓する屠者にして、公子親ら數々之を存す。報謝せざる所以の者は、以て小禮用ふる所なしと爲せばなり。今公子急あり。此れ乃ち臣命を效すの秋なりと。遂に公子と俱にす。

● 他の良計、他の策 ● 飢えたる虎 ● 誦語、人なき所にて獨かに語る ● 軍事のしるしのよだ ● 齊襄の變に服すること三年。一説に父の爲めに讎を復せんとする資を蓄ふること三年と ● 兵符、虎は威ありて猛き獸にして兵符に之を圖せり、故にいふ ● 五霸がなす所の討伐 ● 詞句多きをいふ、口やかましきなり、大體疾呼する所儀のさま ● 腹めたげぬ、存問す

姫爲公子泣。公子使客斬其仇頭。敬進如姫。如姫之欲爲公子死。上無所辭。願未有一路耳。公子誠一開口請如姫。如姫必許諾。則得虎符。奪晉鄙軍。北救趙。而四却秦。此五霸之伐也。公子從其計。請如

姫。如姫果盜晉鄙兵符。與公子。公子行。侯生曰。將在外。主令有所不受。以便國家。公子即合符。而晉鄙不授。公子兵。而復請之。事必危矣。臣客屠者朱亥。可與俱。此人力士。晉鄙聽大善。不聽。可使擊之。於是公子泣。侯生曰。公子畏死邪。何泣也。公子曰。晉鄙嚙嗜宿將。往恐不聽。必當殺之。是以泣耳。豈畏死哉。於是公子請朱亥。朱亥笑曰。臣乃市井鼓刀屠者。而公子親數存之。所以不報謝者。以爲小禮無所用。今公子有急。此乃臣效命之秋也。遂與公子俱。



公子過謝侯生。侯生曰。臣宜從老不能。請數公子行。日以下至晉鄙軍之日。北鄉自到以送公子。公子遂行。至鄴。矯魏王令。代晉鄙。晉鄙合符疑之。舉手視公子。曰。今吾擁二十萬之衆屯於境上。國之重任。今單車來代。不何如哉。欲無聽。朱亥袖四十斤鐵椎。椎殺晉鄙。

公子過りて侯生に謝す。侯生曰く、臣宜しく従ふべきも、老いて能はず。請ふ公子の行日を數へ、晉鄙の軍に至るの日を以て、北に郷ひて自剄し、以て公子を送らんと。公子遂に行く。鄴に到り、魏王の令を矯めて、晉鄙に代る。晉鄙符を合せて之を疑ひ、手を舉げて公子を視て曰く、今吾十萬の衆を擁して境上に屯す。國の重任なり。今單車來りて之に代る何如ぞと。聽く無からんと欲す。朱亥四十斤の鐵椎を袖にし、晉鄙を椎殺す。公子遂に晉鄙の軍を將る、兵を勅し、令を軍中に下して曰く、父子俱に軍中に在るものは父歸れ、兄弟俱に軍中に在るものは兄歸れ、獨り兄弟無きものは歸り養へと。選兵八萬人を得、兵を進めて秦軍を撃つ。秦軍解き去る。遂に邯鄲を救ひて趙を存す。趙王及び平原君自ら公子を界に迎ふ。平原君鐵矢を負ひ、公子の爲めに先引す。趙王再拜して曰く、古より賢人未だ公子に及ぶ者あらざるなり。此の時に當り、平原君敢へて自ら人に比せずと。公子侯生と決し、軍に至る。侯生果して、北に郷ひて自剄す。

公子遂將晉鄙軍。勅兵下。令軍中曰。父子俱在軍中。父歸。兄弟俱在軍中。兄歸。獨子無兄弟。歸養。得選兵八萬人。進兵擊秦軍。秦軍解去。遂救邯鄲。存趙。趙王及平原君自迎公子於界。平原君負鐵矢。爲公子先引。趙王再拜曰。自古賢人未有及公子者也。當此之時。平原君不敢自比於人。公子與侯生決至軍。侯生果北鄉自剄。

● 從軍もなく、唯一つの車に乗りて來る ● 鐵の椎 ● 兵をととのみ、軍を取りしめる ● 獨り子にて兄弟なき者は家に歸りて父母を養へ ● 國境まで出迎ふ ● 鐵は矢を握りて負ふ器、胡弓、服 ● 先に立ちて迎ふ ● 訣別

魏王怒公子之盜其兵符。矯殺晉鄙。公子亦自知也。已却秦存趙。使將將其軍。歸魏而公子獨與客留趙。趙孝成王德公子之矯奪。

魏王公子の其の兵符を盜み、矯めて晉鄙を殺ししを怒る。公子も亦自ら知るなり。已に秦を却けて趙を存し、將をして其の軍を將るて魏に歸らしめ、公子獨り客と趙に留る。趙の孝成王公子の矯めて晉鄙の兵を奪ひて趙を存せしを徳とす。乃ち平原君と計り、五城を以て公子を封す。公子之を聞きて、意驕矜して自ら功とするの色あり。客の公子に説くあり、曰く、物忘る可からざる有り。或は忘れざるべからざる有り。夫れ人公子に徳する有り。公子忘るべからざるなり。公子

晉鄙兵而存趙。乃與平原君計。以五城封公子。公子聞之。意驕矜而有自功之色。客有說公子曰。物有不可忘。或有不可不忘。夫人有德於公子。公子不可忘也。公子有德於人。願公子忘之也。且矯魏王令。奪晉鄙兵以救趙。於趙則有功。於魏則未爲忠臣也。公子乃自驕而功之。竊爲公子不取也。於是公子立自責。似若無所容者。趙王

人に徳するあり。公子之を忘れんことを願ふなり。且つ魏王の令を矯めて晉鄙の兵を奪ひ、以て趙を救ふ。趙に於ては則ち功あり。魏に於ては、則ち未だ忠臣たらざるなり。公子乃ち自ら驕りて之を功とす。竊かに公子の爲めに取らざるなり。是に於て公子立どころに自ら責めて容るゝ所なきが若き者に似たり。趙王帰除して自ら迎へて、主人の禮を執り、公子を引ききて西階に就かしむ。公子側行辭讓し、東階より上る。自ら舉過を言ひて魏に負いて趙に功無きを以てす。趙王酒に侍し、暮に至りて、口五城を獻するに忍びず。公子の退讓するを以てなり。公子竟に趙に留る。趙王鄙を以て公子の湯沐の邑と爲す。魏も亦信陵を以て公子に奉ず。公子趙に留まる。

● 帯は挿に同じ ● 主人東階に就き、客西階に就く、客若し辱等なれば則ち主人の階に就く ● 罪過 ● 天子諸侯の領邑をいふ、其の邑より收むる租税を沐浴の費に充つるの意

掃除自迎。執主人之禮。引公子就西階。公子側行辭讓。從東階上。自言早過。以下負於魏。無功於趙。趙王侍酒。至暮口不忍獻五城。以公子退讓也。公子竟留趙。趙王以鄙爲公子湯沐邑。魏亦復以信陵奉公子。公子留趙。

公子聞趙有處士。毛公藏於博徒。薛公藏於賣漿家。公子欲見兩人。兩人自匿不肯見公子。公子聞所在。乃間步往從之。此兩人游甚歡。平原君聞之。謂其夫人曰。始吾聞天下無雙。今吾聞之。乃妄從博徒賣漿者

公子、趙に處士あり、毛公は博徒に藏れ、薛公は賣漿家に藏ると聞き、公子兩人を見んと欲す。兩人自ら匿れて公子に見ゆることを肯せず。公子在る所を聞き、乃ち間歩し、往きて此の兩人に従ひ遊びて甚だ歡ぶ。平原君之を聞き、其の夫人に謂ひて曰く、始め吾夫人の弟公子天下無雙と聞けり。今吾之を聞く、乃ち妄りに博徒賣漿の者に從ひ遊ぶと。公子は妄人のみと。夫人以て公子に告ぐ。公子乃ち夫人に謝して去らんとして曰く、始め吾平原君の賢なるを聞く。故に魏王に負きて趙を救ひ、以て平原君に稱ふ。平原君の遊徒らに豪擧のみ。士を求めざるなり。無忌大梁に在りし時より、常に此の兩人の賢を聞けり。趙に至りて見るを得ざるらんを恐る。無忌を以て之に従ひ遊ぶも、尙は其の我を欲せざるを恐る。今平原君乃ち以て羞と爲す。其れ從ひ遊ぶに足らずと。乃ち裝ひて

游。公子妄人耳。夫人以告公子。公子乃謝夫人去。曰。始吾聞平原君賢。故負魏王而救趙。以稱平原君。平原君之游徒豪舉耳。不求士也。無忌自在大梁。一時常聞此兩人賢。至趙恐不得見。以無忌從之游。尚恐其不我欲也。今平原君乃以爲羞。其不足從游。乃裝爲

去らんとす。夫人具さに以て平原君に語る。平原君乃ち冠を免して謝し、固く公子を留む。平原君の門下之を聞き、半ばは平原君を去りて公子に歸す。天下の士復た往きて公子に歸す。公子平原君の客を傾く。公子趙に留まること十年歸らず。秦、公子趙に在りと聞き、日夜兵を出して東魏を伐つ。魏王之を患へ、使をして往いて公子に請はしむ。公子其の之を怒らんことを恐れ、乃ち門下を誠しめて、敢へて魏王の使の爲めに通ずる者あらば死せんと。賓客皆魏に背き、趙之に敢へて公子に歸らん事を勸むるもの莫し。毛公薛公の兩人、往きて公子に見えて曰く、公子以て趙に重んぜられ、名諸侯に聞ゆる所以の者は徒に魏有るを以てなり。今秦魏を攻む。魏急にして公子恤へず、秦をして大梁を破りて先王の宗廟を夷けしむ。公子當に何の面目ありてか天下に立つべきやと。語未だ卒るに及ばず、公子立どころに色を變じ、車に告げて駕を赴かし歸りて魏を救ふ。魏王公子を見て相與に泣く。而して上將軍の印を以て公子に授く。公子遂に將たり。

● 才華ありて出て仕へざる士、浪人 ● 博奕をなす徒輩 ● 儲を賣る家 ● 微行して忍びゆく ● 心の心にかなへんとしたり ● 旅裝を調へて去らんとす ● 憂

去。夫人具以語平原君。平原君乃免冠謝。固留公子。平原君門下聞之。半去平原君。歸公子。天下士復往歸公子。公子傾平原君。客。公子留趙十年不歸。秦聞公子在趙。日夜出兵東伐魏。魏王患之。使使往請公子。公子恐其怒之。乃誡門下有敢爲魏王使通者。皆殺之。賓客皆背魏之。趙、莫敢勸公子歸。毛公薛公兩人往見公子。曰。公子所重於趙。名聞諸侯。上者。徒以有魏也。今秦攻魏。魏急而公子不恤。使秦破大梁而夷先王之宗廟。公子當何面目立天下乎。語未及卒。公子立變色。告車赴駕。歸救魏。魏王見公子。相與泣。而以三上將軍印授公子。公子遂將。

魏安釐王三十年。公子使使遍告諸侯。諸侯各遣將將兵救魏。公子率五國之兵。破秦軍於河外。走蒙驁。遂乘勝逐秦軍。

魏の安釐王の三十年公子使をして遍く諸侯に告げしむ。諸侯公子將たりと聞き、各々將を遣り兵を將るて魏を救はしむ。公子五國の兵を率ゐて、秦の軍を河外に破り、蒙驁を走らす。遂に勝に乗じ秦の軍を逐ひて函谷關に至りて秦兵を抑ふ。秦兵敢へて出でず。是の時に當りて公子の威天下に振ふ。諸侯の客兵法を進む。公子皆之に名づく。故に世俗に魏公子の兵法と稱す。秦王之を患へ、乃ち金萬斤を魏に行ひ、晉鄙の客を求め、公子を魏王に毀らしむ。曰く、公子亡けて

至函谷關。抑秦兵。秦兵不敢出。當是時。公子威振天下。諸侯之客。皆名之。故世俗稱魏公子。兵法。秦王患之。乃行金萬斤於魏。求晉鄙客。令毀公子於魏。王曰。公子亡在外。十年矣。今為魏將。諸侯皆屬。諸侯徒聞魏公子。不聞魏王。公子亦欲因此時。

外に在ること十年なり。今魏の將と爲りて諸侯の將皆屬す。諸侯徒に魏公子に聞きて魏王に聞かず。公子も亦此の時に因りて南面を定めて王たらんと欲す。諸侯公子の威を畏れ、方に共に之を立てんと欲す。秦數々反間をして偽りて公子を賀せしめ、立ちて魏王と爲ることを得しや未しやと。魏王曰、其の毀りを聞きて信ぜざる能はず。後果して人をして公子に代りて將たらしむ。公子自ら再び毀を以て廢せられんとするを知り、乃ち病と謝して朝せず、賓客と長夜の飲を爲し、醇酒を飲み、多く婦女を近づけ、日夜樂飲を爲すもの四歲。竟に酒を病みて卒す。其の歲魏の安釐王も亦た薨す。秦公子の死を聞き、蒙驪をして魏を攻めしめ二十城を抜き、初めて東郡を置く。其の後秦稍く魏を蠶食す。十八歲にして魏王を虜にし、大梁を屠る。高祖始め微少なりし時數々公子の賢を聞く。天子の位に即くに及び、大梁を過ぐる毎に常に公子を祠る。高祖十二年黥布を撃ちてより還り、公子の爲めに守家五家を置く。世世歲ごとに四時を以て公子

を奉祠す。

- 一萬斤の金を撒きて
- こき美酒
- 漢の高祖
- 墳墓の番人

定南面而王。諸侯畏公子之威。方欲共立之。秦數使反間。僞賀公子。得立爲魏王。未也。魏王日聞其毀。不能不信。後果使人代公子將。公子自知。再毀廢。乃謝病。不朝。與賓客爲長夜飲。飲醇酒。多近婦女。日夜爲樂。飲者四歲。竟病酒而卒。其歲魏安釐王亦薨。秦聞公子死。使蒙驪攻魏。拔二十城。初置東郡。其後秦稍蠶食魏。十八歲而虜魏王。居大梁。高祖始微少時。數聞公子賢。及即天子位。每過大梁。常祠公子。高祖十二年。從擊黥布。還爲公子置守家五家。世世歲以四時奉祠公子。

太史公曰。吾過大梁之墟。求問其所。謂夷門夷門者。城之東門也。天下諸公。王亦有喜士者。矣。然信陵君之接巖穴隱者。不恥下交。有以也。名冠諸侯。不虛耳。高祖每過之。而令民奉祠。不絕也。

太史公曰く、吾大梁の墟を過ぎ、其の所謂夷門を求め問ふ。夷門は城の東門なり。天下の諸公王亦士を喜む者あり。然れども、信陵君の巖穴の隱者に接して下交を恥ぢざるは以有るなり。名諸侯に冠たるは虚しからざるのみ。高祖之を過ぐる毎に民をして奉祠絶えざらしむ。

- 其實なくして然るにあらざる也

卷七十八

春申君列傳第十八

春申君者。楚人也。名歇。姓黃氏。游學博聞。事楚頃襄王。頃襄王以歇爲辯。使於秦。秦昭王使白起攻韓魏。敗之於華陽。禽魏將芒卯。韓魏服而事秦。秦昭王方令白起與韓魏共伐楚。未行。而楚使黃

春申君は楚の人なり。名は歇、姓は黃氏。游學博聞にして楚の頃襄王に事ふ。頃襄王歇を以て辯となし、秦に使せしむ。秦の昭王白起をして韓魏を攻めしめ、之を華陽に破り、魏の將芒卯を禽にす。韓魏服して秦に事ふ。秦の昭王方に白起をして韓魏と共に楚を伐たしむ。未だ行かずして楚の使黃歇適々秦に至り、秦の計を聞く。是の時に當り、秦已に前に白起をして楚を攻めしめ、巫黔中の郡を取り、鄢郢を抜き、東竟陵に至る。楚の頃襄王東に徙り、陳縣に治す。黃歇楚の懷王の秦に誘はれて入朝し、遂に欺かれ、留まりて秦に死するを見る。頃襄王は其の子なり。秦之を輕んず。壹たび兵を擧げて楚を滅さんことを恐る。歇乃ち上書して秦の昭王に説きて曰く、天下秦楚より彊きは莫し。

歇適至於秦。閉秦之計。當是之時。秦已前使白起攻楚。取巫黔中。之郡。拔鄢郢。東至竟陵。楚頃襄王東徙。治於陳縣。黃歇見楚懷王。之爲秦所誘。而入朝。遂見歇留死於秦。頃襄王其子也。秦輕之。恐也。秦舉兵而滅楚。歇乃上書。說秦昭王曰。天下莫彊於秦。楚今聞大

今聞く大王楚を伐たんと欲すと。此れ猶兩虎相與に鬪ふがごとし。兩虎相與に鬪ひて驚犬其の弊を受けん。楚を善くするに如かず。臣請ふ其の説を言はん。臣聞く、物至れば則ち反る。冬夏是れなり。致至れば則ち危し。累棊是れなりと。今大國の地、天下に徧く、其の二垂を保つ。此れ生民より已來萬乘の地未だ嘗てあらざるなり。先帝文王莊王の身、三世忘れず。地を齊に接し、以て從親の要を絶つ。今王盛橋をして事を韓に守らしむ。盛橋其の地を以て秦に入る。是れ王甲を用ひず威を信べずして百里の地を得。王能と謂ふべし。王又甲を擧げて魏を攻め、大梁の門を杜ぎ、河内を擧げ、燕酸棗虛桃を抜き、邢に入る。魏の兵雲翔して敢て掾はず。王の功亦多し。王甲を休め、衆を息へ、二年にして後之を復す。又蒲衍首垣を併せ、以て仁平丘に臨み、黃濟陽城を嬰りて魏氏服す。王又濮磨の北を割き、齊秦の要を注り、楚趙の脊を絶つ。天下五合六聚して敢て救はず。王の威も亦單す。王若し能く功を持し、威を守り、攻取の心を細けて、

王欲伐楚。此猶兩虎相與鬪。而驚犬受其弊。不如善楚。臣請言其說。臣聞物至則反。冬夏是也。致至則危。累基是也。今大國之地。偏天下。有其二垂。此從生民已來。萬乘之地。未嘗有二也。先帝文王。莊王之身。三世不忘。接地於齊。以絕從親之要。今王使盛橋守事於韓。盛橋以其地入秦。是王不用甲。不信威。而得百里之地。王可謂能矣。王又擊甲而攻魏。杜大梁之門。擊河內。拔燕酸。盡虛桃。入邢。魏之兵雲翔。而不敢抹。王之功亦多矣。王休甲息衆。二年而後復之。又并蒲衍首垣。以臨仁平丘。黃濟陽。嬰城而魏氏服。王又割濮磨之北。注齊秦之要。絕楚趙之脊。天下五合六聚。而不敢救。王之威亦單矣。王若能持功守威。細攻取之心。而肥仁義之地。使無後患。三王不足四。五伯不足六也。

仁義の地を肥し、後患無からしめば、三王は四とするに足らず、五伯は六とするに足らざるなり。

- 至るは國まるをいふ。冬至は陰の極、夏至は陽の極。● 碁石を積み累ぬること。● 大國は衆をさす
- 乘は陸に同じ。二乘は東西の邊陲。● 三世の間秦楚の事情を忘れず。● 伸。● 救。● 堅守、城を固りて堅く守る義。● 取る。● 理に同じ、盡なり、盡く行はる、盡。● 魏は古く趙に通ず、しりぞく。● 三

王五伯をも凋凌するに十分なり

王若負人徒之衆。仗兵革。王若し人徒の衆を負み、兵革の彊に仗り、魏を毀るの威に乗じて力を以て天

下の主を臣とせんと欲せば、臣其の後患あらんことを恐る。詩に曰く、初めあらざる靡く、克く終りあること鮮しと。易に曰く、狐水を涉り、其の尾を濡すと。此れ始めの易く、終の難きを言ふなり。何を以て、其の然るを知るや。昔し智氏趙を伐つる利を見て、楡次の禍を知らず。吳、齊を伐つる便を見て、于隧の敗を知らず。此の二國は大功なきにあらざるなり。利に前に没して、患を後に易ふるなり。吳の越を信するや、從へて齊を伐つ。既に齊人に艾陵に勝ち、還て越王に三渚の浦に禽にせらる。智氏の魯魏を信するや、從へて趙を伐ち、晉陽城を攻む。勝つこと日あり、韓魏之に叛き、智伯瑤を鑿臺の下に殺す。今王楚の毀れざるを妬みて、楚を毀るの韓魏を強うするを忘る。臣王の爲めに慮りて取らざるなり。詩に曰く、大武遠きに宅して涉らずと。此によりて之を觀れば、楚國は援なり。鄰國は敵なり。詩に云く、遷遷たる兎兔も犬に遇ひて之に獲らる。他人心あり余之を付度すと。今王中道にして韓魏の王を善くするを信するなり。此れ正に

之彊。乘毀魏之威。而欲以力臣天下之主。臣恐其有後患也。詩曰。靡不有初。鮮克有終。易曰。狐涉水。濡其尾。此言始之易。終之難也。何以知其然也。昔智氏見伐趙之利。而不知楡次之禍。吳見伐齊之便。而不知于隧之敗。此二國者。非無大功也。沒利於前。而易患

王若負人徒之衆。仗兵革。王若し人徒の衆を負み、兵革の彊に仗り、魏を毀るの威に乗じて力を以て天

於後也。吳之信越也。從而伐齊。既勝。齊人於艾陵。還爲越王禽。三渚之浦。智氏之信魯魏也。從而伐趙。攻晉陽城。勝。有日矣。韓魏叛之。殺智伯瑤。於豎臺之下。今王妬楚之不毀也。而忘魏也。臣爲王慮而不取也。詩曰。大武遠宅而不涉。從此觀之。楚國

吳の越を信するなり。臣之を聞く、敵假すべからず、時失ふべからずと。臣韓魏の辭を卑くし、患を除きて實は大國を欺かんと欲するを恐る。何となれば、則ち王重世の韓魏に徳する無くして累世の怨あればなり。夫れ韓魏の父子兄弟踵を接して秦に死せし者將に十世ならんとす。本國残はれ、社稷壞られ、宗廟毀たれ、腹を刳き、腸を絶ち、頸を折り、頤を摺ぎ、首身分離し、骸骨を草澤に暴し、頭顱僵仆し、境に相望む。父子老弱、脰を係け、手を束ねて、羣虜となる者路に相及ぶ。鬼神孤傷し、血食する所なく、人民生を聊します、族類離散流亡し、僕妾となる者海内に盈滿せり。故に韓魏の亡びざるは、秦の社稷の憂なり。今王之資し、與に楚を攻むるは、亦過たすや。

● 恃 ● 大雅蕩篇 ● 詩經大雅蕩篇に天生蒸民其命匪諶、靡不有初、鮮克有終 ● 周易水火未濟の卦、狐其の尾を惜しみて水を渉る時に尾を濡さざらんとして尾を擧ぐれども久しきにして遂に覆れて尾を濡す ● 地名、智伯瑤を伐ちて趙襄子の爲めに檢次に敗る ● 吳の地の吳王夫差干陔に敗れて自刎す ● 利に溺る ● 一説易は輕馬あはざるなりと ● 逸詩なり。宅は居なり、地の邊きに居る者は大足ありと雖も渉らざるの意。大

授也。隣國敵也。詩云。趙魏免。遇大獲之。他人有之心。余村度之。今王中道而信韓魏之善王也。此正吳之信越也。臣聞之。敵不可假。時不可失。臣恐韓魏卑辭除患。而實欲欺大國也。何則。王無重世之徳於韓魏。而有累世之怨焉。夫韓魏父子兄弟。接踵而死。於秦者將二十世矣。本國殘。社稷壞。宗廟毀。列腹絶腸。折頸摺頤。首身分離。暴骸骨於草澤。頭顱僵仆。相望於境。父子老弱。係脰束手。爲羣虜者。相及於路。鬼神孤傷。無所血食。人民不聊生。族類離散。流亡爲僕妾者。盈滿海內矣。故韓魏之不亡。秦社稷之憂也。今王資之與攻楚。不亦過乎。

軍は遅く跋涉して攻伐せざるをいふ ● 殺死往來數々して其跡を履く事も獵犬に遇へば遂に捕へらる、類々は往來するさま、詩經小雅巧言篇に出づ ● 大國とは秦をいふ ● 再世といふに同じ ● うなじ、えりくび、頸に繩をかけ、手足を縛り ● 人民の先祖の魂は祭らるゝなく孤傷す ● 血食せざるは國の亡ぶるをいふ。血食は神を祭る也、宗廟の祭には毛血の牲を圖むるによりていふ。子孫の絶ゆるをいふ

且王攻楚。將出兵。王將借路於仇讎之韓魏乎。兵出之日。而王憂其不返也。是王以兵資

且つ王楚を攻めば、將に惡にか兵を出さんとす。王將に路を仇讎の韓魏に借らんとするか。兵出づるの日にして王其の返らざるを憂へん。是れ王兵を以て仇讎の韓魏に資するなり。王若し路を仇讎の韓魏に借らすんば、必ず隨水の右壤を攻めん。隨水の右壤は此れ皆廣川大水山林谿谷、不食の地なり。王之を有す

於仇讎之韓  
魏也。王若不  
借路於仇讎  
之韓魏。必攻  
隨水右壤。此  
隨水右壤。皆  
廣川大水。山  
林谿谷。不食  
之地也。王雖  
有之。不爲得  
地。是王有毀  
楚之名。而無  
得地之實也。  
且王改楚之  
日。四國必悉  
起兵以應王。  
秦楚之兵。構  
而不離。魏氏  
將出而攻。留  
方與銓。湖陵

と雖も地を得となさず。是れ王楚を毀るの名ありて、地を得るの實なきなり。且つ王楚を攻むるの日は四國必ず悉く兵を起し以て王に應ぜん。秦楚の兵構へて離れず、魏氏將に出でて留・方與・銓・湖陵・碭・蕭・相を攻めんとす。故の宋必ず盡きん。齊人南面して楚を攻めば、泗上必ず舉らん。此れ皆平原四達膏腴の地に於て獨り攻めしめ、王楚を破り以て韓魏を中國に肥して齊を勁くせん。韓魏の強き、以て秦に校するに足る。齊南泗水を以て境となし、東海を負ひ、北河に倚りて後患なし、天下の國齊魏より強きなし。齊魏地を得、利を葆み、詳りて下吏に事へ、一年の後、帝となること未だ能はざれど、其の王の帝となるを禁するに於ては餘あり。夫れ王の壤土の博き、人徒の衆き、兵革の強きを以て、壹たび事を擧げて、怨を楚に樹て、遲ち韓魏をして帝の重きを齊に歸せしむ。是れ王の失計なり。臣王の爲めに慮るに、楚に善くするに若く莫く、秦楚合して一となり、以て韓に臨まば、韓必ず手を斂めん。王施すに東山の險を以てし、帶ぶる

碭蕭相。故宋  
必盡。齊人南  
面攻楚。泗上  
必舉。此皆平  
原四達膏腴  
之地。而使獨  
攻。王破楚以  
肥韓。魏於中  
國而勁。齊韓  
魏之疆。足以  
校於秦。齊南  
以泗水爲境。  
東負海。北倚  
河。而無後患。  
天下之國。莫  
彊於齊。魏齊  
魏得地利。齊

に曲河の利を以てせば、韓必ず關内の侯とならん。是の若くにして、王十萬を以て鄆を成らば、梁氏寒心せん。許鄆陵城を嬰りて上蔡召陵往來せざるなり。此の如くにして魏も亦關内侯たらん。王壹たび楚に善くして關内兩萬乘の主ちて地を齊に注たば、齊の右壤手を拱して取る可きなり。王の地、一たび兩海を経て天下を要約せん。是れ燕趙は齊楚無く、齊楚は燕趙なきなり。然る後燕趙を危動し、直ちに齊楚を搖さば、此の四國は痛を待たずして服せんと。昭王曰く、善しと。

● 關内五國、これぬ土地 ● 校は百く校に通ず、以て乘に敵するに足るの意。一説校は報の意にて力よく乘に相闘するに足るをいふ ● つ、わ、かくす ● 伴 ● 乃に同じ ● 懼る、をいふ、人寒きこと甚しきときは心戰く、恐懼するときまた戰く故に甚心といふ ● 兵を以て斂つ ● 手をこまねく、手を袖にす、手を下すことなし ● 東海と西海との間 ● 攻襲せられて痛を感ずるを待たずして服せん

而詳事下吏。一年之後、爲帝未だ能。其於禁王之爲帝有餘矣。夫以王壤土之博、人徒之衆、兵革之彊、壹擧事而樹怨於楚、運令韓魏歸帝重於齊。是王失計也。臣爲王慮。莫若善楚。



秦楚合而爲一以臨韓。韓必斂手。王施以東山之險。帶以山河之利。韓必爲關內之侯。若  
是而王以二十萬一戍鄆。梁氏寒心。許鄆陵嬰城。而上蔡召陵不往來也。如此而魏亦關內侯  
矣。王壹善楚。而關內兩萬乘之主。注地於齊。齊右壤可拱手而取也。王之地一經兩海。要  
約天下。是燕趙無齊楚。齊楚無燕趙也。然後危動燕趙。直搖齊楚。此四國者不待痛而服  
矣。昭王曰。善。

於是乃止。白起而謝韓魏。發使賂楚。約爲與國。黃歇受約歸楚。楚使歇與太子完入質於秦。秦留之數年。楚頃襄王病。太子不得歸。而楚太子與秦相應侯善。於是黃歇乃

是に於て乃ち白起を止めて韓魏に謝し、使を發して楚に賂ひ、約して與國とな  
る。黃歇約を受けて楚に歸る。楚歇をして太子完と與に入りて秦に質たらし  
む。秦之を留むること數年。楚の頃襄王病めども太子歸ることを得ず。而して  
楚の太子秦の相應侯と善し。是に於て黃歇乃ち應侯に説きて曰く、相國誠に  
楚の太子に善きかと。應侯曰く、然りと。歇曰く、今楚王疾に起たざるを恐る。  
秦其の太子を歸すに如かず。太子立つを得ば、其の秦に事ふること必ず重くして  
相國を徳とすること窮りなけん。是れ與國に親しみて萬乘に儲ふるを得るな  
り。若し歸さずんば則ち咸陽の一布衣のみ。楚史に太子を立てて、必ず秦に事へ

說應侯曰。相國誠善楚太子乎。應侯曰。然。歇曰。今楚王恐不起疾。秦不如歸其太子。太子得立。其事秦必重。而德相國無窮。是親與國而得儲萬乘也。若不歸則咸陽一布衣耳。楚更立太子。必不事秦。夫失與國。而絕萬乘之利。非計也。願相國孰慮之。應侯以聞秦

ざらん。夫れ與國を失ひて萬乘の和を絶つは計にあらざるなり。願くは相國  
之を孰慮せよと。應侯以て秦王に聞す。秦王曰く、楚の太子の傳をして先づ往き  
て楚王の疾を問はしめ、返りて後之を圖れと。黃歇楚の太子の爲めに計りて曰く、  
秦の太子を留むるや以て利を求めんと欲するなり。今太子の力未だ以て秦を利す  
る有る能はず。歇之を憂ふること甚し。而して陽文君の子二人中に在り。王若  
し大命を卒へて、太子在らずんば、陽文君の子必ず立ちて後となり、太子宗廟に  
奉ずるを得ざらん。秦を亡けて使者と俱に出づるに如かず。臣請ふ止まり、死を  
以て之に當らんと。楚の太子因りて衣服を變じて、楚の使者の御となり以て關を  
出づ。而して黃歇舍を守る。常に爲めに病を謝す。太子已に遠ざかり、秦追ふ  
能はざるを度り、歇乃ち自ら秦の昭王に言ひて曰く、楚の太子已に歸り出づるこ  
と遠し。歇當に死すべし。願くは死を賜へと。昭王大に怒り、其の自殺を聽さん  
と欲す。應侯曰く、歇人臣となり、身を出して、以て其の主に殉ふ。太子立たば

王。秦王曰。令三楚太子之傅。先往問楚王之疾。返而後圖之。黃歇爲二楚太子計曰。秦之留太子也。欲以求利也。今太子力未能有以利秦也。歇憂之甚。而陽文君子二人。在王中。王若卒。二大命。太子不在。陽文君子必立爲後。太子不得奉宗廟矣。不如亡秦與使者俱出。臣請止以死當之。楚太子因變衣服。爲楚使者。御以出關。而黃歇守舍。常爲謝病。度太子已遠。秦不能追。歇乃自言。秦昭王曰。楚太子已歸。出遠矣。歇當死。願賜死。昭王大怒。欲聽其自殺也。應侯曰。歇爲人臣。出身以殉其主。太子立必用歇。故不如無罪而歸之。以親楚。秦因遣黃歇。歇至楚。三月。楚頃襄王卒。太子完立。是爲考烈王。

● 同盟の國、仲間の國 ● 萬乘の國と和親するを絶つ ● 楚の宮中、中は宮城、禁裡 ● 馬車の御者 ● 殉ふ、其の爲めに一身を亡す

必ず歌を用ひん。故に罪することなくして之を歸し、以て楚に親しむに如かず。秦因りて黄歇を遣る。歌楚に至りて三月、楚の頃襄王卒す。太子完立つ。是を考烈王となす。

也。今太子力未能有以利秦也。歇憂之甚。而陽文君子二人。在王中。王若卒。二大命。太子不在。陽文君子必立爲後。太子不得奉宗廟矣。不如亡秦與使者俱出。臣請止以死當之。楚太子因變衣服。爲楚使者。御以出關。而黃歇守舍。常爲謝病。度太子已遠。秦不能追。歇乃自言。秦昭王曰。楚太子已歸。出遠矣。歇當死。願賜死。昭王大怒。欲聽其自殺也。應侯曰。歇爲人臣。出身以殉其主。太子立必用歇。故不如無罪而歸之。以親楚。秦因遣黃歇。歇至楚。三月。楚頃襄王卒。太子完立。是爲考烈王。

考烈王元年。以黃歇爲相。封爲春申君。賜淮北地十

考烈王の元年、黄歇を以て相となし、封じて春申君となし、淮北の地十二縣を賜ふ。後十五歳黄歇之を楚王に言ひて曰く、淮北の地齊に邊す。其事急なり。

二縣。後十五歳。黄歇言之。楚王曰。淮北地邊齊。其事急。請以爲郡。便。因并獻淮北十二縣。請封於江東。考烈王許之。春申君因城故吳城。以自爲都邑。春申君既相楚。是時齊有孟嘗君。趙有平原君。魏有信陵君。方爭下士。招致賓客。以相傾奪。輔國持權。春申君爲二

請ふ以て郡となさば便ならんと。因りて并せて淮北の十二縣を獻じ、封を江東に請ふ。考烈王之を許す。春申君因りて故の吳の墟に城き、以て自ら都邑となす。春申君既に楚に相たり、是の時齊に孟嘗君あり、趙に平原君あり、魏に信陵君あり。方に争ひて士に下り、賓客を招致し、以て相傾奪し、國を輔けて權を持す。春申君楚の相となりて四年、秦、趙の長平の軍四十餘萬を破る。五年邯鄲を圍む。邯鄲急を楚に告ぐ。楚春申君をして兵に將として往きて之を救はしむ。秦の兵亦去り、春申君歸る。春申君楚に相たる八年、楚の爲めに北伐ちて魯を滅す。荀卿を以て蘭陵の令となす。是の時に當り楚復た強し。趙の平原君人を春申君に使せしむ。春申君之を上舍に舍す。趙の使楚に夸らんと欲し、璠璫の簪を爲り、刀劍の室珠玉を以て之を飾り、命を春申君の客に請ふ。春申君の客三千餘人、其の上客皆珠履を躡み以て趙の使を見る。趙の使大に慙つ。春申君相たる十四年、秦の莊襄王立つ。呂不韋を以て相となし、封じて文信侯とな

楚相四年。秦破趙之長平軍四十餘萬。五年。圍邯鄲。邯鄲告急於楚。楚使春申君將兵往救之。秦兵亦去。春申君歸。春申君相楚八年。爲蘭陵令。當是時。楚復彊。趙平原君使人於春申君。春申君舍之於上舍。趙使欲奪楚。爲瑁瑁簪。刀劍室。

す。東周を取る。春申君相たる二十二年、諸侯秦の攻伐已む時なきを患へ、乃ち相與に合從して西秦を伐つ。而して楚王從長となり、春申君事を用ふ。函谷關に至る。秦兵を出して諸侯の兵を攻む。皆敗走す。楚の考烈王以て春申君を咎む。春申君此を以て益々疎せらる。客に觀津の人朱英あり。春申君に謂ひて曰く、人皆楚を以て彊しとなす。而るに君之を用ひて弱し。其れ英に於ては然らず。先君の時秦に善きこと二十年にして楚を攻めざるは何ぞや。秦龍臨の塞を踰えて楚を攻むるは便ならず。道を兩周に假り、韓魏を背にして楚を攻むるは不可なればなり。今は則ち然らず、魏は旦暮に亡びんとして、許鄆陵を愛する能はず。其の許は魏割きて以て秦に與へ、秦の兵陳を去ること百六十里なり。臣の觀る所のものは、秦楚の日、關ふを見んと。楚是に於て陳を去りて壽春に徙る。而して秦、衛を野王に徙し、東軍を作置す。春申君此より封に吳に就きて相事を行へり。

● 機を授す ● 互に地を割け、地を相奪ひて自國の輔けとなす ● 韓 ● 宰相の事

以珠玉飾之。請命春申君。客春申君客三千餘人。其上客皆蹇珠履。以見趙使。趙使大慙。春申君相十四年。秦莊襄王立。以呂不韋爲相。封爲文信侯。取東周。春申君相二十二年。諸侯患秦攻伐無已時。乃相與合從。西伐秦。而楚王爲從長。春申君用事。至函谷關。秦出兵攻。諸侯兵皆敗走。楚考烈王以咎春申君。春申君以此益疎。客有觀津人朱英。謂春申君曰。人皆以楚爲彊。而君用之弱。其於英不然。先君時善秦二十年。而不攻楚。何也。秦龍臨之塞。而攻楚不便。假道於兩周。背韓魏而攻楚不可。今則不然。魏且暮亡。不能愛許鄆陵。其許魏割以與秦。秦兵去陳百六十里。臣之所觀者。見秦楚之日。關也。楚於是去陳徙壽春。而秦徙衛野王。作置東鄆。春申君由此就封於吳。行相事。

楚考烈王無子。春申君患之。求婦人宜子者。進之甚衆。卒無子。趙人李園持其女弟。欲進之楚王。聞其不

楚の考烈王子なし。春申君之を患ふ。婦人の子に宜しき者を求め、之を進むること甚だ衆し。卒に子なし。趙人李園其の女弟を持し、之を楚王に進めんと欲す。其の子に宜しからざるを聞き、久しくして寵母きを恐る。李園春申君に事へて舍人とならん事を求む。已にして謁歸す。故らに期を失ひて還り調す。春申君之が狀を問ふ。對へて曰く、齊王使をして臣の女弟を求めしむ。其の使者と飲

宜子。恐久毋寵。李園求事春申君。爲中舍人。已而謁歸。故失期還謁。春申君問之。狀對曰。齊王使使求臣之女弟。與其使者飲。故失期。春申君曰。媵入乎。對曰。未也。春申君曰。可得見乎。曰。可。於是李園乃進其女弟。即幸於春申君。知其有身。李園乃與其女弟謀。園女

む。故に期を失ふと。春申君曰く、媵入るか。對へて曰く、未だしと。春申君曰く、見ることを得べきかと。曰く、可なりと。是に於て李園乃ち其の女弟を進む。即ち春申君に幸せらる。其の身めるあるを知り、李園乃ち其の女弟と謀る。園の女弟間を承け、以て春申君に説きて曰く、楚王の君を貴幸すること兄弟と雖も如かず。今君楚に相たること二十餘年。而して王子なし。即ち百歳の後、將に更に兄弟を立てんとせば、則ち楚史に君を立つるの後、亦各々其の故の親しむ所を貴ばん。君又安んぞ長く寵あるを得んや。徒に然るのみにあらざらなり。君貴く事を用ふること久しく、多く禮を王の兄弟に失す。兄弟誠に立たば、禍且に身に及ばんとす。何を以てか、相印江東の封を保たんや。今妾自ら身めるあるを知る。而して人知る莫し。妾君に幸せられて未だ久しからず。誠に君の重きを以て妾を楚王に進めば、王必ず妾を幸せん。妾天に頼り、子男あらば、則ち是れ君の子王となるなり。楚國盡く得べし。身不測の罪に臨むと孰與ぞや

弟承間以説春申君。曰。楚王之貴幸君。雖兄弟不如也。今君相楚二十餘年。而王無子。即百歲後將更立兄弟。則楚更立君後。亦各貴其故所親。君又安得長有寵乎。非徒然也。君費用事久。多失禮於王。兄弟誠立。禍且及身。何以保相印江東之封乎。今妾自知有身矣。而人莫知。妾幸君未久。誠以君之重。而進妾於楚王。王必幸妾。妾頼天有子男。則是君之子爲王也。楚國盡可得。孰與身臨不測之罪乎。春申君大然之。乃出李園女弟。謹舍而言之。楚王召入幸之。遂生子男。立爲太子。以李園女弟爲王后。楚王貴李園。園用事。李園既入其女弟。立爲王后。子爲太子。恐春申君語泄。而益驕。陰養死士。欲殺春申君。以滅其口。而國人頗有知之者。

と。春申君大に之を然りとす。乃ち李園の女弟を出し、謹みて舎して之を楚王に言ふ。楚王召し入れて之を幸す。遂に子男を生む。立てて太子となし、李園の女弟を以て王后となす。楚王李園を貴び、園事を用ふ。李園既に其の女弟を入れ、立ちて王后となり、子は太子となる。春申君の語泄れて益々驕らんことを恐れ、陰に死士を養ひて、春申君を殺し、以て口を滅せんと欲す。而して國人頗る之を知る者あり。

- 家中の雜務を執る人
- 告げ請ひて故郷に歸る
- 婦は聘に同じ、妾を迎ふるに納る、婦物
- 懷孕す、身重になる
- ひま、上き折を見はからひて
- 人の死するをいふ忌み詞
- 故くより親しくする所の者
- 舎にもく
- 李園の謀略春申君の語によりて世に泄れんことを恐る、なり

● 家中の雜務を執る人 ● 告げ請ひて故郷に歸る ● 婦は聘に同じ、妾を迎ふるに納る、婦物 ● 懷孕す、身重になる ● ひま、上き折を見はからひて ● 人の死するをいふ忌み詞 ● 故くより親しくする所の者 ● 舎にもく ● 李園の謀略春申君の語によりて世に泄れんことを恐る、なり

春申君相二十五年。楚考烈王病。朱英謂春申君曰。世有毋望之福。又有毋望之禍。今君處毋望之世。事毋望之主。安可以無毋望之人乎。春申君曰。何謂毋望之福。曰。君望楚二十餘年。雖名相國。實楚王也。今楚王病。且暮且卒。而君相少主。因而代立當國。如伊

春申君相たるの二十五年、楚の考烈王病む。朱英春申君に謂ひて曰く、世に毋望の福あり。又毋望の禍あり。今君毋望の世に處り、毋望の主に事ふ。安んぞ以て毋望の人無かる可けんやと。春申君曰く、何をか毋望の福と謂ふと。曰く、君楚に相たること二十餘年なり。名は相國と雖も、實は楚王なり。今楚王病みて、且暮且に卒せんとす。而して君少主を相け、因りて代り立ちて國に當りて伊尹周公の如くし、王長じて政を反すか、不らずんば即ち遂に南面して孤と稱して楚國を有たん。此れ所謂毋望の福なりと。春申君曰く、何をか毋望の禍と謂ふと。曰く、李園國を治めずして君の仇なり。兵の爲にせずして死士を養ふの日久し。楚王卒せば李園必ず先づ入り、權に據りて君を殺し、以て口を滅せん。此れ所謂毋望の禍なりと。春申君曰く、何をか毋望の人と謂ふと。對へて曰く、君臣を郎中に置け。楚王卒せば、李園必ず先づ入らん。臣君の爲めに李園を殺さん。此れ所謂毋望の人なりと。春申君曰く、足下之

尹周公。王長而反政。不即途南而稱孤。而有楚國。此所謂毋望之福也。春申君曰。何謂毋望之禍。曰。李園不治國。而君之仇也。不爲兵。而養死士。之日久矣。楚王卒。李園必先入。據權而殺君。以滅口。此所謂毋望之禍也。春申君曰。何謂毋望之人。對曰。君置臣郎中。楚王卒。李園必先入。臣爲君殺李園。此所謂毋望之人也。春申君曰。足下置

を置け。李園は弱人なり。僕又之を善くす。且又何ぞ此に至らんと。朱英言の用ひられざるを知り、禍の身に及ばんことを恐れ、乃ち亡け去る。後十七日、楚の考烈王卒す。李園果して先づ入り、死士を棘門の内に伏す。春申君棘門に入る。園の死士春申君を挟み刺して其の頭を斬り、之を棘門の外に投ず。是に於て遂に吏をして盡く春申君の家を滅さしむ。而して李園の女弟初め春申君に幸せられて身めるあり、而して之を王に入れて、生む所の子なる者遂に立つ。是を楚の幽王となす。是の歳、秦の始皇帝立ちて九年なり。嫪毐も亦亂を秦になし、覺れて其の三族を夷せられ、而して呂不韋廢せらる。

- 謂ふことなき無福、謂外の幸、思ひがけぬ幸
- 幼少の君主
- 君主は南面す、南面するは君主となるの意
- 諸侯の自稱、孤と稱するは國君となるの意
- 君主近侍の官なり、後尚書を輔けて護衛に參する官たり
- 戟を立てたる門、城門をいふ
- 三つの親族、父母、兄弟、妻子、一説に父、子、孫といひ、又父昆弟、己昆弟、子昆弟といひ、父族、母族、母族ともいふ

之。李園、弱人也。僕又善之。且又何至此。朱英知言不用。恐禍及身。乃亡去。後十七日。楚考烈王卒。李園果先入伏死於棘門之內。春申君入棘門。園死。士挾刺春申君。斬其頭。投之棘門外。於是遂使更盡滅春申君之家。而李園女弟初幸春申君。有身。而入之王。所生子者遂立。是為楚幽王。是歲也。秦始皇帝立九年矣。嫪毐亦為亂於秦。覺夷其三族。而呂不韋廢。

太史公曰。吾適楚觀春申君故城宮室。盛矣哉。初春申君之說秦昭王。及出身遣太子歸。何其智之明也。後制於李園。旄矣。語曰。當斷不斷。反受其亂。春申君失朱英之謂邪。

太史公曰く、吾楚に適きて春申君の故城宮室を觀るに、盛なるかな。初め春申君の秦の昭王に説き、及び身を出して太子を遣り歸らしむる、何ぞ其の智の明なるや。後に李園に制せらるゝ、旄せるかな。語に曰く、當に斷すべきに斷ぜざれば、反つて其の亂を受くとは、春申君朱英に失するの謂か。

● 案に通ず、年よりてもいざる ● 朱英の言を用ひそねて身を亡ぼすに至れるをいふ

### 卷七十九

#### 范雎蔡澤列傳第十九

范雎者。魏人也。字叔。游說諸侯。欲事魏王。家貧無以自資。乃先事魏中大夫須賈。須賈為魏昭王使於齊。范雎從。留數月未得報。齊襄王聞之。遣口。乃使人賜金十斤及牛酒。雎辭謝不致受。須賈買

范雎は魏の人なり。字は叔。諸侯に游説して魏王に事へんと欲す。家貧しく以て自ら資する無し。乃ち先づ魏の中大夫須賈に事ふ。須賈魏の昭王の爲めに齊に使す。范雎從ふ。留ること數月、未だ報を得ず。齊の襄王雎が辯口を聞き、乃ち人をして雎に金十斤及び牛酒を賜はしむ。雎辭謝して敢へて受けず。須賈之を知りて大いに怒り、以て雎魏國の陰事を持って齊に告ぐ、故に此の饋を得となし、雎をして其の牛酒を受け、其の金を還さしむ。既にして歸り、心に雎を怒り、以て魏の相に告ぐ。魏の相は魏の諸公子魏齊と曰ふ。魏齊大に怒り、舍人をして雎を答撃せしめ、脅を折り、齒を摺く。雎伴り死す。即ち卷くに寶を以てし、廁中に置く。賓客の飲む者酔ひて更々雎に溺し、故らに辱辱し、以て後

知之。大怒以爲。持魏國陰事。告濟。故得此饋。令唯受其牛。酒還中。其金既歸。心怒唯。以告魏相。魏相魏之諸公子。曰魏齊。魏齊大怒。使舍人答。擊唯。折脅。摺齒。唯伴死。即卷以資。置兩中。賓客飲者醉。更溺唯。故膠辱以懲後。令無妄言者。唯從。冀中謂守者。曰。公能出

を懲らし、妄言する者無からしむ。唯冀中より守者に謂ひて曰く、公能く我を出せ。我必ず厚く公に謝せんと。守者乃ち冀中の死人を出し棄てんことを請ふ。魏齊酔ひて曰く、可なりと。唯唯出づることを得たり。後魏齊悔いて、復召して之を求む。魏人鄭安平之を聞き、乃ち遂に唯唯を操りて亡け、伏匿して名姓を更めて張祿と曰ふ。此の時に當り、秦の昭王謁者王稽を魏に使せしむ。鄭安平詐りて卒となりて、王稽に侍す。王稽問ふ、魏に賢人の與に俱に西游すべき者あるかと。鄭安平曰く、臣の里中に張祿先生あり。君に見えて天下の事を言はんと欲す。其の人仇あり、敢へて晝見えすと。王稽曰く、夜與に俱に來れと。鄭安平夜張祿と王稽を見る。語未だ究らずして王稽唯唯の賢なるを知る。謂ひて曰く、先生我を三亭の南に待てと。與に私かに約して去る。

● 張祿。遊物、隱物 ● 昭王。天子の宮中ありて賓客の事を掌る官  
● 古字 ● 膠は屈しむるなり ● 天子の宮中ありて賓客の事を掌る官 ● 復す、戻の

我。我必厚謝公。守者乃請出。奔冀中。死人。魏齊醉曰。可矣。唯唯得。出。後魏齊悔。復召求之。魏人鄭安平聞之。乃遂操。唯唯亡。伏匿。更二名。姓曰張祿。當此時。秦昭王使謁者王稽於魏。鄭安平詐爲卒。侍王稽。王稽問。魏有賢人。可與俱。西游者乎。鄭安平曰。臣里中有張祿先生。欲見君。言天下事。其人仇。不敢晝見。王稽曰。夜與俱來。鄭安平夜與張祿見王稽。語未究。王稽知唯唯賢。謂曰。先生待我於三亭之南。與私約而去。

王稽辭魏去。過載唯唯入。秦。至湖關。望見車騎。從西來。唯唯曰。彼來者爲誰。王稽曰。秦相穰侯東行。縣邑唯唯曰。吾聞穰侯專秦權。惡內諸侯客。此恐辱我。我寧且匿車中。王稽魏を辭し去る。過ぎて唯唯を載せて秦に入り、湖關に至る。車騎の西より來るを望見す。唯唯曰く、彼の來る者は誰と爲すと。王稽曰く、秦の相穰侯東縣邑を行るならんと。唯唯曰く、吾聞く穰侯秦の權を專らにし、諸侯の客を内るゝことを惡むと。此れ恐らくは我を辱しめん。我寧ろ且く車中に匿れんと。頃く有りて穰侯果して至り、王稽を勞らひ、因りて車を立てて語りて曰く、關東何の變有るか。曰く、有る無しと。又王稽に謂ひて曰く、謁者諸侯の客子と俱に來る無きを得んや。益無くして徒に人の國を亂さんのみと。王稽曰く、敢へてせずと。即ち別れ去る。唯唯曰く、吾聞く、穰侯は智士なりと。其の事を見

有頃穰侯果至。勞王稽。因立車而語曰。關東有何變。曰。無有。又謂王稽曰。諸君得無與諸侯客子俱來乎。無益徒亂人國耳。王稽曰。不取。即別去。范雎曰。吾聞穰侯智士也。其見事遲。鄉者疑車中有亡人忘索之。於是范雎下車走曰。此必悔之。行十餘里。果使騎還索。

る運し。郷には車中人有るを疑ひて之を索むることを忘ると。是に於て范雎車を下り、走りて曰く、此れ必ず之を悔いんと。行くこと十餘里、果して騎をして還りて車中を索めしむ。客無し。乃ち已む。王稽遂に范雎と咸陽に入る。已に使を報じ、因りて言ひて曰く、魏に張祿先生有り。天下の辯士なりと。曰く、秦王の國累卵より危し。臣を得れば則ち安し。然れども書を以て傳ふべからず。臣故に載せ來ると。秦王信ぜず、舍して草具を食はしむ。命を待つこと歲餘なり。是の時に當り昭王已に立ちて三十六年。南楚の鄢郢を抜く。楚の懷王秦に幽死す。秦東齊の湣王を破る。常て帝と稱し、後之を去る。數々三晉を困しむ。天下の辯士を厭ひて信する所なし。穰侯華陽君は昭王の母宣太后の弟なり。而して涇陽君、高陵君は皆昭王の同母弟なり。穰侯相たり。三人の者更々將として封邑を有つ。太后の故を以て私家の富王室より重し。穰侯秦の將と爲り、且に韓魏を越えて齊の綱壽を伐たんと欲せんとするに及び、以て其の陶封を廣めん

と欲す。

- 運行す
- 入
- 王稽謂者なるを以て謂君といへりなり
- 卵を積み累ぬること、危き甚しきになつ
- 粗食草具の器具
- 書に通ず
- 定陶の封邑

車中。無客。乃已。王稽遂與范雎入咸陽。已報使。因言曰。魏有張祿先生。天下辯士也。曰。秦王之國危於累卵。得臣則安。然不可以書傳也。臣故載來。秦王弗信。使舍食草具。待命歲餘。當是時。昭王已立三十六年。南拔楚之鄢郢。楚懷王幽死於秦。秦東破齊。湣王常稱帝。後去之。數困三晉。厭天下辯士。無所信。穰侯華陽君、昭王母宣太后之弟也。而涇陽君、高陵君、皆昭王同母弟也。穰侯相。三人者更將有封邑。以太后故。私家富重於王室。及穰侯爲秦將。且欲越韓魏而伐齊。綱壽欲以廣其陶封。

范雎乃上書曰。臣聞明主立政。有功者不得賞。有不能者不得罪。官勞大者其祿厚。功多者其爵尊。能治

范雎乃ち書を上りて曰く、臣聞く、明主の政を立つるや、功有る者は賞せざるを得ず。能ある者は官せざるを得ず。勞大なる者は其の祿厚く、功多き者は其の爵尊く、能く衆を治むる者は、其の官大なりと。故に能無き者は敢へて職に當らず。能ある者も亦蔽隠するを得ず。臣の言を以て可と爲さしめば、願はくは行ひて益々其の道を利せよ。臣の言を以て不可と爲さば、久しく臣を留むるも



衆者其官大。故無能者不取當職焉。有能者亦不得蔽隱。使以臣之言爲可。顯行而益利。其道以臣之言爲不可。久留臣無爲也。語曰。庸主賞所愛而罰所惡。明主則不然。賞必加於有功。而利必斷於有罪。今臣之智不足。以當樞實。而要不足。以待斧鉞。豈敢以疑

爲すこと無きなり。語に曰く、庸主は愛する所を賞して惡む所を罰すと。明主は則ち然らず。賞、必ず功あるものに加へて、刑、必ず罪あるものに斷ず。今臣の智以て樞實に當るに足らず、要以て斧鉞を待つに足らず。豈敢へて疑事を以て營みに王を試みんや。臣を以て賤人と爲して輕辱すと雖も、獨り臣を任ずる者の王に反復すること無きを重んぜざらんや。且つ臣聞く、周に砥礪あり。宋に結絲あり。梁に縣黎あり。楚に和朴あり。此の四寶は土の生ずる所、良工の失ふ所なり。而して天下の名器となる。然らば則ち聖王の弃つる所の者獨り以て國家を厚くするに足らざらんや。臣聞く、善く家を厚くする者は、之を國に取り、善く國を厚くする者は、之を諸侯に取ると。天下明主あれば、則ち諸侯、擅に厚くするを得ざるものは何ぞや。其の榮を割くが爲めなり。良醫は病人の死生を知り、聖主は成敗の事に明かなり。利なれば則ち之を行ひ、害なれば則ち之を舍き疑はしければ則ち少しく之を嘗む。舜禹復た生くと雖も、改むる能はざるの

事嘗試於王哉。雖以臣爲賤人而輕辱之。獨不重任臣者之無反復於王邪。且臣聞周有砥礪。宋有結絲。梁有懸黎。楚有和朴。此四寶者。士之所生。良工之所失也。而爲天下名器。然則聖主之所弃者。獨不足。以厚國家乎。臣聞善厚家者。取之於國。善厚國者。取之於諸侯。天下有明主。則諸侯不得擅厚者。何也。爲其割榮也。良醫知病人之死生。而聖主明於成敗之事。利則行之。害則舍之。疑則少嘗之。雖禹復生。弗能改已。詰之至者。臣不敢載之於書。其淺者。又不足聽也。意者臣愚而不概於王心邪。亡其言臣者。賤而不可用乎。自非然者。臣願得少賜游觀之間。望見顏色。一語無效。請伏斧鉞。實

み。語の至れるものは臣敢へて之を書に載せず。其の淺き者又聽くに足らざるなり。意ふに臣愚にして王の心に概せざるか。亡ろ其の臣を言ふ者賤しくして用ふべからざるか。然るにあらざるよりは、臣願はくは少しく游觀の間を賜ひ、顔色を望見するを得ん。一語效なくんば請ふ斧鉞に伏せんと。

- あはひ隠くす ● 凡庸の君主 ● 罪人を赦せて斬る聲、一説に質は鎖に同じく利刀即ち利刀 ● 腰に同じ
- 之のまさかり、刑具。轉じて刑罰、刑戮 ● 費玉の名。砥の一音アク ● 費玉の名 ● 同上 ●
- 良工もその費玉たることを知らずして失ひしものなり ● 心を動かし感ぜしめざるか ● 轉語無乃の意、
- 然るに「結す」即ち輕辱の意と解するは非 ● 臣を推舉せる者即ち王柄 ● 王の遊觀する暇を賜ひて

於是秦昭王是に於て秦の昭王大いに説ひ、乃ち王稽に謝し傳車を以て范雎を召さしむ。是に於

大説。乃謝王。入其宮。王來。而宦者怒逐之。曰。王至。范唯。爲曰。秦安得王。秦獨有太后。積侯耳。欲以感怒昭王。昭王至。聞其與宦者爭言。遂延迎。謝曰。寡人宜以身受命。久矣。會義渠之

て范唯乃ち離宮に見ゆることを得たり。詳りて永巷を知らざる爲して其の中に入る。王來り、宦者怒り之を逐ひて曰く、王至ると。范唯繆りて爲と曰く、秦安んぞ王を得ん。秦獨り太后穰侯有るのみと。以て昭王を感怒せんと欲す。昭王至り、其の宦者と争ひ言ふを聞き、遂に延きて迎へ、謝して曰く、寡人宜しく身を以て命を受くべきこと久し。會々義渠の事急なり。寡人且暮自ら太后に請ひ、今義渠の事已む。寡人乃ち命を受くることを得。竊かに闕然不敏なり。敬みて賓主の禮を執ると。范唯辭讓す。是の日范唯の見ゆるを觀る者、羣臣洒然として色を變じ、容を易へざる者莫し。秦王左右を屏け、宮中虚しくして人無し。秦王跪きて請ひて曰く、先生何を以て幸に寡人に教ふるかと。范唯曰く、唯唯と。是の若くするもの三たび、秦王跪きて曰く、先生卒に幸に寡人に教へざるかと。范唯曰く、敢へて然るにあらざるなり。臣聞

暮自請太后。今義渠之事。已寡人乃得受命。竊然不敏。欲執執賓主之禮。范唯辭讓。是日觀范唯之見者。羣臣莫不洒然變色。易容者。秦王屏左右。宮中虚無。大秦王跪而請曰。先生何幸教寡人。范唯曰。唯唯。有間。秦王復賜而請曰。先生何以幸教寡人。然也。臣聞。昔者呂尚之遇文王也。身爲漁父。而釣於渭濱。若者交疎也。已説而立爲

く、昔し呂尚の文王に遇ふや、身漁父と爲りて渭濱に釣るのみ。是の若きは交り疎なり。已に説びて立てて太師と爲し、載せて與に俱に歸るは其の言深きなり。故に文王遂に功を呂尚に收めて卒に天下に王たり。郷きに文王をして呂尚を疎んじて與に深く言はざらしめば、是れ周天子の徳無くして文武與に其の王業を成すなきなり。今臣は羈旅の臣なり。交り王に疎にして陳べんことを願ふ所は皆君を匡すの事、人の骨肉の間を處す。愚忠を效さんことを願ひて而かも未だ王の心を知らず。此れ王三たび問へども敢へて對へざる所以の者なり。

● 悦ぶ ● 宿つぎの車、驛車 ● 長安の故城はもと秦の宮なり ● 宮中にある羣衆、後宮の中、女官の罪ある者を幽閉す、又軍に後宮をもいふ。増補に宮中長應相通曰永巷天子公侯可稱と ● わざとそとほけて胸寄せざるまねす ● 西戎の國名なり ● 骨殖 ● 政虐のままにいふ。一説政虐の上は驚懼の意を兼ねいふ也と ● 長蛇、兩股を地につく ● 太公望呂尚父 ● 周の文王武王 ● 正す ● 骨と肉と離るべからず、よりて父子兄弟の如き血をわけたる異味の問柄の者をいふ

太師載與俱歸者。其言深也。故文王遂收功於呂尙。而卒王天下。鄉使文王疎呂尙而不與深言。是周無天子之德。而文武無與成其王業也。今臣竊旅之臣也。交疎於王。而所願陳者。皆匡君之事。處人骨肉之間。願效忠而未知王之心也。此所以王三問而不敢對者也。

臣非有畏而不敢言也。臣知今日言之於前。而明日伏誅於後。然臣不敢避也。大王信行臣之言。死不足以為臣患。亡不足以為臣憂。漆身為厲。被髮為狂。不足以為臣恥。且以五帝之聖焉。而三

臣畏るゝ有りて敢へて言はざるにあらざるなり。臣今日之を前に言ひて明日誅に後に伏するを知る。然れども臣敢へて避けざるなり。大王信に臣の言を行はば、死も以て臣の患となすに足らず。亡も以て臣の憂となすに足らず。身に漆して厲となり、髪を被りて狂と爲るも、以て臣の恥になすに足らず。且つ五帝の聖を以てして死し、三王の仁にして死し、五伯の賢にして死し、烏獲任鄙の力にして死し、成荊・孟賁・王慶忌・夏育の勇にして死す。死は人の必ず免れざる所なり。必然の勢に處し、以て少しく秦に補ひあるべきは、此れ臣の大いに願ふ所なり。臣又何ぞ患へんや。伍子胥棄屍して昭關を出で、夜行き、晝伏して陵水に至り、以て其の口を齧するものなし。膝行蒲伏、稽首肉袒し、腹を鼓し、

王之仁焉。而五伯之賢焉。而烏獲任鄙之力焉。而成荊孟賁之勇焉。而王慶忌夏育之勇焉。而所必不免也。處必然而勢不可少。有補於秦。此臣之所大願也。臣又何患哉。伍子胥棄屍而晝伏。至於陵水。無以劬其口。膝行蒲伏。稽首肉袒。鼓

箠を吹き、食を呉の市に乞ふ。卒に吳國を興し、闔閭伯となる。臣をして謀を盡すを得ること伍子胥の如くならしめば、之に加ふるに囚幽を以てし、終身復た見えざるも、是れ臣の説行はるゝなり。臣又何ぞ憂へん。箕子・接輿身に漆して厲となり、髪を被りて狂となるも主に益なし。假ひ臣をして行ひを箕子に同じくするを得しむるも、以て賢とする所の主に補ひある可くんば、是れ臣の大榮なり。臣何の恥かあらん。臣の恐るゝ所のものは、獨り臣死するの後、天下臣の忠を盡して身死するを見て、因つて是を以て口を杜ぎ、足を裹み肯へて秦に郷ふもの莫きを恐るゝのみ。足下上は太后の嚴を畏れ、下は姦臣の態に惑ひ、深宮の中に居り、阿保の手を離れず、終身迷惑し、與に姦を昭かにする無し。大にしては宗廟滅覆し、小にしては身以て孤にして危し。此れ臣の恐るゝ所ののみ。夫の窮辱の事、死亡の患の若き、臣敢へて畏れざるなり。臣死して秦治まらば、是れ臣が死、生より賢らんと。

腹吹麓乞食  
於吳市卒興  
吳國闔閭爲  
伯使臣得盡  
謀如伍子胥  
加之以幽囚

● 癩、瘡を身に纏りて瘡を生じて癩病の如くなる ● 面髪をより亂す ● 黃帝、顓頊、高辛、堯、舜 ● 三代の聖王をいふ ● 夏禹王、殷湯王、周文王、武王 ● 伯は劉に同じ ● 五人の賢者は、左傳の杜注に、夏伯昆吾、商伯大彭、夏章、周伯彭越、管文と見ゆ ● 春秋の世の五霸は諸説あり ● 蘇を養ふ ● 鮑は犀兕を食ふなり ● 鮑御 ● 首を地にづく、臨み視して食を乞ふ也 ● 茂は竹の一種節を吹くをいふ、一に蕭に作る ● 阿は倚なり、保は養なり、倚頼して養育せらるること、又其の人

終身不復見是臣之說行也臣又何憂箕子接輿漆身爲厲被髮爲狂無益於主假使臣得同行於箕子可有補所賢之主是臣之大榮也臣有何恥臣之所恐者獨恐臣死之後天下見臣之盡忠而身死因以是杜口裹足莫肯鄉秦耳足下上畏太后之嚴下惑於姦臣之惡居深宮之中不離阿保之手終身迷惑無與昭姦大者宗廟滅覆小者身以孤危此臣之所恐耳若夫窮辱之事死亡之患臣不取畏也臣死而秦治是臣死賢於生

秦王曰先生  
是何言也  
夫秦國辟遠  
寡人愚不肖  
先生乃幸辱  
至於此是天  
以寡人恩先

秦王聽きて曰く、先生是れ何の言ぞや。夫れ秦は國辟遠、寡人は愚にして不肖なり。先生乃ち幸に辱なく此に至る。是れ天寡人を以て先生を慰して、先王の宗廟を存するなり。寡人命を先生に受くるを得ば、是れ天先王に幸して其の孤を弃てざる所以なり。先生奈何にして言是の若くなるぞ。事大小と無く、上は太

生而存先王  
之宗廟也寡  
人得受命於  
先生是天所  
以幸先王而  
不棄其孤也  
先生奈何而  
言若是事無  
小大上及太  
后下至大臣  
願先生悉以  
教寡人無疑  
寡人也范雎  
拜秦王亦拜  
范雎曰大王  
之國四塞以  
爲固北有甘  
泉谷口南帶  
涇渭右隴蜀  
左關阪奮擊

后に及び、下は大臣に至るまで、願はくは先生悉く以て寡人に教へよ。寡人を疑ふことなかれと。范雎拜す。秦王も亦拜す。范雎曰く、大王の國四塞以て固と爲す。北に甘泉谷口あり、南に涇渭を帯び、隴蜀を右にし、關阪を左にす。奮撃百萬、戰車千乘。利なれば則ち出でて攻め、利ならざれば則ち入りて守る。此れ王者の地なり。民私闘に怯にして、公戰に勇む。此れ王者の民なり。王此の二者を并せて之を有つ。夫れ秦卒の勇車騎の衆を以てして、以て諸侯を治む。譬ふれば韓盧を馳せて蹇兔を搏つが若きなり。霸王の業致すべきなり。而れども羣臣其の位に當る莫く、今に至るまで關を閉づること十五年、敢へて兵を山東に窺はざる者は、是れ穰侯秦の爲めに謀ること不忠にして、大王の計失ふ所あればなりと。秦王聽きて曰く、寡人願はくは失計を聞かんと。然れども左右竊かに聴く者多し。范雎恐れて、未だ敢へて内を言はず、先づ外事を言ひ以て秦土の俯仰を觀んとす。因りて進みて曰く、夫の穰侯韓魏を越えて齊の綱罽を

百萬。戰車千乘。利則入攻。不利則入守。此王者之地也。民怯於私。關而勇於公。戰也。此王者之民也。王并此二者而有之。夫以秦卒之勇。車騎之衆。以治諸侯。譬若馳韓盧而搏蹇兔也。謂王之業可致也。而羣臣莫當其位。至今閉關十五年。不敢窺兵於山東者。是積

攻むるは計にあらざるなり。少しく師を出せば、則ち以て齊を傷るに足らず、多く師を出せば、則ち秦に害あり。臣意ふに王の計、少しく師を出して韓魏の兵を悉さんと欲するなり。則ち不義なり。今與國の親しまざるを見るや、人の國を越えて攻むる、可ならんや、其の計に於て疎なり。且つ昔齊の湣王南楚を攻めて、軍を破り、將を殺し、再び地を辟くこと千里にして、而かも齊尺寸の地得る無きは豈地を得るを欲せざらんや。形勢有つ能はざればなり。諸侯齊の罷弊し、君臣の和せざるを見るや、兵を興して齊を伐ち、大いに之を破り、士辱められ兵頓る。皆其の王を咎めて曰く、誰か此の計をなしし者ぞと。王曰く、文子之を爲せりと。大臣亂を爲し、文子出でて奔る。故に齊の大に破る、所以のものは、其の楚を伐ちて韓魏を肥すを以てなり。此れ所謂賊に兵を借し、盜に糧を靡らすものなり。王遠く交りて近く攻むるに如かず。寸を得れば則ち王の寸なり。尺を得るも亦王の尺なり。今此を釋てて遠く攻むるは亦繆らずや。且つ昔中山の國、地方五百里、趙獨

侯爲秦謀不忠。而大王之計有所失也。秦王曰。寡人願聞失計。然左右多竊聽者。范雎恐。未敢言內。先言外事。以觀秦王之俯仰。因進曰。夫穰侯越韓魏而攻齊。綱壽非計也。少出師。則不足傷齊。多出師。則害於秦。臣意王之計。欲少出師而悉韓魏之兵也。則不義矣。今見與國之不親也。越人之國而攻之。可乎。其於計疎矣。且昔齊湣王南攻楚。破軍殺將。再辟地千里。而齊尺寸之地無得焉者。豈不欲得地哉。形勢不能也。諸侯見齊之罷弊。君臣之不和也。興兵而伐齊。大破之。士辱兵頓。皆咎其王曰。誰爲此計者乎。王曰。文子爲之。大臣作亂。文子出奔。故齊所以大破者。以其伐楚而肥韓魏也。此所謂借賊兵。竊盜糧者也。王不如遠交而近攻。得寸則王之寸也。得尺亦王之尺也。今釋此而遠攻。不亦繆乎。且昔者中山之國。地方五百里。趙獨吞之。功成名立。而利附焉。天下

之を吞み、功成り名立ちて利附く。天下之を能く害するもの莫し。今夫れ韓魏は中國の處にして天下の樞なり。王其れ霸たらんと欲せば、必ず中國に親しみ、以て天下の樞をなし、以て楚趙を威せ。楚強ければ則ち趙を附けん。趙強ければ則ち楚を附けん。楚趙皆附かば、齊必ず懼れん。齊懼るれば必ず辭を卑くし、幣を重くし、以て秦に事へん。齊附きて而して韓魏因りて虜にすべきなりと。

● 田文の意、迷惑をかき ● 穰侯は張儀、蹇兔は張儀、秦強くして諸侯を征服するの易きに譬ふ ● 秦の内事、太后穰侯の政を擬にすること指す ● 向背といふ程の意 ● 與國は韓魏を指す ● 敗る ● 田文孟嘗君 ● 福要、大切な所

莫之能害也。今夫韓魏。中國之樞也。而天下之樞也。王其欲弱。必親中國。以爲天下樞。以威楚趙。楚強則附趙。趙強則附楚。楚趙皆附。齊必懼矣。齊懼必卑辭重幣。以事秦。齊附而韓魏因可勝也。

昭王曰。吾欲親魏久矣。而魏多變之國也。寡人不能親。請問親魏奈何。對曰。王卑詞重幣。以事之。不可則割地而賂之。不可則因舉兵而伐之。王曰。寡人敬聞命矣。乃拜范雎爲客卿。謀兵事。卒聽范雎謀。使五大夫縮伐魏。拔懷。

昭王曰く、吾魏に親しまんと欲すること久し。而れども魏は變多きの國なり。寡人親しむ能はず。請ひ問ふ、魏に親しむ奈何と。對へて王く、王詞を卑くし、幣を重くし、以て之に事へよ。可かずんば則ち地を割きて之に賂へ、可かずんば因りて兵を舉げて之を伐てと。王曰く、寡人敬みて命を聞かんと。乃ち范雎を拜して客卿と爲し、兵事を謀る。卒に范雎の謀を聽き、五大夫縮をして魏を伐ちて懷を抜かしむ。後二歲邢丘を抜く。客卿范雎復た昭王に説きて曰く、秦韓の地形相錯はると輔の如し。秦の韓あるや、譬ふれば木の蠹有り、人の心腹の病あるが若きなり。天下變無ければ則ち已む、天下變有らば、其の秦の患を爲す者、孰れか韓より大ならんや。王韓を收むるに如かずと。昭王曰く、吾固と韓を收めんと欲す。韓聽かずんば之を爲すこと奈何と。對へて曰く、韓安んぞ聽く

後二歲、拔邢丘。客卿范雎復説昭王曰。秦韓之地形相錯如輔。秦之有韓也。譬若木之有蠹也。人之有心也。下無變則已。天下有變其爲秦患者。孰大於韓乎。王不如此。收韓。昭王曰。吾固欲收韓。韓不聽。爲之奈何。對曰。韓安得無聽乎。王下兵而攻潁陽。則

こと無きを得んや。王兵を下して潁陽を攻めば、則ち鞏成阜の道通せず、北太行の道を斷たば、則ち上黨の師下らざらん。王一たび兵を興して潁陽を攻めば、則ち其の國斷たれて三と爲らん。夫れ韓必ず亡ぶるを見る。安んぞ聽かざるを得ん。若し韓聽かば、而して霸事因りて、慮る可しと。王曰く、善しと。且に使を韓に發せんと欲す。范雎曰く、益々親しまれ、復た説用ひらるること數年なり。因りて間を請ひ説きて曰く、臣山東に居りし時、齊の田文あるを聞けども、其の王有るを聞かず。秦の太后穰侯華陽高陵涇陽あるを聞けども、其の王あるを聞かず。夫れ國を擅にする之れを王と謂ひ、利害を能くする之れを王と謂ふ。殺生の威を制する之れを王と謂ふ。今太后行を擅にして顧みず。穰侯使を出して報ぜず。華陽涇陽等擊斷諱む無く、高陵進退請はず。四貴備はりて國危からざるものは未だ之れあらざるなり。此の四貴の下と爲る者は乃ち所謂王無きなり。然れば則ち權安んぞ傾かざるを得ん。令安んぞ王より出づるを得んや。

鞏成阜之道不通。北斷太行之道。則上黨之師不下。王一興兵而攻秦陽。則其國斷而爲三。夫韓見必亡。安得不聽乎。若韓聽而罷事。因可慮矣。王曰。善。且欲發使於韓。范雎曰。益親復說用數年矣。因請間說曰。臣居山東一時。聞齊之有田文。不聞其有王也。聞秦之有太后。穰侯。華陽。高陵。涇陽。不聞其有王也。夫擅國之謂王。能利害之謂王。制殺生之威之謂王。今太后擅行不顧。穰侯出使不報。華陽涇陽等。擊斷無諱。高陵進退不請。四貴備而國不危者。未之有也。爲此四貴者下。乃所謂無王也。然則權安得不傾。令安得從王出一乎。

臣聞善治國者。乃內固其威。而外重其權。穰侯使者。操王之重。決制於諸侯。剖符於天下。政適伐國。莫敢

臣聞く、善く國を治むる者は乃ち内其の威を固くして、外其の權を重くす。穰侯の使者王の重を操り、制を諸侯に決し、符を天下に剖き、適を政し、國を伐つ。敢て聽かざる莫し。戰勝ちて攻め取れば、則ち利陶國に歸し、諸侯を弊御し、戰敗るれば則ち怨を百姓に結びて禍社稷に歸す。詩に曰く、木實繁きものは其の枝を披し、其の枝を披するものは其の心を傷る。其の都を大にする者

● 種々の色織を以て縹纁を造り取りたるもの、土地の境界相錯はること五采の色の錯雜する如きに喩ふ ● 木中に生じて木心を食ふ蟲、きくひ蟲 ● 使を他國に出して王に報告せず ● 假に人を刑して王を懼り畏るゝことなし ● 太后、穰侯、華陽君涇陽君、高陵君の四貴人

不聽。戰勝攻取。則利歸於陶國。弊御於諸侯。戰敗則結怨於百姓。而禍歸於社稷。詩曰。木實繁者。彼其枝披其披者。傷其心。大其都者。危其國。尊其臣者。卑其主。崔杼淖齒管齊。射王股。擯王筋。縣之於廟梁。宿昔而死。李兌管趙。囚主父於沙丘。百日而餓死。今臣聞

は其の國を危くし、其の臣を尊くする者は其の主を卑しくす。崔杼淖齒を管どり、王の股を射、王の筋を擯き、之を廟梁に懸け宿昔にして死せしむ。李兌趙を管どり、主父を沙丘に囚へ、百日にして餓死せしむ。今臣聞く、秦の太后穰侯事を用ひ、高陵華陽涇陽之を佐け、卒に秦王を無せんとすと。此れ亦淖齒李兌の類なり。且つ夫れ三代の國を亡ほす所以の者は、君専ら政を授け、酒を縱にし騎騁弋獵して政事を聽かず、其の授くる所の者は、賢を妬み能を嫉み、下を御し、上を蔽ひ、以て其の私を成して主の爲めに計らず。而れども主覺悟せず。故に其の國を失ふ。今有秩より以上諸大吏に至り、下王の左右に及ぶまで相國の人にあらざる者無し。王獨り朝に立つを見る。臣竊かに王の爲めに萬世の後秦國を有つ者は王の子孫にあらざらんことを恐るゝなりと。昭王之を聞き、大いに懼れて曰く、善しと。是に於て、太后を廢し、穰侯高陵華陽涇陽君を關外に逐ふ。秦王乃ち范雎を拜して相となし、穰侯の印を收めて陶を歸さ

秦太后穰侯用事。高陵華陽涇陽佐之。卒無秦。秦此亦漳齒李兌之類也。且夫三代所以亡國者。君事授政。縱酒聽聘。弋獵不聽。政事其所授者。妬賢嫉能。御下蔽上。以成其私。不爲主計。而主不覺悟。故失其國。今自有秩以上。至諸大吏。下及王左右。無非相國之人。且王獨立於朝。臣竊爲王恐。萬世之後。有秦國者。非王孫也。昭王聞之。大懼。曰。善。於是廢太后。逐穰侯高陵華陽涇陽君於關外。秦秦乃拜范雎爲相。收穰侯之印。使歸陶。因使縣官給車牛。以徙千乘有餘。到關。關問其寶器。寶器珍怪。多於王室。秦封范雎以應。號爲應侯。當是時。秦昭王四十一年也。

范雎既相秦。已に死して久しと。魏秦且に東韓魏を伐たんとするを聞く。魏須賈をして秦に使せしむ。范雎之を聞きて微行をなし、敝衣間歩して邸に之き、須賈を見る。須賈之を見て驚きて曰く、范叔固に恙無きやと。范雎曰く、然りと。須賈笑ひて曰く、范叔秦に説くこと有りやと。曰く、不ざるなり。唯前日過を魏相に得たり。故に亡逃して此に至る。安んぞ敢て説かんやと。須賈曰く、今叔何を事とするかと。范雎曰く、臣人の爲めに庸賃すと。須賈意之を哀み、留めて與に坐して飲食して、曰く、范叔一寒此の如きやと。乃ち其の一縑袍を取り以て之に賜ふ。須賈因りて問ひて曰く、秦張君を相とす、公之を知るか。吾聞く、王に幸せられて天下の事皆相君に決すと。今吾が事の去留も張君に在り。孺子豈客の相君に習ふ者有らんやと。范雎曰く、主人翁之を習知す。唯唯も亦調するを得ん。唯請ふ、君の爲めに張君に見えしめんと。須賈曰く、吾が馬病み、車輔折る。大車驪馬に非ざれば吾出ですと。范雎曰く、願はくは君の爲めに

しめ、因つて縣官をして牛車を給し以て徙さしむ。千乘有餘關に到る。關其の寶器を閱するに、寶器珍怪、王室より多し。秦范雎を封するに應を以てし、號して應侯と爲す。是の時に當り、秦の昭王の四十一年なり。

范雎既に秦に相たり、秦號して張祿と曰ふ。而れども魏知らず。以へらく范雎

- 諸侯を盡斷取す
- 符を削くは符をわかつをり、地を削きて人け封邑を與ふ
- 敵を征す
- 弊は斷なり、御は制なり、穰侯權を執りて以て諸侯を制斷取す
- 折る
- 齊莊公に事ふ
- 楚の人、楚王に事ふ
- 實は典に同じ、二人君の權を掃りて王を賦せしなり
- 王の穀は世に莊公の穀を射たるをいふ
- 趙の武靈王自ら號して主へといふ、事は趙世家に詳なり
- 或は圖を以て矢に繋ぎ以て鳥獸を射るもの
- 其の官位かに秩あるもの
- 王の死後

秦號曰張祿。而魏不知。以爲范雎已死久矣。魏聞秦且東伐韓魏。魏使須賈於秦。范雎聞之。爲微行。敝衣間歩之。邸見須賈。須賈見之而驚。曰。范叔固無恙乎。范雎曰。然。須賈笑曰。范叔有説於秦邪。曰。不也。唯前日得過於魏。相故亡逃至此。安敢説乎。須賈曰。今叔

已に死して久しと。魏秦且に東韓魏を伐たんとするを聞く。魏須賈をして秦に使せしむ。范雎之を聞きて微行をなし、敝衣間歩して邸に之き、須賈を見る。須賈之を見て驚きて曰く、范叔固に恙無きやと。范雎曰く、然りと。須賈笑ひて曰く、范叔秦に説くこと有りやと。曰く、不ざるなり。唯前日過を魏相に得たり。故に亡逃して此に至る。安んぞ敢て説かんやと。須賈曰く、今叔何を事とするかと。范雎曰く、臣人の爲めに庸賃すと。須賈意之を哀み、留めて與に坐して飲食して、曰く、范叔一寒此の如きやと。乃ち其の一縑袍を取り以て之に賜ふ。須賈因りて問ひて曰く、秦張君を相とす、公之を知るか。吾聞く、王に幸せられて天下の事皆相君に決すと。今吾が事の去留も張君に在り。孺子豈客の相君に習ふ者有らんやと。范雎曰く、主人翁之を習知す。唯唯も亦調するを得ん。唯請ふ、君の爲めに張君に見えしめんと。須賈曰く、吾が馬病み、車輔折る。大車驪馬に非ざれば吾出ですと。范雎曰く、願はくは君の爲めに



何事。范唯曰。臣爲人庸貨。須買意哀之。留與坐飲食。曰。范叔一寒如此哉。乃取其一縑袍以賜之。須買因問曰。秦相張君。公知之乎。吾聞幸於王。天下之事皆決於相君。今吾事之去留。在張君。孺子豈有容習於吾馬病車軸折。非大車駟馬。吾不出。范唯曰。願爲君借大車駟馬於主人翁。范唯歸。取大車駟馬。爲須買御之。入秦相府。府中望見有識者。皆避匿。須買怪之。至相舍門。謂須買曰。待我。我爲君先入。通於相君。須買待門下。持車良久。問門下曰。范叔不出何也。門下曰。無范叔。須買曰。鄉者與吾載而入者。門下曰。乃吾相張君也。須買大驚。自知見賣。乃肉袒膝行。因門下人謝罪。

● 潛み行く、忍び行く ● 人の腹にふれざるやう間隙を窺ひて歩く ● 諸國の客の館 ● 人に雇はれて賃錢によりて勞役す ● 甚しき貧乏 ● 厚き絹の綿入れ、施物なり ● 宰相の館舎

於是范唯盛帷帳。侍者甚衆。見之。須買曰。首言死罪。能自致於青雲之上。買不取復讀天下之書。不取復與天下之事。買有湯鏹之罪。請自屏於胡貉之地。唯君死生之。范唯曰。汝罪有幾。曰。擢買之愛。以擢買之罪。尙未足。范唯曰。汝罪有三耳。昔者楚

是に於て范唯帷帳を盛にし、侍者甚だ衆くして、之を見る。須買頓首して死罪を言ひて曰く、賈君能く自ら青雲の上に致すを意はず。賈敢て復た天下の書を讀まず。敢へて復た天下の事に與らず。賈湯鏹の罪有り。請ふ自ら胡貉の地に屏けん。唯君之を死生せよと。范唯曰く、汝が罪幾く有るか。曰く、賈の髪を擢き、以て賈の罪を續ふも尙ほ未だ足らずと。范唯曰く、汝の罪三有るのみ。昔者楚の昭王の時、申包胥楚の爲めに吳の軍を卻く、楚王之を封するに荆の五千戸を以てす。包胥辭して受けず。丘墓の荆に寄るが爲めなり。今唯の先人の丘墓も亦魏に在り。公前に唯を以て齊に外心有りと爲して唯を魏齊に惡れり。公の罪の一なり。魏齊の我を厠中に辱しむるに當り、公止めざりき。罪の一なり。更々酔ひて我に溺せり。公其れ何ぞ忍べるや。罪の三なり。然れども公の死することなきを得る所以の者は縑袍戀戀として故人の意有るを以てなり。故に公を釋すと。乃ち謝して罷む。入りて之を昭王に言ひ、罷めて須買を歸す。須買范唯

昭王時。而申包胥爲楚卻吳軍。楚王封之。以荆五千。包胥辭不受。爲丘墓之。於荆也。今唯之先人丘墓亦在魏。公前以唯爲有外心於齊。而惡唯於魏齊。公之罪一也。當魏齊辱我於厠中。公不止。罪二也。更醉而溺我。公其何忍乎。罪三矣。然公之所。以得無死者。以縋袍懸懸。有故人之意。故釋公。乃謝罷。入言之昭王。罷歸。須買。須買辭於范唯。范唯大供具。盡請諸侯使與坐堂上。食飲甚設。而坐須買於堂下。置豆其前。令兩黥徒夾而馬食之。數曰。爲我告魏王。急持魏齊頭來。不然者我且屠大梁。須買歸以告魏齊。魏齊恐亡走趙。匿平原君所。

范唯既相。王

范唯既に相たり。

王穉范唯に謂ひて曰く、事知るべからざる者三有り。奈何と

に辭す。范唯大いに供具し、盡く諸侯の使を請ひ、與に堂上に坐し、食飲甚だ設けて、須賈を堂下に坐せしめ、莖豆を其の前に置き、兩の黥徒をして夾みて之を馬食せしめ、數めて曰く、我が爲めに魏王に告げて、急に魏齊の頭を持ちて來れ、然らずんば、我且に大梁を屠らんとすと。須賈歸りて、以て魏齊に告ぐ。魏齊恐れ、亡けて趙に走り、平原君の所に匿る。

- 立身出世するを天に上るに喻へていふ
- 夷俗の地。祭は類に同じ、北方の胡地の名
- 生殺を思ふ儀に
- せよ
- 請に通ず
- 却の正字
- 先朝の墳墓
- 惡言す、罵る
- 屎を掛く
- 酒食の用意
- 名と豆と類へたる馬の飼料
- 二人の諷刺に處せられたる因縁

稽謂范唯曰。事有不可知者三。有不可知奈何者亦三。宮車一日晏。駕是事之一也。可知者一也。君卒然捐館舍。是事之二也。不可知者二也。使臣卒然填溝壑。是事之三也。不可知者三也。宮車一日晏。駕。君雖恨。於臣。無可奈何。君卒然捐館舍。君雖恨。於臣。亦無可奈何。使臣卒

もすべからざる者亦た三有り。宮車一日晏駕す。是れ事の知るべからざる者の一なり。君卒然として館舍を捐つ。是れ事の知るべからざる者の二なり。臣をして卒然として溝壑に填せしむ。是れ事の知るべからざる者の三なり。宮車一日晏駕すれば、君臣を恨むと雖も、奈何ともすべき無し。君卒然として館舍を捐つれば、君臣を恨むと雖も、亦奈何ともすべき無し。臣をして卒然として溝壑に填せしむれば、君臣を恨むと雖も、亦奈何ともすべきなしと。范唯懼ばす。乃ち入りて王に言ひて曰く、王穉の忠に非ずんば能く臣を函谷關に内るゝ莫く、大王の賢聖に非ずんば、能く臣を貴くする莫し。今臣の官相に至り、爵は列侯に在り。王穉の官、尙ほ謁者に止まる。其の臣を内れしの意に非ざるなりと。昭王王穉を召し、拜して河東の守となす。三歳計を上らず。又鄭安平に任ず。昭王以て將軍と爲す。范唯是に於て家の財物を散じて、盡く以て嘗て困見せし所の者に報す。一飯の徳も必ず償ひ、睚眦の怨も必ず報ゆ。范唯秦に相たるの

二年、秦の昭王の四十二年、東韓の少曲高平を伐ちて之を抜く。

- 君王崩ずること。晏は晩なり、臣子の心にはなほ宮車富に測して嘆く出づべしとするの意
- 死すること
- 死して溝壑に躬を埋む、自己の死をいふ謙辭
- 諸侯の爵に列せり、列侯は諸侯
- 勳業、賑救、司獄、政訟等の取調書
- 鄭安平の舊恩を思ひ自ら保護して推舉す
- 厄は厄に同じ、困しむ
- 疑は眼を擧ぐるをいひ、眼は忤ちひ厭るをいふ。如何に價かの怨みも必ず報ゆるをいふ

然填溝壑。君雖恨於臣。亦無可奈何。范唯不憚。乃入言於王曰。非王稽之忠。莫能內臣於函谷關。非大王之賢聖。莫能貴臣。今臣官至於相。爵在列侯。王稽之官。尚止於謁者。非其內臣之意也。昭王召王稽。拜爲河東守。三歲。不上計。又任鄭安平。昭王以爲將軍。范唯於是散家財物。盡以報所嘗困厄者。一飯之德。必償。唯既之怨。必報。范唯相秦二年。秦昭王之四十二年。東伐韓。少曲高平拔之。

秦昭王聞魏齊在平原君所。欲爲范唯必報其仇。乃詳爲好書。遣平原君曰。寡人聞君之高義。願與君爲義。願與君爲秦昭王聞魏齊在平原君所。欲爲范唯必報其仇。乃詳爲好書。遣平原君曰。寡人聞君之高義。願與君爲義。願與君爲

公と爲す。齊の桓公管夷吾を得、以て仲父となす。今范君も亦寡人の叔父なり。范君の仇君の家に在り。願はくは人をして歸りて其の頭を取りて來らしめよ。然らずんば吾君を關より出さざらんと。

- 伴る
- 野みを通ずる書回
- 太公望呂尚
- 函谷關

秦見昭王。昭王與平原君飲數日。昭王謂平原君曰。昔周文王得呂尚。以爲太公。齊桓公得管夷吾。以爲仲父。今范君亦寡人之叔父也。范君之仇在君之家。願使人歸取其頭。來。不然。吾不出君於關。

平原君曰。貴而爲友者爲賤也。富而爲交者爲貧也。夫魏齊者勝之友也。在固不出也。今又不之在。臣所昭王乃遣趙王平原君曰。貴而爲友者爲賤也。富而爲交者爲貧也。夫魏齊者勝之友也。在固不出也。今又不之在。臣所昭王乃遣趙王

書曰。王之弟在秦。范君之仇魏齊在平原。君之家。王使人疾持其頭。來不。然吾舉兵而伐趙。又不。出王之弟於關。趙孝成王乃發卒。圍平原。君家急。魏齊夜亡。出見趙相虞卿。虞卿度趙王終不可說。乃解其相印。與魏齊亡。問行。念諸侯莫可以急抵者。乃復走大梁。

卒を發して平原君の家を圍むこと急なり。魏齊夜亡け出でて趙の相虞卿を見る。虞卿趙王の終に説くべからざるを度り、乃ち其の相印を解き、魏齊と亡けて間行す。諸侯を念ふに以て急に抵るべきもの莫し。乃ち復た大梁に走り、信陵君に因りて以て楚に走らんと欲す。信陵君之を聞き、秦を畏れ、猶豫して未だ見ること肯せず、曰く、虞卿は何如なる人ぞやと。時に侯嬴旁に在りて曰く、人固より未だ知り易からず。人を知るも亦未だ易からざるなり。夫の虞卿屬を蹠み、簞を擔ひて、一たび趙王に見えて白璧一雙黄金百鎰を賜はる。再び見えて拜せられて上卿となる。三たび見えて卒に相印を受け、萬戸侯に封せらる。此の時に當り天下争ひて之を知る。夫の魏齊窮困し、虞卿に過ぎるや、虞卿敢へて爵祿の尊を重んぜず、相印を解き、萬戸侯を捐てて間行す。士の窮を急にして公子に歸するに、公子何如なる人と曰ふ。人固より知り易からざるなり。人を知るも亦未だ易からざるなりと。信陵君大に慙ち駕して野に如きて之を迎ふ。魏

欲因信陵君以走楚。信陵君聞之。畏秦猶豫未肯見。曰。虞卿何如人也。時侯嬴在旁曰。人固未易知。知人亦未易也。夫虞卿蹠簞擔登一見趙王。賜白璧一雙黄金百鎰。再見拜爲上卿。三見受相印。封萬戸侯。當此之時。天下争知之。夫魏齊窮困。過虞卿。虞卿不敢重爵祿之尊。解相印。捐萬戸侯。而間行。急士之窮。而歸公子。公子曰。何如人。人固不易知。知人亦未易也。信陵君大慙。駕如野迎之。魏齊聞信陵君之初難見之。怒而自剄。趙王聞之。卒取其頭予秦。秦昭王乃出平原君歸趙。

齊信陵君の初め之を見るを難りしを聞き、怒りて自剄す。趙王之を聞き、卒に其の頭を取りて秦に與ふ。秦の昭王乃ち平原君を出して趙に歸へす。

● 富貴になりても昔の貧賤なる友を捨てずして友として交るは貧賤なりし時の情誼深ければなり  
● 平原君の字 ● ひまを凝ひて忍び行く、ひまかに隠れ行く ● 高靴を履く ● 竹の笠を荷ふ ● 人が我が人物器量を知ること固よりやすからず、又我れ他人の人物器量を知ること易からず

昭王四十四年。秦攻韓。汾陰拔之。因城河上。廣武。後五年。昭王用應侯謀。縱反。

昭王の四十四年、秦、韓の汾陰を攻めて之を抜く。因りて河上の廣武に城く。後五年昭王應侯の謀を用ひ、反間を縦ちて趙を賣る。趙其の故を以て馬服子をして廉頗に代りて將たらしむ。秦大いに趙を長平に破り、遂に邯鄲を圍む。已にして武安君白起と隙有り、言ひて之を殺す。鄭安平に任じ將として趙を撃たしむ。